

地域社会の文化遺産から探るイスラーム陶器の文化的変遷

著者	佐々木 達夫, 佐々木 花江
雑誌名	平成19年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究成果報告書
巻	2004-2007
ページ	71p.
発行年	2008-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/46601

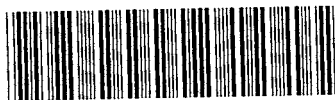
地域社会の文化遺産から探る イスラーム陶器の文化的変遷

課題番号 16401016

平成16年度～平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))
研究成果報告書

金沢大学附属図書館

平成20年3月



1300-04363-6

代表者 佐々木 達夫
(金沢大学文学部教授)

本書は、平成16年度～平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書である。
課題番号 16401016「地域社会の文化遺産から探るイスラーム陶器の文化的変遷」

1. 研究組織

研究代表者 : 佐々木達夫 (金沢大学文学部教授)
研究分担者 : 佐々木花江 (金沢大学埋蔵文化財調査センター準教授)
研究協力者 : Dr. St. John Simpson (Curator, British Museum)
研究協力者 : Dr. Sabah Abboud Jasim (Director, Sharjah National Museum)

2. 交付決定額(配分額)

(金額単位:千円)

	直接経費	間接経費	合計
平成16年	3,700	0	3,700
平成17年	3,500	0	3,500
平成18年	2,100	0	2,100
平成19年	1,800	540	2,340
総計	11,100	540	11,640

3. 研究発表

(1) 学会誌等

今回プロジェクトにおける研究発表を掲載する。本研究開始以前の研究は、準備段階の項目で関連する論文を掲載した。

佐々木達夫・佐々木花江 2008「オマーン湾の中世港町遺跡コールファッカン―第4次～第6次発掘―」『今よみがえる古代オリエント・第15回西アジア発掘調査報告会報告集』103-107.

佐々木達夫・佐々木花江,2007「中央アジア陶器の共通性と地域性」『第14回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』36-44.

山内和也・佐々木達夫・佐々木花江・野上建紀,2007「バーミヤーンの日干しレンガ積み建築の一例」『金大考古』59:32-37.

Tatsuo Sasaki and Hanae Sasaki, 2007, The early Islamic evidence found at A'Ali "Twenty Years of Bahrain Archaeology (1986-2006)"33.

佐々木達夫・酒井中・野上建紀, 2007「青手の粗い素地について」『陶説』656:67-69.

佐々木達夫, 2007「仏教石窟バーミヤーンの景観保存」『金大考古』58:1-5.

佐々木達夫, 2007「シルクロードのイスラーム陶器研究再開」『土車』115:3.

佐々木達夫, 2007「趣旨説明; 中世末～近世の貿易陶磁流通の諸問題」『貿易陶磁研究』27:1-3.

佐々木達夫, 2007「ペルシア湾・オマーン湾遺跡出土の陶磁器編年」『西アジア考古学の編年 日本西アジア考古学会十周年記念連続シンポジウム』50-56.

佐々木達夫・佐々木花江, 2007「マサフィ砦の発掘・2006年」『日本西アジア考古学会 第12回総会・大会要旨集』60.

- 佐々木達夫・佐々木花江, 2007「ディバ農園内中世遺跡の踏査と第1次発掘調査」『金大考古』56:6-10.
- 佐々木達夫, 2007「オマーン湾岸北部地域の遺跡出土陶磁器」『金沢大学文学部論集史学・考古学・地理学篇』27, 203-282.
- 佐々木達夫, 2007「西アジアに輸出された14～15世紀の東南アジア陶磁器」『青柳洋治先生退職記念論文集・地域の多様性と考古学・東南アジアとその周辺』雄山閣、23-36.
- 佐々木達夫, 2007「イスラーム陶器の研究と成果」『西アジアのやきものとガラスを語る』愛知県陶磁資料館、1-18.
- 佐々木達夫, 佐々木花江, 2007「アラブ首長国連邦マサフィ砦の発掘 2006 年」『平成 18 年度今よみがえる古代オリエン特・第 14 回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、105-110.
- 佐々木達夫・佐々木花江, 2006「ササン・ウマイア朝時代のハレイラ島を文化環境で解釈する」『第 13 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』45-56.
- 佐々木達夫, 2006「アッバース朝と唐の陶磁器生産技術の交流」『日本オリエン特学会第 48 回大会研究発表要旨集』46.
- 佐々木達夫, 2006「アラビア半島港町遺跡の食料残滓が語るもの」『生業の考古学』338-351, 同成社.
- 佐々木達夫, 2006「中世末～近世の貿易陶磁流通」『日本貿易陶磁研究会第 27 回研究集会資料集』1-2.
- 佐々木達夫・佐々木花江, 2006「マサフィ砦の発掘と保存修復」『金大考古』53:6-17.
- 佐々木達夫, 2006「アラビア半島の泥レンガ砦・保存と修復（上・下）」『北陸中日新聞』4 月 30 日, 5 月 7 日
- 佐々木達夫・佐々木花江, 2006「フジェイラ首長国のイスラーム時代遺跡踏査」『金大考古』52:6-15.
- 佐々木達夫, 2006「ジュルファール出土陶磁器の重量」『金沢大学文学部論集史学・考古学・地理学篇』26:51-202.
- 佐々木達夫, 2006「2005 年古陶磁科学技術国際討論会」『東洋陶磁』35:138-140.
- 佐々木達夫, 佐々木花江 2006「ポルトガルが襲った中世港町遺跡 コールファッカンの発掘 2001～2005 年」『今よみがえる古代オリエン特・第 13 回西アジア発掘調査報告会報告集』80-84.
- 佐々木達夫, 2005「ペルシア湾と砂漠を結ぶ港町」『港町と海域世界』269-296, 青木書店
- 佐々木達夫, 2005「地域歴史遺産の保存」『金沢大学大学教育開放センター紀要』25, 17-32.
- 佐々木花江, 佐々木達夫, 2005「アルバニア・マケドニアのヘレニズム～ビザンツ時代遺跡と出土品」『第 12 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』76-82.
- 佐々木達夫, 佐々木花江, 2005「発掘資料解釈と景観復元によるジュルファールの都市的性格検証」『オリエン特』48-1:26-48.
- 佐々木達夫, 佐々木花江, 2005「地中海の博物館にある九谷焼」『金大考古』50:19-22.
- 佐々木達夫, 2005「ルリーヤ砦出土 13 世紀末のイスラーム陶器」『西アジア考古学』6:151-165.
- 佐々木達夫, 2005「ペルシア湾岸遺跡出土の陶磁器」『東洋陶磁』34:13-30.
- 佐々木達夫, 2005「ジュルファールの都市性(研究発表要旨)」『オリエン特』47-2:176-177.
- 佐々木達夫, 2005「アラブ首長国連邦オマーン湾岸のイスラーム時代町跡」『金沢大学文学部論集史学・考古学・地理学篇』25:39-192.
- 佐々木達夫, 佐々木花江, 2005「フジェイラ首長国のフジェイラ町跡」『平成 16 年度今よみがえる古代オリエン特・第 12 回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、92-96.

- 佐々木達夫, 2005 「災害が作る遺跡」『金大考古』 47:8-9.
- 佐々木達夫, 2004 「世界の発掘調査 アラブ首長国連邦」『文化遺産の世界』 15:22-23.
- 佐々木達夫, 2004 「古美術品を見る」『金大考古』 46:4-6.
- 佐々木達夫, 2004 「ジュルファール遺跡の都市性」『オリエント学会第 46 回大会研究発表要旨集』オリエント学会
- 佐々木花江, 佐々木達夫, 2004 「遺跡から復元する中世の港町」『第 11 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』 79-86.
- 佐々木達夫, 2004 「ルリーヤ砦出土 13 世紀末の陶磁器組合せ」『日本西アジア考古学会第 9 回総会・大会要旨集』日本西アジア考古学会、45-48.
- 佐々木達夫, 野上建紀, 佐々木花江, 2004 「ミャンマー窯跡踏査と採集陶磁器」『金沢大学考古学紀要』 27:147-246.
- 佐々木達夫, 2004 『ペルシア湾と紅海の都市遺跡比較から見る古代海上貿易史研究』金沢大学文学部、304 頁.
- 佐々木達夫, 佐々木花江, 2004 「シャルジャ首長国のコールカルバ町跡—17～19 世紀の漁村—」『平成 15 年度今よみがえる古代オリエント・第 11 回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、72-77.

(2) 口頭発表

平成 20 年

- 3 月 16 日、西アジア発掘報告会、佐々木花江・佐々木達夫「オマーン湾の中世港町遺跡コールファッカン・第 4 次～第 6 次発掘」第 15 回西アジア発掘調査報告会
- 1 月 31 日、日本オリエント学会・金沢大学考古学・金沢大学埋蔵文化財調査センター、共催講演会「中央アジアの遺跡と陶器」佐々木花江「ウズベキスタンのイスラーム陶器」、佐々木達夫「バーミヤーン出土のイスラーム陶器」

平成 19 年

- 5 月 12 日、佐々木達夫「ペルシア湾・オマーン湾遺跡出土の陶磁器編年」西アジア考古学会
- 6 月 9 日、佐々木達夫「コールファッカン遺跡の発掘」西アジア考古学会総会ポスター発表、天理大学
- 8 月 9 日、古代学協会・金沢大学文学部講演会、佐々木達夫「バーミヤーンの石窟・仏教修行と生活住居の横穴」
- 9 月 28 日, Tatsuo SASAKI, Influence and imitation of 9th and 10th century' s ceramics between Mesopotamia and China. Fourth Forbes Symposium on Scientific Research in the Field of Asian Art (September 27 to 29, 2007). Freer Gallery of Art, Washington DC.
- 10 月 24 日、金沢星陵大学、佐々木達夫「文明の十字路アフガニスタン・バーミヤーンの歴史的景観」。
- 11 月 11 日、第 15 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会
- 佐々木花江、佐々木達夫「イスラーム陶器からみる中央アジアの共通性と地域性」
- Sabah Abboud Jasim (Sharjah Museum), Hellenistic Discoveries at Dibba, Emirate of Sharjah - United Arab Emirates
- 11 月 13 日、金沢大学文学部講演会、サバ・ヤシム「アラブ首長国連邦の考古学・最近の発掘成果」
- 12 月 2 日、早稲田大学イスラム科学研究所講演会、佐々木達夫「中央アジア・イスラーム陶器の発

展と技術革新」

12月5日、古代学協会・金沢大学考古学・金沢大学埋蔵文化財調査センター「遺跡出土陶磁器研究の多様性」

佐々木達夫「ジュルファール遺跡の歴史的意義について」

佐々木花江「ジュルファール遺跡の陶磁器が語る海上貿易」

12月9日-12日 Tatsuo Sasaki & Hanae Sasaki, The early Islamic evidence found at A' Ali, "Twenty years of Bahrain Archaeology(1986-2006)" (National Archaeological Museum, Manama, Bahrain)

平成18年

3月4日、西アジア発掘報告会（池袋）、佐々木達夫、佐々木花江「マサフィ砦の発掘」

3月17日18日、「シンポジウム 西アジアのやきものとガラスを語る」愛知県陶磁資料館、佐々木達夫「イスラーム陶器の研究と成果」

佐々木花江「アラブ首長国連邦の遺跡出土のイスラーム陶器」

9月16日、日本貿易陶磁研究会（東京）佐々木達夫「中世末～近世の貿易陶磁流通」

10月14日、佐々木達夫「発掘された遺跡の観光利用」金沢大学大学教育開放センター

10月21日、第13回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会

佐々木花江・佐々木達夫「ササン朝時代のハレイラ島を文化環境で解釈する」

10月28日、日本オリエント学会第48回大会、佐々木達夫「アッバース朝と唐の陶磁器生産技術の交流」

平成17年

7月2日、佐々木達夫「文化財の史跡整備と活用」、金沢大学大学教育開放センター

10月9日、第12回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会、佐々木花江・佐々木達夫「アルバニア・マケドニアのヘレニズム～ビザンツ時代遺跡と出土品」

11月？日、2005 International symposium on Ancient Ceramics（上海）発表

3月12日、西アジア報告会、佐々木達夫「ポルトガルが襲った中世港町遺跡コールファッカンの発掘—2001～2005年—」

平成16年

7月4日、第11回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会、佐々木花江・佐々木達夫「遺跡から復元する古代中世の港町」

4. 研究成果による工業所有権の出願・取得状況

なし

5. 研究成果

研究目的

イスラーム陶器の研究、とくに時期別の種類分類と産地・年代に関する研究を、ペルシア湾岸で発掘調査した遺跡出土品を核として行う。遺跡の年代を知る重要な資料はそこから出土する陶器である。東アジアでは中国陶磁器を基準資料に用いるが、中央アジア・西アジアではイスラーム陶器が広範な地域のどの遺跡からも出土するため、遺跡の年代、居住者の性格を読み解く歴史資料として共通言語の役割を果たしている。イスラーム陶器の産地・年代研究をさらに進めることは遺跡解明や歴史解説に寄与することが明確であり、考古学・美術史学界に基本的な学術的蓄積を与えることとなる。

イスラーム陶器に対する関心は19世紀後半に欧米の個人コレクションの増加で広がり、20世紀初に欧米博物館が陶器収集を進めると同時に展覧会も開催するようになった。イスラーム陶器収集を望む傾向は、展示・研究を進展させると同時に西・中央アジアの広範な地域で遺跡発掘を促した。世界的に見ても広大な都市遺跡；イラクのサマラ、エジプトのフスタートの発掘も1910年代初に始まった。サマラ遺跡出土品は1925年にドイツ人サーレが研究報告書を刊行し、その成果はバイブルのように扱われ、9世紀と断定されたイスラーム陶器の一群はサマラタイプと呼ばれた。現在も博物館の多くがイスラーム陶器展示でサマラタイプ分類・編年を取り入れている。

ここに問題が2つある。1つは、新たな発掘で遺跡から出土した陶器を利用せず、研究に使う資料が美術館に所蔵されたものに限られ、しかもイラン中心に偏った点である。発掘成果が考古学研究レベルでかなり蓄積されたのに、その研究成果を美術館研究者はほとんど利用していない。そのため、イスラーム陶器を理解する理論的枠組みが、実際に遺跡から出土する具体的な陶器を説明さえできず、不明で例外的なものがあまりに多くなったことである。2つは、イスラーム陶器研究の出発となったサマラタイプである。佐々木は種類と編年にかなり修正すべき部分があると考え、いくつかの論文を発表したが、世界のトップクラスの美術館でさえ、展示はまだ20世紀前半に確立された研究成果に基づいている。この2つの問題を解決することは、世界的に見ても現在のイスラーム陶器研究の重要課題である。

仮想理論的枠組みと実際の遺跡出土品が乖離した状態を訂正するには、歴史的事実を示す具体的な遺跡出土品を研究資料とすれば良い。これまで研究者がとった態度、すなわち修正が必要な古い仮想理論に合わせる、あるいは理論に合わない具体的な本当の資料を無視する、ということを止めれば良い。新たな研究の必要性を指摘する研究者はイギリスやアメリカの博物館研究者のなかに数人いる。しかし問題点を指摘しても、遺跡出土品に基づいた理論的研究成果は、資料の制約もあるため未だ発表されていない。佐々木は1970年代にイラン・イラクの遺跡発掘に参加し、1980年代前半はエジプトのフスタート遺跡発掘で中国陶磁器とイスラーム陶器の研究を行い、1980年代後半から現在までペルシア湾岸のイスラーム時代遺跡発掘を継続している。発掘資料は遺跡のある各国博物館に保管・展示され、イスラーム陶器を具体的に研究し、成果を挙げる準備がやっと整った。

サマラタイプの再検討については、バハレーン国やアラブ首長国連邦で9世紀前後と推定した遺跡を佐々木が発掘し、問題提起と仮説を発表した。サマラ出土陶器の再整理も実施し、イギリスやアメリカの博物館所蔵品を実測し新分類案を発表した。それを基礎に他遺跡出土品を加え、イスラーム陶器の8～10世紀の状態を具体的な出土品に語らせる。

イスラーム工芸美術や地域社会生活品の研究分野の一つであるイスラーム陶器の研究は、東アジ

アにおける中国や韓国、日本の陶磁器研究と同様に重要な研究分野であり、比較研究によってアジア物質文化史の理解が深まる。佐々木は1980年代前半に中国陶磁器の研究で文学博士を取得し、その後は西アジアと東アジアの物による文化交流の歴史を探る研究を進めた。今回のイスラーム陶器研究は、東アジアと西アジアでそれぞれに展開してきた遺跡発掘とその出土品の包括的研究の主要な部分を占め、ペルシア湾岸遺跡出土品の包括的研究プロジェクトとなる。

従来の研究経過・研究成果、準備状況等

本研究課題を達成するための基礎となった関連助成研究は次のようである。

今回の研究目的を達成するための基礎となる関連した研究課題を次に挙げる。

科学研究費海外学術調査、1980・1982・1984年、「エジプト・フスタート遺跡の発掘調査」（研究代表者・早稲田大学文学部教授・桜井清彦）の研究分担者。イスラーム都市遺跡を発掘すること、出土した中国陶磁器とイスラーム陶器を資料として海上交通を通じた東西文明交流史が課題であった。遺跡発掘の結果、大量の陶磁器が出土し、それらは中国陶磁器の年代から9～14世紀と判断できた。イスラーム陶器はエジプト陶器が9割を占めて、ペルシア湾からの輸入は少なかった。

科学研究費国際学術調査、1987・1988・1989年、「アラビア海における中国陶磁貿易の考古学調査」（研究代表者・佐々木達夫）。研究経費計17,500千円。ペルシア湾を含めたアラビア海沿岸の遺跡から出土する中国陶磁器を収集・研究すること、併せて同じ遺跡から出土するイスラーム陶器と関連を探ることが目的であった。今回プロジェクトの基礎となる研究であった。インド・モルディブ、スリランカ・バハレン・アラブ首長国連邦・オマーン・イエメンのイスラーム遺跡を踏査し、アラブ首長国連邦ジュルファール遺跡、バハレン国アーリ遺跡でそれぞれ2回ずつ発掘調査を実施した。出土した中国陶磁器とイスラーム陶器の組み合わせ実態を研究する資料が蓄積した。

科学研究費国際学術調査、1993・1994・1995年、「アラブ首長国連邦ジュルファール遺跡の発掘」（研究代表者・佐々木達夫）。研究経費計15,000千円。アラブ首長国連邦の中世都市遺跡ジュルファール遺跡を発掘調査し、海上交通史を考える。7層の生活層に伴う住居跡、それに対応する多数の陶磁器片を入手し、中世ペルシア湾貿易史の具体的様相を明らかにした。発掘面積は広くないが、研究成果の点では世界トップクラスの発掘と評価されている。イスラーム陶器研究の資料も増加し、ジュルファール遺跡は世界的に見てもイスラーム陶器研究の最適地の一つとなった。

文部科学省科学研究費基盤研究(B)(2)海外学術調査、2000・2001・2002・2003年、「ペルシア湾と紅海の都市遺跡比較から見る古代海上貿易史研究」（研究代表者・佐々木達夫）。研究経費計15,200千円。古代中世の都市遺跡を比較することによって、地域間の海上貿易による交流を探る。都市遺跡の平面的特徴と建築素材比較、出土した陶磁器の組み合わせを中心に、海上貿易の果たした役割を具体的に究明した。ペルシア湾と紅海を結ぶオマーン湾岸の都市遺跡の発掘調査も数カ所で実施し、交流を示す陶磁器を資料化している。この調査でもイスラーム陶器の蓄積がかなり進展した。

今回の研究は佐々木が以前に発掘した陶磁器や踏査で採集した陶磁器が研究資料の核となる。イスラーム陶器研究で欧米人研究者と異なり、遺跡出土品を核にするという研究方法は、アラビア半島各国政府や現地博物館に期待され、研究成果のみならず文化財の保存修復や展示公開にたいする国際的協力でも成果を挙げた。

中近東文化センター・出光美術館によるエジプト都市遺跡発掘に分担者として参加。1985年「フスタート遺跡の発掘調査」（代表・三上次男）、1986年「ツール遺跡の発掘調査」（代表・三上次男）。

都市遺跡発掘と出土陶磁器の研究が進んだ。

三菱財団1992・1993年「アラビア半島の中世港湾都市遺跡出土品の調査研究」(研究代表者・佐々木達夫)。研究経費計4,000千円。中世港湾都市遺跡の調査を実施した。イエメンのアデン湾岸、アラブ首長国連邦シャルジャ国及びオマーン国のオマーン湾岸遺跡踏査が主要な調査である。ペルシア湾岸から紅海入り口に至るアラビア海沿岸の遺跡と出土品を概観的に把握することができた。イスラーム陶器の研究資料も増加した。

三菱財団研究助成、1998年「東西海上交易史の比較研究・ペルシア湾と紅海」(研究代表者・薮勇造、分担者・佐々木達夫)。研究経費 2,000千円。ササン朝・初期イスラーム時代のアラビア半島沿岸の歴史的特質をより具体的に明らかにする研究である。文献・都市遺跡・出土陶磁器を比較検討し、ペルシア湾岸遺跡と紅海岸遺跡の様相に相違点が多いことを指摘し、その理由に両地域の貿易関係が薄いことを指摘した。比較資料が増加した。

鹿島学術振興財団研究助成1998・1999年「イスラーム勃興期前後のペルシア湾と紅海の都市文化交流史研究」(研究代表者・薮勇造、分担者・佐々木達夫)。研究経費計4,500千円。イラン側ペルシア湾港市遺跡の踏査を主に行い、併せてアラビア半島側の遺跡でも出土資料調査を行った。革命以来、研究が止まっていたイラン港市遺跡出土の陶磁器分類と産地推定で成果を挙げた。

研究を開始する前の準備状況。 主要な研究資料は2つある。1つは、佐々木がペルシア湾岸で20年間にわたって発掘調査した遺跡出土陶磁器である。アーリ遺跡、ジャジラット・アル・ハレイラ遺跡、ジュメイラ遺跡、ジュルファール遺跡、ルリーヤ砦遺跡、コールファッカン砦遺跡、コールファッカン町遺跡、コールカルバ町遺跡、ハムリア遺跡、フジェイラ遺跡、ビソナ遺跡など。2つは、欧米人が主に発掘・採集し博物館等の施設に保管されている遺跡出土陶磁器である。研究されていない遺跡出土品が現地博物館に保管され、その他に著名な遺跡であるサマラ遺跡やシラーフ遺跡の出土資料など欧米に保管される資料を含む。いずれも遺跡調査と資料調査を継続中であり、総括研究の最終段階に到達している。

研究資料の保管と研究場所。 佐々木が発掘した資料は各国立博物館に保管され、一部展示されており、保管場所でさらに研究を遂行する。バハレン国立博物館はアーリ遺跡出土陶磁器を収蔵庫に保管。アラブ首長国連邦シャルジャ首長国立博物館はルリーヤ砦、コールファッカン砦、コールファッカン町跡、コールカルバ町跡、ハムリア遺跡で発掘した陶磁器を保管。アラブ首長国連邦ラッセルカイマ首長国立博物館はジュルファール遺跡、ジャジラット・アル・ハレイラ遺跡で発掘した陶磁器を保管。アラブ首長国連邦ドバイ首長国ジュメイラ遺跡研究所はジュメイラ遺跡で発掘した陶磁器を保管。アラブ首長国連邦フジェイラ首長国立博物館はフジェイラ遺跡、ビソナ遺跡で発掘した陶磁器を保管。その他、欧米人が発掘した資料が各地の現地博物館、及び欧米の博物館に保管されているため、遺跡出土品を保管する博物館も研究場所となる。発掘資料については、いずれの資料も現地博物館において、佐々木が問題なく使用できる。欧米博物館資料については、これまでも資料化を行ったことから、問題がないと判断できる。

海外共同研究者について。 各国立博物館に研究協力者がいるが、海外共同研究者は大英博物館とシャルジャ国立博物館の研究者それぞれ1名である。共に日本に招待し共同研究を進めている。佐々

本も相手方博物館を訪問し、共同研究を実施しており、2003 年にもロンドン、アラブ首長国連邦で共同研究を実施しており、準備は整っている。

本研究開始以前に発表した関連論文等

- 佐々木達夫、吉良文男、佐々木花江、2003「ミャンマー陶磁の発見」『貿易陶磁研究』23:106-123.
- Sasaki, T. & Sasaki, H., 2003, Southeast Asian Ceramic Trade to the Arabian gulf in the Islamic Period, “Archaeology of the United Arab Emirates” Trident Press, London, 253-262.
- 佐々木達夫、佐々木花江、2003「オマーン湾岸のコールフアッカシ」『平成14年度今よみがえる古代オリエント・第10回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、86-90.
- 佐々木達夫、佐々木花江、2002「アラビア半島に広がるミャンマー青磁の発見」『金沢大学考古学紀要』26:1-11.
- 佐々木達夫、佐々木花江、2002「アッバース朝白濁釉陶器に与えた中国白磁碗の影響」『金沢大学考古学紀要』26:64-75.
- 佐々木達夫、佐々木花江、2002「唐代外銷白瓷影響的斯蘭白陶」『中国古代白瓷国際学術検討会論文稿』上海博物館、368-369,
- 佐々木達夫、2002「西アジアの陶磁」『東洋陶磁史』東洋陶磁学会、301-309.
- 佐々木達夫、2002「遺跡出土の破片が語るイスラーム陶器の変遷と流通」『東洋陶磁史』東洋陶磁学会、310.
- 佐々木達夫、佐々木花江、2002「ルリーヤ砦の構造と出土品」『平成13年度第9回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、55-57.
- 佐々木達夫、佐々木花江、2002「オマーン湾岸のルリーヤ砦」『平成12年度第8回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、92-96.
- 佐々木達夫、佐々木花江「アラビア半島の考古学研究会(2000年)」『西アジア考古学』2:139-146, 2001
- T. Sasaki & H. Sasaki, South east Asian Ceramic Trade to the Arabian Gulf in the Islamic Period, “First International Conference on the Archaeology of the UAE” 66-67, 2001
- T. Sasaki & H. Sasaki, Excavations at Luluyyah Fort, Sharjah, U. A. E., “Tribulus” 11-1: 10-16, 2001
- 佐々木達夫、佐々木花江「イスラーム時代の交易を探る：シャルジャ首長国、ルリーヤ遺跡の第1・2次発掘調査」『西アジア考古学通信』10:5-6, 2001
- 佐々木達夫、佐々木花江「ハレイラ島の発掘—1998年—」『金沢大学考古学紀要』25:118-169, 2000
- 佐々木達夫、佐々木花江「ハレイラ島の発掘調査—1998年度—」『第6回西アジア発掘調査報告会・報告集』109-113, 1999
- 佐々木達夫『陶磁器、海をゆく』増進会出版社、1999
- 佐々木達夫「アラブ首長国連邦の考古学博物館」『金沢大学資料館だより』14:3-4, 1999
- 杉村棟、佐々木達夫「中央アジアの陶磁器」『シルクロード学研究』7:5-18, 1999
- 杉村棟、佐々木達夫「カザフスタン・オトラル遺跡陶器調査報告」『シルクロード学研究』7:46-53, 1999
- 佐々木達夫、野上建紀「トルクメニスタン出土陶器調査報告」『シルクロード学研究』7:104-145, 1999
- 佐々木達夫「物の記述—内側と外側—」『美術史におけるアルケオロジーの諸相』（平成9-10年度科学研究費基盤研究成果報告書）25-35, 1999

- 佐々木達夫「イスラームの染付」『東洋陶磁』28:43-54, 1999
- 佐々木花江、佐々木達夫, 2003「物を使用した場所の検討ーコールカルバ町跡の景観復元ー」『第10回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』69-80.
- Sasaki, H. & Sasaki, T., 2002, Myanmar green ware—the kiln sites and trade to the Indian Ocean in the 15-16 centuries, “Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa”, 26:12-15.
- 佐々木花江、佐々木達夫, 2002「ペルシア湾北岸遺跡と採集陶磁器」『金沢大学考古学紀要』26:27-47.
- 佐々木花江、佐々木達夫, 2002「緬甸青瓷, 其窯跡及在 15 至 16 世紀中向印度洋地区的出口貿易」『古陶瓷科学技術国際討論会論文集』5, 上海科学技術文献出版社, 589-597, 11 月
- 佐々木花江、佐々木達夫, 2002「ジュメイラ遺跡 2002 年」『第9回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』85-95.
- 佐々木花江、佐々木達夫「サーサーン朝後期ハレイラ島出土陶器の産地」『第8回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会』36-49, 2001
- 佐々木花江、佐々木達夫「アラビア半島シャルジャ首長国のルリーヤ砦」『第7回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会』70-78, 2000
- 佐々木達夫、物の記述—内側と外側—『美術史におけるアルケオロジーの諸相』（平成9-10年（金沢大学文学部教授）度科学研究費基盤研究成果報告書）25-35, 1999
- 佐々木達夫、イスラームの染付『東洋陶磁』28:43-54, 1999
- 佐々木達夫、かりそめの都サーマッラー『文化遺産』6:18-21, 1998
- 佐々木達夫、佐々木花江、1997 Excavations at Jazirat Al-Hulayla, Ras Al-Khaimah, U.A.E., Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 24:99-196, 1998
- 佐々木達夫、酒寄淳史、楠寛輝、陶磁器素地成分は部位により違いがあるか『金沢大学考古学紀要』24:204-208, 1998
- 佐々木達夫、酒寄淳史、楠寛輝、画像処理法による陶磁器素地の定量化と産地推定『金沢大学考古学紀要』24:209-223, 1998
- 佐々木達夫、大瀧敏夫、波頭桂、サーレ著 サマラの陶器(4)『金沢大学考古学紀要』24:224-242, 1998
- 佐々木達夫、West Asian Archaeological Conferences, 1997-98 held at Kanazawa, Oxford, London and Sydney, 『金沢大学考古学紀要』24:243-252, 1998
- 佐々木達夫、酒井中、楠寛輝、画像処理法によるハレイラ遺跡火災倉庫出土陶器の産地推定『日本文化財科学会第15回大会研究発表要旨集』162-163, 1998
- 佐々木達夫、海を通して交流した古代文明『季刊河川レビュー』102: 38-44, 1998
- 佐々木達夫、14 世紀の染付と釉裏紅はどのように出土するか『檜崎彰一先生古希記念論文集』真陽社、467-477, 1998
- 佐々木達夫、湾岸の交易都市—ハレイラ遺跡—『平成8年度・古代オリエント世界を掘る』古代オリエント博物館, 84-90, 1998
- 佐々木達夫、交易都市の発掘『季刊考古学』61:60-63, 1997
- 佐々木達夫、波頭桂、金沢大学資料館所蔵考古学資料紹介(4) 伝ベツレヘム出土ランプ:2『金沢大学資料館だより』10:1-5, 1997
- 佐々木達夫、酒寄淳史、画像処理法による陶磁器素地の定量化と産地推定『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』88-89, 1997

- 佐々木達夫、ウマイア・アッバス朝のアラビア湾岸住居『住の考古学』同成社, 244-257, 1997
- 佐々木達夫、湾岸の交易都市『第4回西アジア発掘調査報告会』古代オリエント博物館, 36-37, 1997
- 佐々木達夫、湾岸の交易都市遺跡の調査（1995年）『平成7年度西アジア史研究のデータベース化に関する総合的研究』クバプロ, 45-52, 1997
- 佐々木達夫、佐々木花江、1995 Excavations at Jazirat al-Hulayla, Ras al-Khaimah, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 23:37-178, 1996
- 佐々木達夫、大瀧敏夫、波頭桂、Umayyad and Abbasid finds from the 1994 Excavations at Jazirat al-Hulayla, The University of Kanazawa, 23:179-222, 1996
- 佐々木達夫、大瀧敏夫、波頭桂、サマラの陶器(3)『金沢大学考古学紀要』23:223-247, 1996
- 佐々木達夫、ラッスルハイマ・ハレイラ遺跡の発掘調査『UAE』22:19-21, 1996
- 佐々木達夫、湾岸の交易都市遺跡の調査－1994年－『平成6年度西アジア史研究のデータベース化に関する総合的研究』クバプロ, 52-58, 1996
- Sasaki, T., Technical studies on the ceramics from the archaeological sites in West Asia, Shanghai research society of science and technology of ancient ceramics, 267-273, 1995
- 佐々木達夫、物が語るインド洋の交流『文明と環境 10巻 海と文明』朝倉書店, 109-130, 1995
- 佐々木達夫、佐々木花江、1994 Excavations at Jazirat al-Hulayla, The University of Kanazawa, 22: 1-74, 1995
- 佐々木達夫、1911-1913年発掘のサマラ出土陶磁器分類『金沢大学考古学紀要』22: 75-165, 1995
- 佐々木達夫、山崎一雄、二宮修治、佐々木花江、タイ・ラムポー出土陶磁器の産地研究『金沢大学考古学紀要』22:166-185, 1995
- 佐々木達夫、佐々木花江、イエメン・ヘリッジ出土陶磁器の科学的研究『金沢大学考古学紀要』22:186-200, 1995
- 佐々木達夫、大瀧敏夫、波頭桂、サマラの陶器(2)『金沢大学考古学紀要』22:201-236, 1995
- 佐々木達夫、海の道『アジアの古代文明を探る－歴史と水の流れ－』クバプロ, 96-107, 1995
- 佐々木花江、佐々木達夫、ペルシア湾岸出土の中国銭『出土銭貨』9: 112-116, 1998

シンジョン・シンプソン

St. John Simpson（大英博物館中近東部長）

- ‘From Mesopotamia to Merv: reconstructing patterns of consumption in Sasanian households’, *Culture through Objects: Ancient Near Eastern Studies in Honour of P. R. S. Moorey* (Potts, T., Roaf, M. & Stein, D., eds), 347-75, Oxford: Griffith Institute, 2003.
- ‘Sasanian beads: the evidence of art, texts and archaeology’, *Ornaments from the Past: Bead Studies after Beck* (Glover, I. C., Hughes-Brock, H. & Henderson, J., eds), 59-78, London/Bangkok: The Bead Study Trust, 2003.
- ‘Other recorded sites’, *Ancient Settlement in the Zammar Region: Excavations by the British Archaeological Expedition to Iraq in the Saddam Dam Salvage Project, 1985-86, Volume One* (Ball, W., ed.), pp. 170-179, Oxford: BAR International Series 1096, 2003.
- Queen of Sheba: Treasures from ancient Yemen* (Simpson, St J., ed.), London: BMP 2002.

サバ・ヤシム

Sabah Jasim (シヤルジャ国立博物館長)

The Excavation of a camel cemetery at Mleiha, Sharjah, United Arab Emirates. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 10: 69-101, 1999.

"Neolithic Jewellery from Al-Buhais 18" *Proceedings of Seminar of Arabian Studies* 1999. (With H. Kieswetter and H. P. Uerpmann). Volume 30, 137-146, 2000.

"Excavations in the Emirates of Sharjah". *Proceedings of 1st Congress on Archaeology of the Ancient Near East* 1998, Rome, Italy, 2000.

"Stone Age Nomadism in S.E. Arabia – Palaeo – Economic Considerations on the Neolithic Site of Al Buhais 18 in the Emirate of Sharjah, United Arab Emirates". (With M. Uerpmann and H. P. Uerpmann). *Proceedings of seminar for Arabian studies* 30: 223-234, 2000.

"Seeing Through the Dunes: Geophysical Investigations at Muweileh, an Iron Age Site in the United Arab Emirates". (With P. Magee and others). *Journal of Field Archaeology*. Volume 27N.2: 117-129 (Boston University), 2000..

"The Excavations at Mleiha, Sharjah, United Arab Emirates", *Arabian Archaeology and Epigraphy*. Volume 12: 103-135, 2001.

"A 2nd Millennium Settlement at Khor Fakkan, Sharjah, United Arab Emirates." *Isimo Volume III*, University of Anotoma, Spain, 2003.

Archaeology of The UAE, 10th Annual Meeting of The Japan Society for Hellenistic-Islam Archaeological Studies, 30-38, 2003, Kanazawa.

研究計画・方法

平成16年度の計画

① ペルシア湾岸を中心とする地域、アラビア半島とイランの遺跡出土陶磁器を研究する。バハレン、カタール、アラブ首長国連邦、オマーン、イエメン、及びイランの遺跡出土品を整理分類し、イスラーム陶器の地域的な特徴と組み合わせを抽出する。佐々木が発掘した遺跡出土品は各地の博物館で保管している。イスラーム陶器に集中して、時期別の種類・産地・年代を研究する。他の人が採集した陶器についても、層位と組み合わせ、出土量等が不明という制約はあるが、部分的に資料化して研究に使用する。新たな遺跡踏査も実施し、継続的な資料採集を行い、欠けている時期を埋める研究資料として利用する。

各遺跡出土品を比較検討しながらイスラーム陶器を地域的時代的に分類し、その基盤の上に遺跡出土品の広がりや組み合わせから産地・年代を研究する。具体的な遺跡出土資料を核にイスラーム陶器史を研究するのは世界的に見ても数少なく、佐々木のペルシア湾岸遺跡出土品を使った研究は注目されている。その成果はこれまでのイスラーム陶器研究を飛躍的に発展させるものとなるだろう。遺跡研究の基礎となる年代の基礎資料となるイスラーム陶器研究はイスラーム考古学に果たす役割が大きいばかりでなく、中国陶磁器を介して東アジアとの技術・貿易交流史研究に具体的な方法と資料を提供するものとなる。

これらの研究において、美術館保管品がすでに失った資料価値である地域性と同じ層位の出土状態を重視する。個々の資料の美術性・芸術性ではなく、歴史資料としてのグループ的価値に重点を置く、すなわち一貫した考古学方法で美術的資料も遺跡出土資料として取り扱う研究である。この

特色が独創的と呼べるかどうか躊躇するが、実際に用いる資料群が膨大な量の発掘品であり、成果が出た後では例のない研究と評価されると思う。

平成16年度は佐々木が発掘した遺跡出土イスラーム陶器のうち、バハレン国立博物館、ラッセルカイマ国立博物館、シャルジャ国立博物館、フジェイラ国立博物館に保管されたものを重点的に研究する。研究方法は博物館倉庫内に積み上げた資料から今回の研究に使う陶器を抽出し、それらを撮影、実測、記述し、さらに関連資料についての調査となる。博物館内での作業が中心となるが、新たな遺跡踏査も現地情報を得ながら実施する。9世紀から18世紀に至るイスラーム陶器の変遷資料をコンピュータ内に並べ、これまで続けてきた科学的分析や文様研究も日本国内で併せて実施する。こうした資料をもとに型式分類による第1次仮説的編年表を作成する。同時に細部にわたる小さな問題点をとり上げた論文を作成することによって、編年表の基になる年代研究を地道に継続する。年代研究は同時出土の中国陶磁器との比較研究に依るところが大きい、イスラーム陶器の組み合わせ枠が出来れば、イスラーム陶器独自の年代を提案できるようになる。年度末にはこうした点に重点をおいた仮説を提案する。

② 海外共同研究者は2名いる。大英博物館シンジョン・シンプソンはメソポタミア、イラン、中央アジアでササン・イスラーム時代の遺跡を発掘し、出土品研究で成果をあげている。欧米ではすでに19世紀末から資料収集を行い、大英博物館には大量の資料が保管されている。佐々木とシンプソンの最近の遺跡発掘成果を持ち寄り、保管される大量の資料と比較検討することで、資料の見直しと理論構築を進める。2003年夏には大英博物館でササン・イスラーム陶器ワークショップを佐々木・シンプソンが主催した。不明点や問題点が続出し、問題を共有することができ、今後の研究を進めるうえで意義深い会であった。16年度から研究会開催を定例化したいと思う。

シャルジャ国立博物館サバ・ヤシムはメソポタミア、アラビア半島の各地で発掘調査を実施し、多くの資料研究に従事している。資料の提供・地域研究者との接触と同時に、現地土器の研究面では今回プロジェクトの担当者となる。イスラーム陶器は施釉陶器を主な資料とするが、施釉陶器の下のクラスには膨大な数の土器が存在する。地域に生活する研究者が長年にわたって継続研究することが土器研究には欠かせないことが、土器担当の主な理由である。すでに佐々木と共同研究を継続しているが、2003年夏には金沢大学に招待し、ヘレニズム～イスラーム時代の遺跡研究に共同研究の成果を挙げている。

③ 調査旅費は(1)遺跡出土陶磁器が保管されるペルシア湾岸を訪問する航空券・滞在費にあてる。夏休み、冬休み、春休み期間を主に利用して現地滞在し、資料整理分析する。平成16年度は現地渡航費が主要な支出となる。(2)併せて関連資料分析のため、中央アジア、欧米博物館の調査研究に旅費を使用する。(3)海外共同研究者と現地及び金沢等で共同研究する旅費に使用する。

平成17、18年度の計画

平成17年度・平成18年度もペルシア湾岸を中心とする地域で遺跡出土品を整理分類し、イスラーム陶器の地域的な特徴と組み合わせ抽出を継続する。イスラーム陶器の地域的時代的な特徴を明らかにしながら、遺跡出土品の産地・年代を継続研究する。

これらの研究において、美術館保管品がすでに失った資料価値である地域性と同じ層位の出土状態を重視する。個々の資料の美術性・芸術性ではなく、歴史資料としてのグループ的価値に重点を置く、すなわち一貫した考古学方法で美術的資料も遺跡出土資料として取り扱う研究である。この

特色が独創的と呼べるかどうか躊躇するが、実際に用いる資料群が膨大な量の発掘品であり、成果が出た後では例のない研究と評価されると思う。

前年度の資料の補足調査も含めるが、新たな整理を行い、目的とする年度内ではほぼ全体資料の検討を終了する。研究方法は前年度と同じであるが、倉庫内資料から研究資料となる陶器を抽出し、撮影、実測、記述する。

イスラーム陶器の変遷資料がコンピュータ内で資料化され、資料紹介に加えて産地分類表、年代別の種類を並べた編年表がより詳細になり、最終的なイスラーム陶器編年表を作成する。

海外共同研究者との共同研究は意見交換・資料分析で成果を挙げるのみでなく、「メソポタミア施釉陶器」、「アラビア半島土器」という論文になる予定である。研究継続に伴う研究会開催が定例化される。

調査旅費は、遺跡出土陶磁器が保管されるペルシア湾岸への交通費・滞在費が主となる。現地で資料整理分析、研究を行う。海外共同研究者も現地及び金沢で共同研究する。

研究成果の刊行は研究終了年の翌年に刊行助成費等を得て行いたい。

平成19年度の計画

イスラーム陶器の実態を遺跡出土品から探ることが研究の目的である。イスラーム陶器の研究、とくに時期別の種類分類と産地・年代に関する研究を、ペルシア湾岸で発掘調査した遺跡出土品を核として行う。遺跡の年代を知る重要な資料はそこから出土する陶器である。東アジアでは中国陶磁器を年代推定基準資料に用いるが、中央アジア・西アジアではイスラーム陶器が広範な地域のどの遺跡からも出土するため、遺跡の年代、居住者の性格を読み解く歴史資料として共通言語の役割を果たしている。イスラーム陶器の産地・年代研究をさらに進めることは遺跡解明や歴史解読に寄与することが明確であり、考古学・美術史学界に基本的学術的蓄積を与えることとなる。

平成16～18年度に実施した計画とほぼ同様の研究計画を本年度も継続して実施する。佐々木がすでに発掘調査した遺跡出土イスラーム陶器のうち、シャルジャ国立博物館、フジェイラ国立博物館に保管されたものを重点的に研究する。研究方法は博物館倉庫内に積み上げた資料から今回の研究に使う陶器を抽出し、それらを撮影、実測、記述し、さらに関連資料について調査する。博物館内での作業が中心となるが、新たな遺跡踏査も現地情報を得ながら実施する。

年代研究は同時出土の中国陶磁器との比較研究に依るところが大きいが、イスラーム陶器の組み合わせ枠が出来れば、イスラーム陶器独自の年代を提案できるようになる。細部にわたる小さな問題点を取り上げた論文を作成することによって、編年表の基になる年代研究を行う。7世紀から19世紀に至るイスラーム陶器の変遷資料をコンピュータ内に並べ、これまで継続してきた科学分析や文様研究も日本国内で併せて実施する。こうした資料をもとに型式分類による第1次仮説的編年表を最終年度となる今年度は完成させる。

研究実績概要

(平成16年度)研究実績概要

イスラーム陶器は博物館に収集された後、20世紀初からヨーロッパ人研究者によって論文と概説本が著された。研究当初からエジプトのフスタート遺跡（カイロ）出土品が資料として取り上げら

れ、一方でイランの各地から集められた陶器がヨーロッパの博物館に収められて研究資料となった。20 世紀後半にイギリス人によりイスラーム陶器概説本が書かれ、現在まで定説となっている。しかし、遺跡出土品にはさまざまなものがあり、考古学の研究成果を使用したイスラーム陶器の論文と実態に基づく概説本が必要である。

こうした研究状況を背景に、今年度は地域社会のなかで遺跡出土のイスラーム陶器を研究することを目的に、フジェイラ町跡とコールファッカン町跡の 2 カ所の発掘を実施した。フジェイラ町跡は 18～19 世紀のイスラーム陶器が出土し、地方農村のイスラーム陶器の使用状況と出土品の実態を明らかにできた。コールファッカンは 14～15 世紀の港町跡を発掘し、中国陶磁器や東南アジアの陶磁器とともに出土するイスラーム陶器を資料化した。

以前に発掘したジュルファール遺跡の性格を港町としてとらえる研究を行い、大量に出土した 14～15 世紀のイスラーム陶器の整理を継続している。白濁釉陶器については整理が完了した。ルリーヤ砦出土のイスラーム陶器については、13 世紀末の基準資料となることを提示した。これらの研究成果は学会発表を中心に公表しているが、それらは西アジア考古学会誌に掲載する予定で、投稿中の論文もいくつかある。

(平成 17 年度)研究実績概要

平成 17 年度に実施した研究は、平成 16 年度の継続が中心である。とくに今年度は佐々木がすでに発掘調査した遺跡出土イスラーム陶器のうち、シャルジャ国立博物館、フジェイラ国立博物館に保管されたものを重点的に研究した。研究方法は博物館倉庫内に積み上げた資料から今回の研究に使う陶器を抽出し、それらを撮影、実測、記述し、さらに関連資料について、他の博物館の調査を行った。博物館内での作業が中心となったが、新たな遺跡踏査も現地情報を得ながら実施した。9 世紀から 18 世紀に至るイスラーム陶器の変遷資料をコンピュータ内に並べ、これまで続けてきた科学的分析や文様研究も日本国内で併せて実施した。こうした資料をもとに型式分類による第 1 次仮説的編年表の仮作成が進んでいる。同時に細部にわたる小さな問題点を挙げた論文をいくつか作成した。年代研究は同時出土の中国陶磁器との比較研究に依るところが大きく、中国国内の竜泉窯跡出土品の調査も実施した。イスラーム陶器の年代と産地研究が進んでいる。欧米博物館に保管されている関連陶器資料の調査も実施した。

(平成 18 年度)研究実績概要

平成 18 年度の研究は平成 17 年度に実施した研究の継続が中心である。国外ではマサフィ砦、ディバ町跡、コールファッカン町跡を発掘した。第 5 次調査となるコールファッカン港町遺跡ではイスラーム陶器と中国・ミャンマー陶磁器が建物室内及び水タンクから出土し、イスラーム陶器の編年研究に良好な資料を提供した。

国内研究会でいくつかの成果を発表した。「ヘレニズム～イスラーム考古学研究会」ではハレイラ島出土の青釉陶器の編年的問題を提起し、ササン・ウマイア朝時代の陶器編年を検討した。「オリエント学会」ではアッバース朝と唐代の陶磁器の技術的交流の実態を具体的な陶器を示して提起した。「西アジア考古学会」ではマサフィ砦から出土した近世陶磁器の世界的な広がりを紹介した。それらの資料を含めて愛知県陶磁資料館「ペルシアのやきもの展」で開催したシンポジウムで、イスラーム陶器の問題点と研究成果をまとめた。

今年度に論文となった成果。「オマーン湾岸北部地域の遺跡出土陶磁器」(『金沢大学文学部論集史学・考古学・地理学篇』27,203-282) は、これまで調査した遺跡出土の陶磁器のうち、オマーン湾岸の資料を整理し報告した。「西アジアに輸出された 14～15 世紀の東南アジア陶磁器」(『地域の多

様性と考古学』雄山閣、23-36)は、東南アジアの陶磁器がペルシア湾の遺跡からどのように出土するかをまとめ、イスラーム陶器との組み合わせ、量的関係、種類と器種の関係を層位別に描き出した。「ジュルファール出土陶磁器の重量」(『金沢大学文学部論集史学・考古学・地理学篇』26:51-202)は前年度末(2006年3月)の発表であるが、前年度の研究実績概要に取りあげなかったもので、今回紹介する。遺跡出土陶磁器を種類別・層位別に重量を計測する仕事を成し遂げ、イスラーム陶器の全体的な様相を知る基本的資料を提供した。

(平成19年度)研究実績概要

イスラーム陶器の時期別の種類分類と産地・年代に関する研究を、ペルシア湾岸・オマーン湾岸で発掘調査した遺跡出土品、ウズベキスタンとアフガニスタンの中央アジアの施釉陶器分類調査資料を核として行った。中央アジア・西アジアではイスラーム陶器が広範な地域のどの遺跡からも出土するため、遺跡の年代、居住者の性格を読み解く歴史資料として共通言語の役割を果たす。佐々木がすでに発掘調査した遺跡出土イスラーム陶器のうち、シャルジャ国立博物館、フジェイラ国立博物館に保管された資料を整理し研究資料として用い、バハレーンの国立博物館、アフガニスタンのバーミヤーン、ウズベキスタンのサマルカンドの施釉陶器を資料化した。博物館倉庫内資料から研究に使う陶器を抽出し、撮影、実測、記述した。新たな資料をコールファッカン遺跡発掘によって採集した。年代研究はイスラーム陶器の組み合わせ枠が出来ると年代提案ができるようになる。細部にわたる小さな問題点を取り上げた論文を作成し、編年表の基になる年代研究を行う。7世紀から19世紀に至るイスラーム陶器の変遷資料をコンピュータ内に並べ、これまで続けてきた科学分析や文様研究も日本国内で併せて実施した。こうした資料をもとに型式分類によるイスラーム陶器編年表を作成した。

SUMMARY OF RESEARCH RESULTS

Islamic pottery found at the archaeological sites in West Asia and Central Asia is the most abundant materials and they become the historical evidence to know the local and common life styles of the area. Archaeological pottery from the site reflects the cultural relationship and the trade condition. To find new material and historical evidences, excavations at Khorfakkan old town and fort sites, Masafi fort, Dibba town site has been carried out and Islamic pottery were found much. At the same time, survey at Samarqand in Uzbekistan, Bamiyan in Afghanistan, A'Ali in Bahrain has also carried out to collect many traded and local Islamic pottery.

The finds were sorted and analyzed for the reconstruction of the history of Islamic pottery, by studying the types, assemblage, qualities, quantities, and the provenances of traded and local Islamic pottery. Chronology of Islamic pottery found from archaeological sites is now studied and we can give more precise date and periods to the many no datable archaeological sites in West and Central Asia.

イスラーム陶器の文化・技術的変遷

佐々木 達夫

1. 西アジアの陶磁とは

西アジアや中央アジア、北アフリカも、焼き物の歴史は長い。世界最初の施釉陶器誕生地は北アフリカあるいは西アジアといわれ、西アジアで施釉陶器は発展を遂げた。青釉と多彩釉のアルカリ釉で、軟質素地の陶器が西アジアの特徴である。

地域名をとってペルシア陶器、シリア陶器、トルコ陶器、エジプト陶器、あるいは王朝名や時代名をとってアッバース朝陶器、セルジューク朝陶器、ビザンツ陶器などと呼ばれる。日本ではペルシア陶器あるいはイスラーム陶器、欧米でもイスラーム陶器と呼ばれ、色鮮やかな文様に富む陶器で美術的な評価が高い。西アジア地域を中心に発展した陶磁器の時代的な特徴や地域的な違い、他世界との技術や文様の交流、器形の模倣などから、人々の生活、地域間の交流を探る考古学資料としても重要である。

地域伝統と周辺地域の交流のなかから、8～9世紀に新たな種類の施釉陶器がメソポタミアで生まれ、以後西アジア全体に広がり、イスラーム陶器と総称される。それらは東アジア陶磁全体と対比できる陶器である。時代による装飾技法の変遷もみごとだが、細かく見れば、各地独自の色合いや文様に特色がある。東アジアや周辺地域との盛んな交流で器形や文様が変化することにも興味を惹かれる。

豊富な色彩、多彩なデザイン、巧みな文様の組み合わせは、他の地域の陶器には類をみないほどである。西アジアと東アジアでは素材となる素地の粘土（坯土）が違う。西アジアの粘土はナトリウム、カリウム、マグネシウムなどを多く含む。そのため、高火度に耐えられず、釉も低火度釉となる。低火度釉は金属酸化物による呈色がしやすく、鮮やかな色彩に発色する。

こうした自然的・技術的な制約の下に、王侯貴族や富裕都市民に保護され、イスラーム陶器は発達した。宗教的用途の器には人物・動物文が禁じられ、許された範囲内で変化を求めたことが、色彩とデザインの華やかさを生むことにもなった。

陶工は宮廷のパトロンに呼ばれ、また材料のある場所を求め、繁栄する都市に移動し、技術者と技術の移動が盛んだった。長距離を移動する隊商貿易で運ばれる陶器は各地で模倣され、広いイスラーム世界に類似性と統一性さえ生み出すこととなった。イスラーム陶器は西アジアで花開いた豊富な色彩と文様に飾られた生活に根ざした工芸美術である。

2. 西アジア陶器・イスラーム陶器の歴史概観

イスラーム陶器とは、七世紀以降に西アジア、中央アジア、エジプト、北アフリカを中心とするイスラーム圏（主に西アジアや中近東と呼ばれる地域）で焼かれた陶器をさす。

オリエントは、世界最古の施釉陶器が発達した地域である。エジプトで前四千年紀末に青色のアルカリ釉をかけた小さな陶製品が生まれた。前二千年紀中頃に、青釉下に黒褐色でナイルの蓮と鳥をあしらった皿等の彩画陶器が作られた。エジプトの施釉技術はシリア、メソポタミアを経て東方の地域に伝えられ、前一千年にイラン高原でも施釉陶器が作られる。レザイエ湖南のジヴイエで発見された大量の彩釉陶器は、紀元前九世紀から八世紀の作品例を示す。青釉の地に黄釉で彩文し

た二彩、白を加えた三彩、青緑釉一色のもの、青・黄・白・黒で彩画するもの等、多彩な陶器である。アケメネス朝ペルシア時代になると、華やかな彩釉陶器は姿を消し、青釉陶器が主流となる。パルティア時代は、青釉と白釉の施釉陶器が作られ、ローマ帝国の緑・褐色の鉛釉陶器の影響も受けた。こうした傾向はササン朝ペルシアでも変わらず、青釉陶器を主とし、他に緑・褐色の釉と型押、貼付の技法を用いた。しかし、ペルシア湾岸の発掘では、ササン朝、ウマイア朝の遺跡から青緑釉陶器だけが出土し、褐釉陶器は出土しない。

七世紀はイスラームが興り、サラセン帝国が成立する。七世紀後半から始まるウマイア朝では、ササン朝のアルカリ釉の青緑釉陶器が主となり、ビザンツの鉛釉型押緑・褐釉陶器も受け継ぐ。アラビア世界にペルシアにとって代わる施釉陶器生産の伝統がなかったためである。イスラーム圏の陶器様相が一変し始めるのは、八世紀中頃に興ったアッバース朝である。中国から輸入した唐白磁の影響で白釉が流行し、白磁碗の器形を写して白釉陶器を大量に生産した。帝国の隆盛が貨幣経済の急激な発達をうながし、通貨材料の不足が金銀器製造を禁止させ、金属器に代わる陶器の需要が高まったと言われるが、海陸両路による貿易の隆盛が都市を繁栄させ、施釉陶器の需要層を増加させたのが主要因であろう。

九世紀初頭に、艶やかな色彩に富む、幻想的で魅惑的なイスラーム陶器が誕生する。イスラーム陶工は独自に工夫し、釉薬に鉛と錫を加えた白釉を作り、白釉陶器の器面にコバルトで文様を描き、白釉藍彩陶器を生む。銅の緑色も使い、緑彩陶器や藍緑彩陶器も生まれる。文様はロータスや椰子の葉が描かれ、様式化していく。幾何文も使う。緑・黄褐色の多彩釉陶器には刻線の文様を付け、多彩釉刻線文陶器を生み、西アジア地域の代表的な種類に発展する。アッバース朝の陶器の素地はまだ単味の陶土を用いる。メソポタミアやエジプトで九世紀にイスラーム世界独特の銅・銀の還元作用で金属器のように表面が輝くラスター彩陶器や、数は少ないが金属器を模したような緑・褐釉型押文陶器を作る。

東イランや中央アジアなどのアッバース朝東方地域でも、多彩釉陶器や多彩釉刻線文陶器の他に、次のような陶器が作られた。淡紅色の素地に黄白地（化粧土）を施し、緑・黄・紫黒色で文様を描き、黄味をおびた透明釉で上を覆う黄白地彩文陶器。地色が濃黄色か淡黄色の黄地彩画陶器。白下地に紫黒・褐・緑色で文様を描き、クリーム色の透明釉をかけた白地黒彩・緑彩陶器。黒・紫褐釉や紅色下地に白・赤・黄褐土を盛り上げた色地彩文陶器。白下地に朱・黄・紫褐・紫黒・緑で文様を描き、黄味をおびた透明釉をかけた白地彩画陶器、等である。東方地域の影響を受けたマザンデラン地方サーリーで多く発見された十世紀から一一世紀の白地彩画陶器は、白下地に紫褐・黄・朱・白で文様を描く。

一一世紀後半のセルジューク朝に入ると、製陶技術は飛躍的に進歩し、白色素地が作られる。一二世紀には、釉、器形、装飾技法、デザインに大きな変化が現れる。素地は耐火度と可塑性の強い白系統の複合土が用いられる。素地から離れやすかったアルカリ釉も複合土素地には馴染み、絵付の釉も以前の鉛釉のように流れることもなく、白下地も不要となった。器形も複雑になり、成形も巧みで端正な形となる。釉は透明釉が用いられた。デザインはパルメットやアーカンサス、葡萄のような植物文が連続してイスラーム文（アラベスク、唐草）になる。動物文、植物文、幾何文も併用され、偶像禁止のイスラーム教義のために少なかった人物文も、宗教的な用途以外には盛んに用いられた。十色もの色彩を用いた色絵陶器には、繊細な筆致で叙事詩や叙情詩に歌われた物語絵が描かれた。中国宋の青磁や白磁の輸入と関連する碧青釉や藍釉、白釉の陶器をはじめ、七宝的な手法のラカビ陶器、影絵のような搔落文陶器、きらめくラスター彩陶器、白地に藍・青釉で文様を描

いた白釉藍・青彩陶器も作られた。マザンデラン地方のアーモルでは白地彩画陶器や緑彩刻線文陶器、クルディスターンのガルス地方では搔落文陶器（ガブリ手）、カスピ海西南のアグカンドでは鉛釉の彩画刻線文陶器が作られ、まだアッバース朝陶器の伝統が生きている。

一三世紀中頃、イスラームの都市は蒙古によって荒廃したが、イル汗国建設後は中国陶磁の影響を受け、再び陶器製作が盛んになる。色絵陶器はミナイ陶器から青藍地色絵陶器（ラジュバルディナ陶器）に変わり、下地は青藍釉が好まれ、色彩は紅朱・白・黒・金彩と減少する。青釉や透明白釉の彩画陶器は作り続けられ、黒彩上を青緑釉や碧青釉で覆う釉下彩画陶器がスルタナバード（ソルタナバード）などで生まれる。さらに白釉上を藍彩と黄緑色の細線で描く白釉彩画陶器、白土のデザイン上を黒・藍、黄緑で描き、淡青釉か青白釉をかける青釉白盛り上げ文陶器など、種類が多彩である。一五世紀のティムール帝国時代はイル汗国の伝統を継ぎ、中国染付文様の影響を受け、施釉タイル建築も壮麗をきわめ、一六世紀以降のサファヴィ朝でも中国陶磁器の技法を盛んに採り入れて染付や青釉陶器が作られた。トルコ陶器の色鮮やかな文様の独自性も目を見張るものがある。

華麗で典雅なイスラーム陶器の豊富な色彩、多彩なデザイン、文様の巧みな組み合わせは他に類をみない。王侯貴族や富裕な都市の人々の保護のもとに華やかな世俗美術として発達したためであり、宗教的な用途の器には人物・動物模様が禁じられ、許された範囲内で最大の変化を求めたためだった。盛んな隊商貿易で運ばれる陶器は模倣され、技術者はパトロンの住む都市に集められ、広いイスラーム世界の中に類似性と統一性を生んだ。

3. イスラーム陶器とはどういうものか

3a. 名称と分類

イスラーム陶器とは、七世紀以降、西アジア、中央アジア、北アフリカを中心とする、スペインからシンドという広い範囲で作られた陶器をさす。今のイラク、イラン、シリア、エジプトなどのイスラーム国家がこの地域の中心である。もちろん、西のモロッコ、さらにはスペインも、東のパキスタン、アフガニスタン、北の中央アジア諸国、南のイエメンも入る。宗教的にはインドネシアなどの東南アジアの一部もイスラーム圏となるが、こうした地域で作られた陶器は一般にイスラーム陶器と言わない。世界最大のイスラーム教徒が住むインドネシアの陶器をイスラーム陶器と呼ぶないだけでも、名称の矛盾や問題が明らかである。

イスラーム陶器を作った地域の代表的な宗教はイスラーム教であり、コーランが書かれたアラビア語が大きな影響力をもった。しかし、イスラーム陶器の中心地、西アジア地域でさえ、多くの宗教、言語、そして民族が、同時に存在していた。

こうした状況であるにもかかわらずイスラーム陶器という概念が存在するのは、広い地域の人々を結びつけるイスラーム教が存在したため、そこには共通の思想があり、職人はかなり広い地域を移動でき、工芸品に共通性を生む条件は整っていた。統一された広大な地域が分裂して、各地にイスラーム諸国家が誕生しても、イスラーム教という共通性は存在し続け、技術的な共通性も存在していると言われる。

しかし、イスラーム陶器というのは粗い概念である。地域に根ざす陶磁器を宗教で分類することは矛盾が多い。例えば、日本、朝鮮、中国、ベトナム、タイの陶磁器をひっくるめて、仏教陶磁器という程度のことである。もちろん、仏教陶磁器というような概念は存在しない。しかし、仏教がこの地域だけでないこと、この地域にも仏教以外の宗教があることなど、イスラーム教と同じ状態である。東アジアの陶磁器を儒教陶磁器、神道陶磁器、南アジアの陶磁器を仏教陶磁器と呼ばない

ように、イスラーム陶器という名称も適切ではない。東アジアの陶磁器、東南アジアの陶磁器、西アジアの陶磁器などのような区分はそれなりの意味がある。しかし、中近東陶磁器と呼ぶ場合、英仏から見れば中東だが、ドイツから見れば近東であり、日本から見れば中西となろうか。これも適切ではない。研究が進み、各々の陶磁器の産地が分かれば、それをより狭い地域名で呼ぶことが多くなろう。

日本ではペルシア陶器という呼び方に人気があるが、7世紀にササン朝ペルシアが滅びてイスラームとなってから、すなわちイスラーム陶器の作られた時代にペルシアという国や地域はなかった。今のイランと昔のペルシアの地理的範囲も同じではない。ペルシア陶器は施釉陶器を主に呼ぶが、アケメネス朝及びササン朝のペルシアは土器が主であった。矛盾ばかりであり、いずれも適切な名称ではない。西アジアの陶器というのが現状では妥当な名称である。ただし西アジアという範囲と、同じような種類の陶器の作られた、あるいは使われた範囲がずれているのも明らかである。

陶器の分類で一般的なのは、釉種類や彩画技法、文様技法による分類である。例えば、鉛釉刻線文陶器、錫釉彩画陶器、ラスター彩陶器などである。文様による分類、物に則した分類、時代や地域による分類の方法もある。分類は産地研究が進んでからの大きな課題となる。

以前は特定の名前で呼ばれた陶器が多かった。例えばサーリー手は、マザンデランの小都市サーリーで発見された陶器に与えた名称である。サーリーの他にも発見が相次ぎ、現在この名称は不適当になった。今はジュルジャーンで作った陶器の多くがサーリー手だといわれる。農民陶器と呼ばれる、灰色がかかる下地の上に黄色がかかる緑色と白色スリップで厚く彩画され、黒褐色と赤色顔料で薄く塗られた陶器がある。東ヨーロッパ中世の農民が使う陶器に似ているとレーンが名付けたが、イランの宮殿跡からも出土している。シリア多彩画陶器A類とも呼ぶものである。しかし、シリアやメソポタミアだけが産地であったかどうかは問題となり、地名を付けることは今も難しい。産地と年代が不明瞭な製品の場合、研究史上の苦労が察せられるが問題がある分類が見られる。

施釉陶器の表面に描かれた文様は豊かである。時代的、地域的な変化もある。イスラームにおいては、人物・動物像の美術表現、特に宗教的な人物を描く絵画表現が禁止されたとされることが多い。しかし、イスラームの聖典クルアーンは偶像崇拜の禁止を述べるだけである。実際には人物や動物が日常生活用陶器に描かれており、人物が描かれているから他宗教徒の陶器であるという説は当たらない。

現在一般に普及しているイスラーム陶器の説明の方法は、王朝・国家による時代区分をして、そのなかで特徴のある陶器を取り上げる方法である。しかし、陶器の年代を決定することは容易ではなく、国家による時代区分と陶器の生産年代や継続年代が重ならないことが問題である。

そこで、遺跡から発掘される特徴のある陶器を核として西アジアの陶器を論じることとする。釉や素地、施文法など技術面から名称を付け、類似の産地と時代を推定する。地域的な使用の広がりを遺跡出土品から探る。遺跡出土品から組み合わせを調べ、年代的な継続期間を推定する。こうしていくつかの特徴ある製品の組み合わせが、時代や地域的な広がりを示す代表的な陶器となる。例えばアッバース朝の白濁釉陶器、ラスター彩陶器、青緑釉陶器が核となる組み合わせである。さらにアッバース朝は前期組み合わせに型文陶器が加わり、後期組み合わせに型文陶器やラスター彩陶器が消え多彩釉陶器が加わる。種類と組み合わせが基本となり、遺跡出土品のまとまりを考慮しながら時代や生産地域・使用地域を絞り込んでいく。これまでイスラーム陶器概説で述べられた陶器が歴史的な実態を必ずしも反映していないことがしだいに明らかになると思う。

釉・素地・技術を基本に陶器名称を付ける方法の欠点は、同じ技術が各地に見られる場合、地域

を区別することが難しいことである。研究の進展に伴い、再び特定の名称を与えると便利である。

3b. 窯跡の構造

世界最古の土器を焼く構造的な施設は西アジアに残る。土器生産の初期段階・先ハッスーナ文化期に、地面に楕円形状穴を掘り、中で土器を焼いた跡が発見された。次のハッスーナ文化期は彩文土器生産が本格化し、上下二室で、円筒形状の焼成室の下に燃焼室がある世界最古の構造的窯が登場する。燃焼室上にある焼成室床面に開いた火格子状の孔から上昇する垂直焰で、焼成室内の土器を焼く。初期の上下二室構造円筒形状窯は、新石器時代に西アジア、中央アジア、インド等の広範囲に広がり、中国彩陶を焼いた窯も同じ構造で、アメリカ大陸でも同様の窯跡が発見された。中国はその後、竜窯が主流となり、円筒形状窯は消滅したが、西アジアは基本的構造が同じ伝統的な窯が現代も築かれる。シューシュ（スーサ）発見のササン朝窯跡、シラーフ発見の九世紀から十世紀の窯跡、ニーシャープール発見の十世紀頃の窯跡、メルブ発見のササン朝や十世紀から十一世紀の窯跡、ジュルジャーノ発見の一二世紀から一三世紀頃の窯跡、タハティスレイマン発見の一三世紀から一四世紀の窯跡など、いずれも燃焼室から焰が焼成室床面の孔を通して上昇する類似の構造である。

中世の大型窯は窯詰法が変わる。窯壁の同じ高さに規則的に穴を開け、長い粘土棒を突き刺し、製品を置く簀の子状の台を何段か作る。ニーシャープール、サマルカンド、シャフルヒア、メルブ、ジュルジャーノ、オトラルの窯跡など、イランや中央アジア各地で見られる。現在もナタンズなどで使用される窯詰法である。ただし、小型窯の場合は、窯壁に粘土製棒状焼き台を設置する焼成法と、棒状焼き台がなく床面に製品を置く伝統的焼成法とが中世に用いられた。

3c. 特徴のある白色素地と一般的な赤色素地

イスラーム陶器の特徴の一つ、白色素地（一般にフリットというが不適切）の起源はエジプトにある。エジプト及びメソポタミアで紀元前四千年頃、ファイアンスビーズが誕生したといわれ、以後エジプトやギリシアを中心に施釉ファイアンスがローマ時代まで盛んに作られた。粘土成分がないので轆轤成形が難しく、タイルや人形、護符等の型作り製品が主だが、紀元前二千年紀後半のエジプト新王朝で轆轤成形の容器も一般化し始めた。素地は多孔質である。多くは酸化銅発色のアルカリ透明青釉で覆い、素地を強く美しくする。新王朝から青色だけでなく、銅、鉄、鉛、コバルト、マンガン、アンチモン等を混ぜて青、緑、黒、紫、白、黄色も使われ、装飾技法も発達した。ギリシアでは小さな半地下式の窯で製品を積み重ねて焼成した跡が発掘された。

その後、白色素地（白色複合土、ストンペイスト）が十一世紀に生まれ、一二世紀以降にイスラーム陶器で流行する。セルジューク朝では単味の陶土に加えて、新たに少量の粘土とガラス粉および多くの石英粒を混ぜた白素地の陶器が主流となった。白色素地は一四世紀初頭の歴史家アブ・ル・カシム文書によると、白色粘土一、ガラス一に対し、石英粗粒十を用いる。東アジアの磁器素地と比べると軟質でもろいが、中国磁器に匹敵する白さで、高品質の陶器に用いられ、イスラーム陶器の代表的素地の一つとなった。ラスター彩陶器や青、緑、黒色の彩画陶器素地として、染付写しの素地として、透明釉や透明青釉で覆われ、イラン、シリア、エジプト、中央アジア等で用いた。

なお、もっとも多いイスラーム陶器素地は、紅色粘土である。地球のほぼ全域で見られるのが紅色や赤色の粘土素地であり、西アジアでも一般的な素地である。

3d. 釉薬の特徴

西アジアで古くから用いたソーダ釉は、炭酸ナトリウム、酸化ナトリウム、炭酸カルシウム、酸化カルシウム等のソーダ分を多く含む釉で、アルカリソーダ釉ともいい、低火度釉でソーダ分の多いことが特徴である。ソーダ釉は紀元前四千年頃、エジプトで作られたファリアンスのビーズや石製品に施され、その後エジプトではソーダ釉の青釉が一般的になった。筑波大の常木教授の発掘で、シリアのテル・エル・ケルク遺跡の紀元前六千年から五千七百年頃の層から、白い素地のトルコ青釉ビーズが出土し話題となったが、トルコ石を焼いたことが判明し、まだこの時期には釉薬や白素地がなかったことが推定された。

イラン西北部のアゼルバイジャン地方のハッサンル、ジヴィエ等の地で施釉レンガや施釉陶器が発見され、分析により白釉は炭酸カルシウムを呈色材とするソーダ釉と判明した。紀元前七世紀のアッシリアの粘土板四三枚に釉調合に関する記録がある。四一枚はガラスと灰のアルカリ釉について、二枚が鉛釉についての記述である。新バビロニア、アケメネス朝ペルシア等の施釉陶器やレンガもソーダ釉が主であり、多彩釉には鉛釉も用いる。ササン朝ペルシアの青釉陶器やイスラーム時代の単色施釉陶器もソーダ釉が基本である。ソーダ釉は粘土素地よりもストーンペイストによく付着し、灰釉より銀化しやすい。

銀白色で金属光沢をもつ錫を呈色材とし、不透明な白濁色を呈する釉薬を錫釉という。溶融点を下げるため鉛を含むことが多く、鉛釉とも呼ぶ。錫釉以前の白濁釉は紀元前後頃のパルティア時代に用いられたが、その後は下火となる。八世紀頃、中国白磁の影響で再び白濁釉が生産されるが、当初は以前と同じ石英粒による白濁釉であり、錫釉あるいは鉛釉ではなかった。九世紀頃、メソポタミアで錫と鉛を混ぜた釉が開発され、不透明白濁釉が一般化し、これを一般に錫釉の起源とする。アラブの文献によると、九世紀は錫をマレーシアから運んだ。一四世紀から一五世紀のイラン白釉陶器は一般に錫釉と呼ばれるが、佐々木の分析によると錫と鉛は含まず、石英粒子による白濁釉である。

4. イスラーム陶器の研究史

イスラーム古陶器の収集

イスラームの古陶器として Systematic に収集され始めたのは、19 世紀後半になってからである。19 世紀のヨーロッパはオリエンタリズムが流行し、ヨーロッパがイスラーム文化や美術に関心を寄せた時代であり、19 世紀後半にはイスラーム陶器を組織的に収集するようになった。イギリスの南ケンジントン South Kensington Museum (後のビクトリア・アルバート博物館 Victoria and Albert Museum) は 1870 年頃に、質の高いイスラーム陶器のコレクションを持っていた。その収集に関わったのは Mududoch Smith であった。彼は V & A から購入を依頼され、13～14 世紀のイランラスター彩タイルを 1875 年から収集した。1876 年には早くも千点近くのラスター彩タイルの展覧会を South Kensington Museum で開催している。その他に彼は、今のスコットランド王立博物館 Royal Scottish Museum や Dublin の博物館からも収集を依頼され、1884 年まで収集活動を続けている。Mududoch Smith の収集の多くはイラン滞在の仏人 Jule Richard から購入したものであり、それらはイランのヴァラミン Varamin の Imamzada Yahya、ナタンズ Natanz の 'Abd al-Samad 墓、及びコム Qum の Imamzasa'Ali ibn Ja'far and/or Imamzada Isma'il 等の伝統的建造物や墓から剥ぎ取った施釉タイルであったと推定することが可能である (Masuya T., 1997)。

フランスで少し遅れて 19 世紀末にはルーブル美術館にイスラーム陶器が所蔵され始める。

当時のイギリスは外国品収集に恵まれた政治経済的な情勢にあり、イスラーム陶器を集める人々も出てきた。この頃の個人収集品は、後に博物館に入るものも多かった。こうした背景には、イランに商売を目的として専門的に古陶器を掘り出す人々がいて、骨董市場が賑わっていた。

イスラーム陶器の発掘

1883 年、ロシア人によるサマルカンドの発掘が行われる。都市遺跡から多くの陶器が出土した。1885 年にはサマルカンド東方のアフラシアブ遺跡の発掘もなされた。1908 年にはロシア人 V.L. ヴァトキンがウルグベク天文台跡を発掘している。

イラクでは 1911 年から 13 年にイラクのサマラ遺跡の発掘が行われ、出土陶磁器の報告がドイツ人 F.Sarre によって 1925 年に出版された。その研究成果は、20 世紀のイスラーム陶器研究を支配した感がある。イラクの Kish。1934 年、ライディング発掘。Late 10th or early 11th.

イランのシューシュ(スーサ)、レイ、ニーシャープールなどの発掘は、イスラーム陶器に関する初期の調査として知られる。

スーサは 1875 年から発掘が行われており、遺跡の年代は前 4 千年紀からモンゴル進入までと長期にわたる。かなりの量のイスラーム陶器も発掘されている。なかでも注目を引いたのは、黄色と緑色の釉が掛けられた Splashed ware 壺であった。中に 905-914 年にサマラで鋳造されたと推定される 94 枚のコインが入っていた。年代を推定することが可能な資料として重視され、最近にいたるまで年代推定のできる唯一の資料であった。壺とコインが同時代であると仮定すれば、壺の年代はサマラ・タイプの年代よりも新しくなる。

ニーシャープールは Metropolitan Museum が 1934-48 年に発掘を行った。Wilkinson が 1974 年に報告書を刊行し、出土した陶器のうち、とくに 9-10 世紀の製品の研究が飛躍的に進んだ。

イランの遺跡調査はオーレル・スタイン Mark Aurel Stein(1862-1943)の中央アジア探検からも多くの成果を得ている。1900-01, 1906-08, 1913-16, 1932-36 年の踏査のうち、1932-36 年はイラン踏査であった。ブーシェフル、シラーフ、ミナブ、シャハレ・ダキアヌスなどのペルシア湾岸とその内陸の遺跡も踏査され、発掘もなされた。出土したイスラーム陶器も研究され、報告書を飾る図面は今でも使用できる高水準のものである。

1912 年、エジプトのカイロの旧市、フスタート遺跡の発掘が始まる。欧米のコレクターは競って出土品を収集した。その後も断続的に発掘が行われ、今、世界の各地にフスタート出土のイスラーム陶器が保管されている。イギリス等のヨーロッパは 10 年代に出土品を収集したが、日本は少し遅れて 1922 年に児島虎次郎が出土した破片を購入し、大原美術館蔵品となった。翌年の 1923 年には「エジプト、ペルシア及びトルコ古陶器展覧会」を開催している。その後の調査研究で収集した出光美術館、早稲田大学などの蔵品が増加している。

シリアのラッカの発掘。

その後、各地でイスラーム陶器の発掘が相次いだ。そうした遺跡の中で、イスラーム陶器の研究が進んだことで知られる遺跡は、サマラ、ニーシャープール、スーザ、シラーフ、アル・ラバダ、アカバなどである。この他にも多いらしい。

イスラーム古陶器の展覧会の始まりと研究の進展

20 世紀に入ると収集する人と品数が多くなり、展覧会もたびたび開かれた。1908 年にはイギリスのバーリントン美術クラブ The Burlington Fine Arts Club でイスラーム陶器の展覧会が催され

た。日本でも少し遅れて児島虎次郎が 1922 年にフスタート出土品を購入し、翌 1923 年に大原美術館が「エジプト、ペルシア及びトルコ古陶器展覧会」を開いた。大原美術館は今でも優れた破片資料を保管している。1931 年にはバーリントンハウス The Burlington House で国際ペルシア美術展が開かれた。以後、世界の各地でイスラーム陶器展が頻繁に開催されるようになる。こうした動きに対応するように、イスラーム陶器の研究も行われるようになる。

遺跡発掘品の増加

中央アジアでは、サマルカンドの発掘がロシア人によって 1883 年に、1885 年にはサマルカンド東方のアフラシアブ遺跡の発掘も始まり、都市遺跡から陶磁器が大量に出土した。アフラシアブ遺跡の発掘は現在も続いている。

イランでは、シュース（スーサ）、レイ、ニーシャープールなどの発掘でも、イスラーム陶器が大量に発見された。シュースは 1875 年から発掘が行われ、遺跡の年代は前四千年紀からモンゴル進入まで長期にわたり、多くの研究がフランス人によって発表された。ニーシャープールはメトロポリタン博物館が 1934 年から 48 年に発掘を行った。1974 年にウィルキンソンが報告書を刊行し、出土陶器のうち、とくに 9～10 世紀の研究が進んだ。

イラクでは 1911 年から 13 年にサーマッラー（以下サマラ）遺跡の発掘をドイツ人が行い、1925 年に出土陶磁器の報告書を刊行した。その成果は 9 世紀イスラーム陶器の研究を方向づけた。イラクのキーシュは 1934 年にライリンガーが発掘し、10 世紀後半から 11 世紀初期の陶器が出土した。

1912 年、エジプトのカイロ旧市フスタート遺跡の発掘をエジプト人アリバハガットが始める。欧米のコレクターは競って出土品を収集した。その後も断続的に発掘され、今、世界各地にフスタート出土のイスラーム陶器が保管される。イギリス等のヨーロッパは 1910 年代に出土品を収集したが、日本は少し遅れて 1922 年に児島虎次郎が破片を購入し、大原美術館蔵品となった。

その後、各地でイスラーム陶器を出土する遺跡の発掘が相次いだ。イスラーム陶器の考古学研究が進んだ遺跡として、オトラル、グルガン、シールジャー、ニーシャープール、アフラシアブ、サマラ、アナ、シュース（スーサ）、ラッカ、シラーフ、アル・ラバダ、アカバ、フスタート、ジュルファール、ハレイラ、アーリ、ルリーヤ、バンボールなどがある。西アジアの遺跡出土イスラーム陶器については後に詳述する。

イスラーム陶器のヨーロッパでの使用

イスラーム陶器は、西アジア・中央アジアのイスラーム時代に作られ使われた陶器をさす。隣接するヨーロッパにも輸入され、イタリア、スペインなどでは、陶器を製作するうえで技術や文様の影響を受けた。北方の島国、英国でもすでに 16、17 世紀頃に Popular であったという (Islamic Pottery 800-1400AD, 1969, p.3)。それは、数点のイズニク陶器がエリザベス朝の銀細工師によって飾られていたからである。しかし、現在のイスラーム陶器という感覚とずれている点もある。トルコ陶器もイスラーム陶器の一つである。だが、同じ時代のトルコの陶器を使用していたのであって、当時よりも古いイラクやイランの陶器を觀賞したり、使用したり、研究したのではない。

ロンドン市内の発掘調査とくにテムズ河の埋め立てでは、イスラーム陶器が年代を追って層位的に出土している。

イスラーム陶器の日本での使用

日本の遺跡からもイスラーム陶器が出土している。博多（こうろ館）や太宰府等の北九州の特殊な遺跡から、9～10世紀のメソポタミア青緑釉陶器瓶片のみが出土している。壱岐・原の辻遺跡からも同じ種類が出土している。アッバース朝を中心としたインド洋海上貿易の隆盛が中国を経て日本の国際貿易地まで、イスラーム陶器を運んだのだろう。しかし、こうした製品は当時の人々が使用するために運んだのではなく、積み荷を入れた容器として輸入されたものであろう。中国では、福州の劉華墓から出土しており、輸入したイスラーム陶器を転用して使用したこともわかる。日本でも珍しい美しいものとして、使用されたかもしれない。

その後、日本の遺跡からイスラーム陶器の出土が確認できるのは、江戸時代になる。17世紀のトルコ、イズニク陶器片が加賀藩上屋敷？から出土している。トルコの陶器はヨーロッパでも当時使用されたもので、長崎を通して珍しい物として入り、大藩の前田藩の所有するところになったのであろう。しかし、茶の湯でもオランダ陶器は使用されたが、イスラーム陶器が使用されたり鑑賞された文献記録はない。

長崎の出島周辺を埋め立てた土砂の中からも、イランの染付皿片が出土している。17世紀頃の文様を描いた透明釉下藍彩 stonepaste 素地の鉢片が十片ほど。

イスラーム陶器片が出土 壱岐・原の辻遺跡 福岡県外で初めて（西日本新聞）

長崎県壱岐の国指定史跡・原（はる）の辻遺跡（芦戸、石田町）で、八世紀中期から十一世紀前半とみられるイスラーム陶器片が出土したことが二十八日、明らかになった。イスラーム陶器片の国内出土例は、鴻ろ館跡や太宰府跡など福岡県内だけで、同県以外は初めて。

出土したのは、同遺跡南東部の奈良、平安時代（八、九世紀）の壱岐国の役所「官衙」跡とみられる建物遺構。陶器片は一辺が約二cmの壺の破片。陶器原料の黄灰色を帯びた粘土に、鮮やかなるり色の透明釉を厚くかけた初期イスラーム陶器と分かった。

同じ場所から、中国陶磁器の「ケイ州・定窯系白磁」、「長沙窯系陶磁器」、「越州窯系青磁」の破片も出土した。イスラームと中国の陶磁器片が一緒に出土したのは全国初のケース。

（西日本新聞 1999 年 12 月 29 日）

研究論文や概説書の刊行

イスラーム陶器の研究論文は 20 世紀初頭に現れる。例えば、1909 年にカレキアンとピエルがそれぞれ「ペルシア陶器」と「中近東陶器」を刊行し、1914 年のリヴィエルや 1920 年のペザードのイスラーム陶器総説本、同じ 1920 年にエヴァンスのラスター陶器が刊行された。1925 年のサーレのサマラ報告書は、初期イスラーム陶器の種類を明らかにし、年代を与え、中国の影響を論じるなど、画期的な研究だった。1928 年、ケーヒリンはシュージュやサマラの出土品を使い、中国陶磁がイスラーム陶器に与えた影響を論じた。1932 年、ホブソンもイスラーム陶器の概説書を出した。1939 年、ポーブはペルシア美術研究の？巻で陶器を扱い、ペルシア陶器研究を高めた。

レーン は 1950 年に『前期イスラーム陶器』、1957 年に『後期イスラーム陶器』を刊行し、イスラーム陶器の概説書として長く使われる。イスラーム陶器の体系的な大枠はこの時点で完成したともいえる。ただ、その後の博物館展示はこの体系内でなされたため、実際に遺跡から発掘されるさまざまな種類の出土資料との乖離が起こった。また、現在も問題となっている大部分の論点は、20 世紀前半にすでに登場したことも知られる。その他、ラファエル、エッチングハウゼン、ピンダーウィルソン、ローセンアヨロン、ヘヘルバリ、ケルブラン、ホワイトハウス、ワトソン、ヒイロン、

グラバー、グルーベ、クロウ、ノーセッジ、メイソン、岡崎、三上、杉村、佐々木などをはじめ、多くの研究者が論文や解説書を発表した。しかし、博物館所属研究者の多くはレーンの体系内で解説を行い、それに合わない様々な遺跡出土品の実体研究を考古学者が進めている。両者を包括した研究成果に基づく概説書刊行が待たれる。

日本では、20 世紀後半にイスラーム陶器の研究が現れる。小山富士夫は 1954 年に『世界美術全集 10』でイスラーム陶器を執筆し、1957 年にも『東洋古陶磁』で中近東陶器を記した。三上次男は 1958 年、『世界陶磁全集 15』に「イスラーム陶器」を書き、1961 年に『ペルシアの陶器』を刊行した。これは今、中公新書でも読める手軽な概説書である。三上はその後、『図録ペルシアの陶器』『続図録ペルシアの陶器』『ペルシア陶器の美』『陶器講座 10 ペルシア・エジプト・トルコの陶器』『世界陶磁全集 21 イスラーム』『陶磁体系 48 ペルシアの陶器』などの図録や、論文集『三上次男著作集六イスラーム陶器史研究』を刊行した。

この他、個々の細かな歴史的事実を明らかにし、問題を指摘した論文が世界各地で書かれた。今でも重要性を失わない研究があり、概説や一般書、展覧会カタログの基礎となっている。

イスラーム陶器を研究した論文が書かれ始めたのは、20 世紀初頭のことである。ラスターの研究、19??。Rivière,H.,*La Céramique dans l'Art Musulman*, 2 Vols, Paris, 1914 が初期の研究である。1932 年、R.L.Hobson が *A Guide to the Islamic Pottery of the Near East* を刊行した。1939 年、Arthur Upham Pope が *Survey of Persian Art*, 6 巻を刊行し陶器の巻はポープが編集している。1950 年、Arthur Lane は *Early Islamic Pottery* を刊行し、続いて 1957 年にレーンは *Later Islamic Pottery* を出版した。こうした全体をまとめた書物の他に、個々の事実を検討した論文が多く書かれた。今でも重要性を失わない研究が多い。現在も問題となっている大部分の論点は、20 世紀前半にすでに登場している。その後、いくつかの専門的な研究書が著され、同時に、新たな事実を究明し問題を指摘した論文が数多く書かれた。そうした研究を利用して、普及書・一般書や展覧会のカタログなども多数刊行された。

イスラーム陶器の研究史を飾る人々の業績をながめることにしよう。いずれも素晴らしい論文である。

Sarre, 1925. サマラの報告書。初期イスラーム陶器の種類を明らかにしたこと、具体的な年代を与えたこと、中国との技術的な影響を具体的に論じたことなど、画期的な研究であった。

R.Koechlin, 1928. スーザやサマラの出土品を使い、中国陶磁器がイスラーム陶器に影響を与えたことを、詳論した。

1938-39 年に、Arthur Upham Pope が *Survey of Persian Art* を編集し、・巻(1446-1666)で陶器を扱った。ペルシア陶器の様相が飛躍的に明らかにされた。

Arthur Lane は *Early Islamic Pottery* を 1947 年、*Later Islamic Pottery* を 1957 年に刊行した。多くの人々にイスラーム陶器の理解を深めさせる役割を果たし、現在も入門書として、十分に通用する基本的な概説書である。

R.H.Pinder-Wilson, D.Whitehouse, ヘヘルバリ, O.Watson らの研究。

日本では、20 世紀後半に入ってからイスラーム陶器に関する書が刊行され始めた。1954 年?、小山富士夫は『世界美術全集?』10 に「イスラーム陶器」を書いた。三上次男は 1958 年、『世界陶磁全集』15 に「イスラーム陶器」を書き、1961 年に『ペルシアの陶器』を刊行した。岡崎敬、深井晉司、吉田光邦、佐藤雅彦、長谷部楽爾、加藤卓男、杉村棟、岡野智彦などの各氏の研究にも

見るべきものが多い。

最近の研究書をいくつか挙げると次のような傾向が見られる。美術館蔵品の紹介に基づく研究[Crowe 2002]、出土品の自然科学的分析とくに岩石学的研究[Maison]が主となり、産地研究が進んだ。

5. 研究の問題点

19世紀ヨーロッパの西アジア支配は、個人のイスラーム陶器収集を促進し、その蓄積が展覧会を開かせ、骨董市場の繁栄が現地で陶器を掘り出す人を生み、それは学術的な発掘調査のきっかけとなった。発掘調査の成果は、無数の盗掘者を呼び寄せ、陶器愛好家の収集をさらにうながし、さらなる研究の必要性を生んだ。収集、発掘、研究は、互いに深い関連性をもった。

しかし、美術書を飾る美しい陶器は、遺跡と切り離されて収集されたものが多い。発見された場所も不明瞭な場合が多い。学術的な発掘によって得られた陶器は、出土した場所が明らかで一緒に発見された他の陶磁器や生活用具の種類もわかる。だが小破片が多く、美術的に優れたものは少ない。遺跡から切り離された陶器写真を並べ、年代、産地、様式、型式、文様、形態、技術、美などを紹介したガイド本は多い。しかし、根拠や理由、あるいはその見解についての研究史を記さず、学術的な方法を取らないものが多く、内容に関する信頼性は少ない。その大枠はレーンが著した大系であり、実際に遺跡出土の様々な陶器で書かれるイスラーム陶器概説はこれからである。

発見地や同時出土品が不明であっても、陶器そのものから得られる情報は重要である。陶工の名前や年月、ときには製作地を記した陶器が発見される。研究史でそうした陶器の果たした役割は大きい。正確な歴史資料を得るには、考古学的方法で得た陶器が主流となろう。しかし、陶器の年代や産地に関する基礎データはまだ少ない。目的をもった発掘によるデータ蓄積を行い、型式分類、各型式の組み合わせ、同一層位の確認、素地の岩石的分析、化学分析などの方法を取り入れ、包括的研究を進める必要がある。細部を実証的に検討して事実を明らかにし、その成果に基づいてイスラーム陶器概説をまとめ直すのである。東アジアではすでに行われた技術交流や製品の流通圏、生活における使用、地域性や階層性、商品としての価値に関する研究なども課題である。

今後の研究課題と方法

ヨーロッパの中近東支配という政治状況は個人のイスラーム陶器収集を促進し、その蓄積が展覧会を開かせ、骨董市場の繁栄が現地で陶器を掘り出す人を生み、それは学術的な発掘調査のきっかけともなった。発掘調査の成果は、無数の盗掘者を呼び寄せ、それは陶器の愛好家の収集をさらにうながし、一層、研究の必要性を生んだ。収集、発掘、研究は、互いに深い関連性をもっていた。

しかし、多くの美術書を飾る美しい陶器は、遺跡と切り離されて収集されたものが多い。発見された場所も不明瞭な場合が多い。学術的な発掘によって得られた陶器は、出土した場所が明らかであり、一緒に発見された他の陶磁器や生活用具などの種類も分かる場合がある。だが、小さな破片が多く、美術的に優れたものは少ない。この両者の特徴を組み合わせる研究しているのが現状である。

遺跡から切り離された陶器を使用した、年代、産地、様式、型式、文様、形態、技術などを紹介したガイド本は多い。しかし、学術的な方法を取らないものが多く、内容に関しての信頼性はあまりない。

もちろん、発見地や同時出土品が不明であっても、陶器そのものから得られる情報は重要である。

陶工の名前や年月、ときには製作地を書いた陶器が発見される。研究史のうえで、そうした陶器の果たした役割は大きい。

今後、正確な歴史資料を得るには、考古学の方法で得られた陶器を扱うことが主流となるべきである。しかし、作られた陶器の年代、産地に関するデータは未だきわめて少ない。目的を持った発掘によって、データの蓄積を行い、型式分類、各型式の組合せ、同一層位の確認、素地の岩石分析、化学分析などのいくつかの方法で研究を続けることが必要である。

細部を検討した研究によって、わずかずつでも正確な事実を明らかにすること、その成果によってイスラーム陶器の概説をまとめ直すことが、現在の課題の一つである。

参考文献

- 小山富士夫,1954「イスラーム陶器」『世界美術全集 10 サーサーン、イーラーン、イスラーム』85-90, 平凡社
三上次男,1961『ペルシアの陶器』中央公論美術出版
三上次男,1966『ペルシア陶器の美』出光美術館
三上次男,1975『陶器講座 10・ペルシア・エジプト・トルコの陶器』雄山閣
三上次男,1978『陶磁体系 48・ペルシアの陶器』平凡社
三上次男編,1986『世界陶磁全集 21・イスラーム』小学館
三上次男,1990『三上次男著作集六・イスラーム陶器史研究』中央公論美術出版
佐々木達夫,1999『陶磁器、海をゆく』増進会出版社

6. イスラーム陶器の時代的変遷

イスラーム陶器誕生前史

西アジア（オリエント）は、世界で最も古く施釉陶器が発達した地域である。エジプトで前四千年紀頃（前 4200-3650）から青緑色のアルカリ釉をかけた小さな製品が生まれる。一九三〇・四〇年代に英国博物館が発掘したバダリ遺跡から、四千年紀の施釉ステアタイト（石）が発見された。後、石ではなくファイアンス（石英粉末が素地）に施釉するようになる。三千年紀になるとアルカリ釉陶器がエジプトで栄える。前二千年紀中頃には、青緑釉下に黒褐色でナイルの蓮と鳥をあしらった皿などの彩画ファイアンスも作られる。

粘土を素地とした容器（土器）に施釉するのは遅れ、前二千年紀中頃だった。見た目がきれいで、水が漏らないようにという理由だろう。青緑釉を施した陶器は、トルコ南部テル・アッチャナ遺跡六層（前 17 世紀後半－16 世紀前半）から発見され、現在ではこれが古い施釉陶器の例といわれる。

しだいにエジプトの施釉技術はシリア、メソポタミアを経て東方地域にも伝えられ、前一千紀にはイラン高原でも施釉陶器を作る。一九四七年、イラン、クルディスタン地方レザイエ湖南のジヴィエで紀元前九世紀から七世紀の城塞遺跡が発見された。出土品は優れた工芸品が多く、ジヴィエの遺宝と呼ばれた。多彩釉陶器が多数含まれ、ペルシア三彩の起源を示す資料として有名である。青釉地に黄釉で彩文した二彩、白を加えた三彩、青緑釉一色のもの、青・黄・白・黒で彩画するものなど、多彩な陶器である。

メソポタミアでは、アルカリ釉に加えて鉛釉も登場した。前一一世紀から前八世紀にかけてのタイルが発見されている。前七二〇年頃オリエントを統一したアッシリアのニムルド出土施釉煉瓦は、酸化錫で灰白色、鉛とアンチモンで黄色、鉄で褐色、銅で青緑色を出す。バビロンのイシュタール

門施釉煉瓦も同じ施釉技術である。アケメネス朝ペルシア（前五二五～三三〇）は前六世紀末、ダリウスがシューシュとペルセポリスに大宮殿を建てた。バビロニアの工人を呼び寄せて作らせた、鉛釉不透明白釉煉瓦もある。ただ出土品の多くは無釉土器であり、宮廷では金属器が多用されたのだろう。アケメネス朝ペルシア時代は華やかな彩釉陶器が姿を消し、青釉陶器が施釉陶器の主流となる。

イランやメソポタミアを支配したパルティア朝（前二五〇年～後二二六年）は、黄色素地で無文の土器が一般的だが、後半期には青釉や白釉の施釉陶器も作られ、白釉上青彩陶器も見られる。土器は地域的な違いが大きく、彩画土器もある。同じ時代、ローマ帝国領シリアでは緑・褐色の鉛釉陶器が作られた。ササン朝(二二五～六五一年)では、青釉陶器と土器を作った。施釉陶器は西ペルシアのシューシュで多く出土した。シューシュには、三世紀から四世紀はパルティア陶器の伝統を受け継いだ青釉陶器と無文土器があり、彩文土器は少ない。六世紀から七世紀の施釉陶器も素地は黄色で同じだが、器形は変化する。土器は刻線文を施したものが増える。しかし、他の地域では施釉陶器がほとんど見られない。彩画土器はササン朝初期だけ南東ペルシアに少しあり、刻線文土器は南西ペルシアに多い。ササン朝後期の無文瓶や把手付瓶は金属器瓶の写しである。ササン朝の施釉陶器は青釉が主で、それも地域が限られていた。

イスラーム陶器誕生の頃

7世紀、ビザンティンとササンはアラブ帝国に統一される。ウマイヤ朝（六六一～七五〇年）のメソポタミアやイランでは、ササン朝青釉陶器の系統を引く青釉陶器、刻線文で表面を飾る土器、多くの無文土器が作られる。器形は瓶、壺、碗等が主である。アラビア世界にペルシアやビザンティンに代わる美術工芸の伝統がなかったからで、建築なども同じ状態であった。

こうした西アジア陶器の様相が一変するのは、八世紀中頃に興ったアッバース朝からである。イスラーム工芸は、ギリシア・ローマを継承したビザンティンと、古代オリエントを継承したペルシアの伝統融合として誕生する。アッバース朝の隆盛は貨幣経済の発達をうながし、通貨材料の不足は金銀器製造を禁止させ、そのため金属器に代わる陶器の発達の幕明けになったと言われる。メソポタミアは急激に増加した大都市の人口を養う十分な食料を生産できず、ティグリス河や運河、あるいは陸の道を利用して物資を運んだ。その範囲は広がった。海陸両路による貿易の隆盛は、都市を繁栄させ、それは施釉陶器の需要をさらに伸ばした。こうして8世紀末から9世紀初頭には、華麗で艶やかな色彩に富む、幻想的で魅惑的なイスラーム陶器が誕生し、急激に発展したといわれる。

イスラーム陶器誕生頃には、地域的伝統や社会的要因の他に、外的刺激としての中国陶磁の影響もある。多彩釉陶器や白釉陶器は当時輸入された中国の三彩・白磁の模倣品ともいわれる。ただ、中国の三彩や緑彩陶器は盛唐ではなく、唐末五代であった。したがって、いわゆる唐三彩の影響はなかった可能性が高い。中国から輸入した唐白磁の影響で白釉が流行し、白磁碗の器形を写して白釉陶器を大量に生産した。イスラーム陶工は独自の工夫を行い、錫白釉陶器に青色に発色するコバルトで文様を描き、白釉藍彩陶器を生む。緑色に発色する銅も利用され、藍・緑彩陶器や緑彩陶器も作られる。緑・黄褐色の多彩釉陶器には刻線で文様を描き、多彩釉刻線文陶器を作る。この多彩釉刻線文陶器は、西アジア陶器の代表的種類に発展する。イスラーム陶器の表面を覆う多彩な文様の発達は、人物彫刻などを禁じる宗教と関連したといわれる。しかし、初期においては複雑な文様は少ない。文様はロータスや椰子の葉が描かれ、様式化し、幾何文も使う。

中国の白磁を容易に模倣したメソポタミア陶工にとって、文様を写すことは釉薬の違いから難し

いことであった。中国磁器の素地は硬く、刻線文を施すことも容易である。イスラーム陶器の素地は軟らかく、刻線文ははっきりしない場合もあった。文様を覆う釉も、中国のように透明でなく不透明の白濁釉だから、釉下の文様はよく見えない。メソポタミア陶工は、釉上に筆で文様を描くことにした。刻線文を見て、筆描文ができたのである。ただ、中国でも長沙窯等に筆描文があり、製品がイスラーム世界に運ばれたから、長沙窯との関係は否定できない。素地と釉の違いが、文様の違いを決定的にした要因であった。北宋青白磁の刻線文は、イスラーム陶器のスグラヒャトを盛んにしたが、単色釉は多色釉に、細線は粗い線に変化した。

アッバース朝陶器の種類と伝播

アッバース朝は華やかなイスラーム陶器誕生の時代である。成立当初は領土が広大であったが、九四六年以降は政治的統一が崩れ、陶器の地域性も目立ち、メソポタミアと現在のイラン地域は異なる種類の陶器を作った。前代のウマイヤ朝陶器は単色釉であったが、多彩釉陶器の登場がこの時代の特徴である。白釉陶器、白釉藍彩陶器、藍釉陶器、青緑釉陶器、黄褐釉陶器、緑釉陶器、ラスタ彩陶器、多彩釉陶器、多彩釉刻線文陶器などが作られた。この時代の後半、一〇世紀中頃以降にはイラン東部等で化粧土上に彩画した陶器が流行する。

メソポタミアのサマラは八三六年から八九二年までアッバース朝の首都で、二〇世紀初頭に発掘され、出土品は製作年代が明らかな九世紀の陶器としてイスラーム陶器編年研究の基本資料となった。その後、イランのシラーフ遺跡等の発掘で、アッバース朝におけるメソポタミア陶器の編年研究が進展した。東イラン陶器の様相は、ニーシャープールの発掘等によって明らかになった。

アッバース朝陶器は鉛釉陶器が主で、素地もまだ単味の陶土を用いる。緑釉型押文陶器、白釉陶器、白釉上青彩・緑彩陶器、白釉上（白地）多彩釉陶器、白釉上（白地）多彩釉刻線文陶器、青釉陶器が代表的な製品である。いずれもアッバース朝の中心地メソポタミアで作られ、周辺地域の実態は不明瞭である。白釉は錫による呈色といわれるが、錫を含まない白釉も多い。

金属器を模したような緑・褐釉型押文陶器は8世紀から作られた可能性があるが、白釉陶器が主になるのは9世紀からである。イスラーム世界に独特の、銅・銀の還元作用で金属器のように表面が輝くラスタ彩陶器は、エジプトでやや早く作られたが、メソポタミアでは一〇世紀に広まる。ラスタは粘土を黄金に変えるような革新的技術であった。

東イランやトランスオクシアナなどの東方地域でも、多彩釉陶器や多彩釉刻線文陶器の他に、次のような陶器を作った。淡紅色の素地に黄白地（化粧土）を施し、緑・黄・紫黒色で文様を描き、黄味をおびた透明釉で上を覆う黄白釉彩文陶器。地色が濃黄色か淡黄色の黄地彩画陶器。白下地に紫黒・褐・緑色で文様を描き、クリーム色透明釉をかけた白地黒彩・緑彩陶器。黒・紫褐釉や紅色下地に白・赤・黄褐土を盛り上げた色地彩文陶器。白下地に朱・黄・紫褐・紫黒・緑で文様を描き、黄味をおびた透明釉をかけた白地彩画陶器などである。

ビザンツ陶器、エジプト陶器

4世紀にチュニジアの赤化粧土土器（アフリカ版テラ・シギラータ）がビザンツに流通し、模倣品がビザンツやエジプトで一般化した。七世紀からコンスタンチノプルで鉛釉陶器が作られ、イランの多彩釉刻線文陶器の影響を受け、ギリシア・ローマ陶器の流れをくむ陶器を背景にビザンツ陶器が成立した。一一世紀から一二世紀にはイスラーム世界共通の細刻線を施した多彩釉陶器が主流で、一二世紀から幅広刻線多彩釉陶器、単彩釉刻線文陶器、搔落文陶器も現れた。ビザンツ陶器は

イスラーム多彩釉刻線文陶器の技法をイタリアに伝える役割を果たした。一三世紀から一四世紀の陶器工房跡がギリシア北部のセレスで発見され、多彩釉刻線文陶器の廃品や棒状ツク等の窯道具が出土した。

エジプトでも九世紀後半のトゥールーン朝に、コプト・ビザンツの伝統を継ぐ緑釉・褐釉陶器、多彩釉陶器と、メソポタミアの影響を受けた白釉陶器やラスター彩陶器が作られた。多彩釉のファイユーム陶器、中国の青磁や白磁の関連もみられるファーティマ朝陶器やアイユーブ朝陶器、鉛釉多彩釉刻線文のマムルーク朝陶器も独特の器形の陶器を作る。金属器写しの器形も多い。

セルジューク朝陶器

11世紀後半から12世紀前半に栄えたセルジューク朝時代は製陶技術が飛躍的に進歩し、素地や釉、器形や装飾技法、デザインに大きな変化が現れる。素地は耐火度と可塑性の強い白系統の複合土が用いられるようになる。それまでは素地から離れやすかったアルカリ釉も複合土素地には馴染み、絵付のイスラーム陶器釉も以前の鉛釉のように流れることもなく、白下地も不要となった。器形も複雑になり、成形も巧みで端正な形となる。デザインはパルメットやアーカンサス、葡萄のような植物文が連続したイスラーム文（唐草やアラベスク）になる。動物文、植物文、幾何文も併用され、偶像禁止のイスラーム教義のために少なかった人物文も、宗教的な用途以外には盛んに用いられた。

カーシャー、レイなどが陶器の中心地で、一〇色もの色彩を用いた色絵陶器には、繊細な筆致で叙事詩や叙情詩に歌われた物語絵を描く。ほかにも、中国宋青磁や白磁の輸入と関連する碧青釉や藍釉、白釉の陶器をはじめとして、七宝的な手法のラカビ陶器、影絵のような青釉搔落文陶器、きらめくラスター彩陶器、白地に藍・青釉で文様を描いた白釉藍・青彩陶器も作られた。

なお、マザンデラン地方のアーモルでは白地彩画陶器や緑彩刻線文陶器、クルディスターンのガルス地方では搔き落とし文陶器（ガブリ手）、カスピ海西南のアグカンドでは鉛釉の彩画刻線文陶器が作られたといわれ、まだアッバース朝陶器の伝統が生き続ける。

イルハーン朝陶器

13世紀中頃、イスラーム世界の都市は蒙古によって荒廃したが、イル汗国建設後は中国陶磁の影響を受け、再び陶器生産が盛んになる。色絵陶器はミナイ手から青藍地色絵陶器（ラジュバルディナ手）に変わり、生地は青藍釉が好まれ、色彩は紅朱・白・黒・金彩と減少する。青釉や白釉の彩画陶器はなお作り続けられ、黒彩上を青緑釉や碧青釉で覆う釉下彩画陶器がスルタナバードなどで生まれる。さらに白釉上を藍彩と黄緑色の細線で描く白釉彩画陶器、白土のデザイン上を黒・藍、黄緑で描き、淡青釉か青白釉をかける青釉白盛上文陶器など、多彩な種類がみられる。

ティムール朝陶器

15世紀に中央アジア、イラン、イラクを支配したティムール朝はイルハーン朝の伝統を継ぎ、中国染付文様の影響を受け、施釉タイル建築も壮麗をきわめた。一四世紀後半に工芸技術者をダマスカスからサマルカンドに呼び、陶器生産の中心にし、ニーシャープール、マシュハド、タブリーズ等の大都市も生産拠点となった。中国明代染付の影響を受け、白色ストーンペイスト素地上に藍色で彩画し、透明釉をかけた透明釉下藍彩陶器が流行する。この時代の釉は透明釉と青釉が主となる。ストーンペイスト素地の他に黄色素地も用いた。透明釉下藍彩陶器のほかに透明釉下藍黒彩陶器、透

明釉下緑彩陶器、青釉下黒彩陶器、青釉下黒彩細刻線文陶器、透明釉下黒彩細刻線文陶器、青釉陶器等を多く作った。

14世紀後半は藍彩より緑、黒彩が主で、一五世紀前半は藍色で幾何文と植物文の組合せ文や中国風蔓草文を描く。一五世紀後半の藍彩文様は、細線の丁寧な中国風文様に加え、太線の簡略な植物文や幾何文も現れ、複数の産地の存在と地域化が推測される。藍と黒で彩画し、黒地に細刻線文を施した陶器が増加し、中国風文様から地域性の強い文様へ変容する。また、青釉下黒彩陶器の量が一五世紀後半に急激に増加することもジュルファール遺跡出土品から判明した。中国染付文様受容の時代的变化が見える。

一四四四年銘の透明釉下藍彩陶器壺、一四七三年マシュハド製という銘がある透明釉下藍彩陶器皿、一四六八年、一四七三年、一四九四年銘の青釉下黒彩陶器等が年号銘のある資料で、最近では遺跡出土品も編年資料となる。東アフリカのキルワ遺跡出土透明釉下青彩陶器碗は一四二〇年から一四四〇年の間に完成した建物屋根に埋め込まれ、アラビア半島のジュルファール遺跡出土ティムール朝陶器は一四世紀後半から一五世紀の第七層から中国陶磁と共伴し、共に年代を知る資料を提供する。

シャーヒジンダは、ウズベキスタン、サマルカンドにある施釉タイルで覆われた巨大廟で、ティムール朝が建てたグールエミール、ビビハヌム、シャーヒジンダの施釉タイル建築物が砂の広場に面して三方に建つ。イランのタイル装飾技術の影響が見られる。青釉タイルを基本として、藍釉、紫褐釉、白釉等のタイルを一二角形や八角形に組み合わせ、壁面全面を蔓草文で覆い、文字文、幾何文等で飾り、一五世紀イスラーム施釉タイルの代表例である。

サファヴィー朝陶器

16世紀以降のサファヴィー朝でも中国陶磁器の技法を盛んに採り入れ、染付（ペルシア藍彩陶器）や青釉陶器を作った。中国染付を模倣した透明釉下にコバルト彩で文様を描いた陶器は、文様も中国風で、中国を意味するハターイー文と呼ばれた。イスラーム陶器の創造した独自性をしだいに失う過程と捉えることもあるが、広汎な地域の共通性の高い陶器に変化したといえる。サーマーン朝陶器や、コム、カーシャー、カズヴィン等を産地としたカージャール朝陶器もイスラーム的である。

近代陶器

こうした共通性と離れて、各地でまだ盛んに作られた陶器は、全体的な統一が少なくなり、各地の地域色を出すことになる。イズニック窯やキュタヒヤ窯等で作られたオスマン朝（トルコ）陶器は装飾性の豊かな陶器である。広範囲な地域で作られた様々な陶磁器を同じ名前と呼ぶことは無理になる。以後、世界的な共通性を隠れた基礎としながら、各地で独自の陶磁器を作る。

7. イスラーム陶器の種類・組合せの変遷

イスラーム陶器の分類について

初期研究段階では、ホブソンの分類、ポープの分類が重要である。

サーリー手(Sari ware) は、マザンディランの小都市サーリーで大量に発見された陶器に対して与えられた名称である。サーリーで造られたと推定されたが、サーリーの他にも発見が相次ぎ、この名称は不適当と考えられるようになった。サーリーでは作っていなかったという説まである。研

究史の初期段階での苦勞が察せられる分類も見られる。現在では、ジュルジャンで作った陶器の多くがサーリーの名で広まったと考えられている。

レインの分類 1947 年(Early Islamic Pottery)

アッバース朝 9-10 世紀のメソポタミア陶器に関する部分の記述だけを取り上げると、次のような分類である。

無釉陶器 Abbasid unglazed wares; stamped, moulded, incised, painted, decked with applied clay ornament

鉛釉刻線文陶器 Lead-glazed 'sgraffiato' wares

鉛釉浮文陶器 Lead-glazed relief wares

錫釉彩画陶器 Tin-glazed painted wares; painted on the fine white surface, using cobalt-blue, copper-green, manganese-purple, and antimony-yellow

ラスター彩陶器 Lustre-painted wares

小山富士夫の分類 1957 年 (『中近東・東南アジアの古陶』『東洋古陶磁』)

13 世紀中頃以前の製品を 11 種類に分ける。物に則した分類をしている。

焼締の無釉陶

単色の釉下に刻線文、浮彫のあるもの

唐三彩風の斑文のあるもの

錫釉の白地に文様のあるもの

ラスター文様のあるもの

白地黒絵文の陶器

白地彩色文の陶器

搔落手の陶器

宋窯写しの白陶

青釉の下に黒絵文のあるもの

上絵付文の陶器

三上次男の分類 1961 年 (『ペルシアの陶器』 28-29 頁)

五期、七形式に分ける。その中で陶器を細分している。時代区分を先に行っている。

早期、ウマイヤ陶器 (7 世紀中期から 8 世紀中期)

前期、アッバース陶器 (8 世紀中期から 11 世紀前半)

中期・(中期前半) セルジュック陶器 (11 世紀後半から 13 世紀前半)

中期・(中期後半) イル陶器 (13 世紀後半から 14 世紀末、ティムールの 15 世紀)

後期 A サファヴィー陶器 (16 世紀初めから 18 世紀前半)

後期 B トルコ陶器 (16 世紀後半から 18 世紀ころ)

近代陶器

G·za Feh·rv·ri の分類 1973 年(Islamic Pottery)

アッバース朝の陶器に関する分類だけを取り上げると、次のようである。

Monochrome alkaline-glazed ware

Lead-glazed ware decorated in relief

Lead-glazed splashed, streaked, mottled and sgraffiato ware

Tin-glazed painted ware, including lustre painting

Underglaze-painted ware

Common unglazed pottery

Helen Phion の分類 1980 年(Early Islamic Ceramics)

Ernst Grube の分類 1976 年(Islamic Pottery)

G·za Feh·rv·ri の分類 1999?年

7. 初期・前期イスラーム陶器の問題

最初の問題は、イスラーム陶器誕生の様相である。古くから西アジアで釉陶が発明された。その系譜のもとに、イスラーム陶器の華々しい開花があった。ビザンティンやペルシアの伝統に、中国陶磁器の影響が加わり、イスラーム陶器が生まれたと言われる。中国と西アジア、二つの地域のそれぞれ独自の美しい陶器は、常に交流があり、互いに深い影響を与えていた。

では、どのようにして、なぜ、いつ、どこで、どのような技術でイスラーム陶器が生まれ、作られたか。前代の陶器との類似点、相違点は何か。中国陶磁器のどこの産地、どの種類、どのような器形、文様がどの程度の影響を与えたのか。その結果、どのような性質、種類、器形、釉、素地、特色、用途の陶器がどこで、どのくらい作られたのか。誰がどこで、どのように使用したか。どのような歴史的、社会的状況を背景として育ったか。

初期イスラーム陶器は、時代的、地域的にみると、どのような変遷や特徴があるのか。とくにメソポタミアと東イランの違いは何に起因するのか。他の地域の陶器と比べると、どのような点が特徴と言えるのか。

こうした問題のうち、いつ作られたかを中心に検討することにしよう。

初期・前期イスラーム陶器の年代観

サマラ Samarra 遺跡の発掘

1911-13 年、Herzfeld ヘルツヘルトを中心とするドイツ隊によってサマラは発掘された。出土した陶磁器は *Keramik von Samarra* 「サマラ出土の陶磁器」として Friedrich Sarre サーレにより 1925 年に刊行された。

サマラはバグダッドの北 125 キロ、チグリス河畔の両側にある。カリフ、al-Mu'tasim によって 836 年に建設され、883(892?) 年に al-Mu'tamid (892 歿) がバグダッドに戻るまで、八代のカリフが居住したアッバス朝の首都であった。首都が移転されたとき、サマラは廃墟に近い状態になったのだらうと推定された。9 世紀の五十年間に満たない限られた年代の遺跡から出土するのは、9 世紀の陶器である。こうして 9 世紀と判断された初期イスラーム陶器の様相が明瞭になったと考えられた。これ以後、西アジアやアフリカで発見される同種の陶器の年代は 9 世紀とされた。

アル・ムタシムが造った都市は、*Surra man ra'a* スッラ・マン・ラアア(サーマッラー *He whose it is delighted* 見る人は喜ぶ)と呼ばれた。チグリス河の西側に宮殿と庭園が造られた。次のカリフ、al-Mutawakkil(847-861 暗殺)はさらに都市を広げ、モスクを建てた。アル・ムタワキールは 859-861 年に、新たな都市を造った。それは al-Fa'fariyya と呼ばれた。同じサマラ市内でも、地点が違ふと時代や性格の違う建物があったことが明らかである。

サマラの発掘はイスラーム都市遺跡調査の先駆けであり、学問的なイスラーム陶器研究の面でも最初に位置付けられ、その後の発掘報告は必ず引用する基本資料となった。

1936-39 年にもサマラはイラク政府によって発掘され、1940 年に報告書が刊行された

(DGA,1940)。陶磁器の報告は Sarre の報告に倣ったもので、記述などは簡略になされ、年代はお

なじく 9 世紀としている。さらに、1986,87,88 年にイギリスのノースエジが発掘調査を行っている (Northedge and Falkner, 1987, Iraq)。この調査は、出土品を 50 年ほどの幅の中に置いたザーレ、およびイラク政府の二つの報告に対して疑問を持ち、都市としてのサマラの発展過程を考古学的にとらえるものであり、イスラーム陶器は細かな地区ごとに採集された。

サマラ編年の普及

9 世紀のイスラーム陶器は、現在サマラ・タイプ Samarra type, Samarran type, Samarra horizon と呼ばれている。それは、サマラ遺跡の飛び抜けた重要性のためである。サマラは 836-883 年にアッバース朝の首都となったから、そこから出土する陶磁器はこの期間の年代というのが前提であった。限られた一時期の製品が押さえられるため、前後の陶器の年代も明らかにすることが可能となった。サーレの報告は 20 世紀前半のイスラーム陶器の編年を決定した基準資料となったのである。

1928 年、Raymond Koechlin は次のように述べた。「(サマラ) 出土品は、9 世紀となり、この年代は他の遺跡で発見された同じスタイルの陶器に当てはめることができよう」。1932 年、R.L.Hobson は 9 世紀のサマラの陶器に対して「サマラ・タイプ」という用語を用いた。1947 年に刊行された Arthur Lane の傑作 'Early Islamic Pottery' は、サマラの成果を基本にして記述され、全世界にサマラの重要性を広めた。

多くの研究者はサマラ出土品を 9 世紀の資料として扱い続け、それによって初期イスラーム陶器の編年が作られた。サマラ・タイプはイスラーム初期の西アジア全域およびその周辺地域の広大な地域で発見され、出土する遺跡の年代を推定するうえで重要な役割を果たした。考古学者にとっては年代を知る基本となったのである。

これまでに発掘されたほとんどの遺跡の年代や、博物館や展覧会で展示された陶器の年代は、意識的であれ、無意識的であれ、サマラの成果に拠っていたのである。

サマラ編年への疑惑

全世界で取り入れられたサマラ編年に対して、疑問を持った人もいた。むろん、それはまったく目立たなかったし、最近まで無視された。

サマラ発掘以前の 1905 年に刊行された Lands of the Eastern Caliphate で、Guy Le Strange は次のように書いた。"In the 10th century Ibn Hawkal praises its magnificent gardens" イブン・ハウカルは 10 世紀にサマラの素晴らしい庭園をほめた and "Mukaddasi says ... Karkh ... become the more populous quarter of the town" ムカダッシはカラフが最も繁栄した地区に発展した。カリフが旧都バグダッドに戻ってからも、サマラは廃墟にならなかったことが既に明らかだった。しかし、9-10 世紀にどんな陶器が使われたかを歴史的文献は教えてくれない。Ibn Hawkal が見たのは 978 年、Muqaddasi が見たのは 985 年のことであつたらしい。サマラは 10 世紀末でも都市であった。Strange の本は 1930 年に再版が出たが、サマラの年代を注意する人はいなかったようである。

1185 年、旅行途中でサマラの近郊に一晚宿泊したイブン・ジュバイルは次のように述べている (藤本勝次、池田修監訳『イブン・ジュバイル旅行記』関西大学出版部, 1992. 224 頁)。「この地の対岸である東岸には、スッラ・マン・ラアア (見る者は喜ぶ、サーマッラー) の町があり、ムウタシムやワーシクやムタワッキル当時のこの町の面影は今何処と考える者に、一教訓を与える町となっている。それは大きな町であるが、まだ現在、人が住んでいる一部を除くと荒廃している。マスウディー (神が彼に慈悲を垂れ給え) はこの地を詳述してその大気の卓越していることと極めて美しいことを記しているが、その通りであつたとしても、今やその素晴らしさの跡が残っているのみで

ある」という。大都市として繁栄した面影はすでにない。

1954 年、George Miles は次のように述べた。サマラでは Mint が 833 年から盛んになり、少なくとも 953 年までは盛んであった。カリフが来る前から、そして去ったあとの一世紀以上もの間、貨幣鑄造が盛んであったから、サマラの出土品を直ちに 9 世紀に属するとは言えない。

1970 年、Geza Fehér pointed to some wares which appeared after the 9th century from an archaeological point of view.

こうした意見は、小さな声でしかなかった。サマラ編年を疑い、イスラーム考古学研究者の間に、衝撃を与えたのはホワイトハウスである。ホワイトハウスはサマラ編年を点検できる重要な遺跡シラフを発掘し、初期イスラーム陶器の問題点や編年を本格的に検討する資料を発表した。しかし、彼の編年が正しいかどうかは、まだ検討を続ける必要がある。

サマラ遺跡出土品の検討

サマラはアッバース朝の首都となる前から都市であったし、カリフがバグダッドに帰ってからも、都市として栄えていた。即ち、サマラの存在を首都であった期間だけに限定する考えの根拠は失われている。しかも、数十キロにわたる広い範囲に、いくつもの建物群が残っている。拾われている主要な陶磁片も、ササン朝、ウマイヤ朝、アッバース朝、それ以後の 13 世紀に至る長期にわたる。ここから出土した陶磁器が 9 世紀、それも 836-883 年に属するという証拠も消えた。むしろ、出土品の一部が 9 世紀の陶器である可能性は高い。しかし、学問的にはそれを証明する必要がある。多くの概説書や全集本に当然のこととして記述されている初期イスラーム陶器の年代は、根拠の少ないものである。偶然に合っていることもあるが、誤りもあり、再検討しなければならないものである。

サマラ・タイプは有名となり、多くの人によって初期イスラーム陶器の産地や年代を知るうえで利用されている。不透明白釉陶器、その上に青やラスタで文様を描いた彩面白釉陶器、緑釉型押し文陶器、多彩釉刻線文陶器、青緑釉陶器、こうした多くの種類の陶磁器が、広い範囲の遺跡から、層位の検討なしで採集されているらしい。サマラの発掘は学史を飾る調査であり豊かな成果を挙げたが、現在の考古学の方法から見れば、調査方法に少し問題があった。そして、年代の違う陶器が同じ年代グループに分類されてしまったのである。

サマラ遺跡出土品の所在地

ドイツ調査隊の出土品の多くは、ドイツのペルガモン博物館とダーレム博物館に所蔵されている。ドイツ統一に伴う博物館統合により、ベルリンの一つの博物館に所蔵される予定と聞く。私は見ない。花江は 1991 年夏見る。その他の博物館にも所蔵されている。ドイツ隊の発掘が終了し、出土品は箱詰めされ、積出し港のバスラの倉庫に置かれた。しかし、1914 年、第 1 次世界大戦が始まり、イギリス軍は倉庫内の出土品をそっくりロンドンに運んだ。British 博物館と Victoria & Albert 博物館に保管された。ドイツの返還要求によって、多くはベルリンに返されたが、一部はロンドンの二つの博物館に残った。

British 博物館は 1922 年に発掘品に登録番号を与えている。さらに British 博物館はわずかな量の出土品を、1923 年、カナダの Royal Ontario 博物館とアメリカのミシガン州立大学人類博物館に売却した。

1936-39 年のイラク政府の発掘品はバグダッドのイラク博物館、サマラのサマラ博物館に収蔵・展示されている。その後もイラク政府により遺跡から陶磁器が収集されているようである。1983 年から分布調査が開始され、1986 年から発掘が始められたイギリス隊の発掘品はバグダッドに保管

されている。

こうして考古学資料となったサマラの陶器の研究成果の検討と、資料の再整理を行う。

種類別の整理。写真、実測図。

緑釉流しかけ。緑釉の中にぼんやりとした白地部分が残る陶器。中国陶磁器の写しの可能性もある。中国華北の製品で、河南省滎陽茹？窯跡の出土品にも類似した製品がある（『考古』1991-7,664-666）。

サマラ・タイプ編年の検討

サマラ遺跡から出土した陶磁器の分類はできた。しかし、遺跡の出土位置や層位が不明瞭であるから、すぐに年代を求めることは難しい。また、産地も不明瞭である。他の遺跡から出土した類似する陶磁器の組み合わせ等を検討することが次に必要となる。

スーザ遺跡の初期イスラーム陶器

フランス隊の発掘

イスラーム陶器の編年は、1950年に Lacam、1974年に Rosen-Ayalon によって発表された。1977年、Monique Kervran は1972年に発掘した Apadana 丘出土品を使い、7世紀から10世紀末・11世紀初めにかけての陶器の編年表を発表した。出土の陶器は1%だけが輸入品で、残りの同じような陶器はスーザで作られた。サマラ編年よりも古くから白釉、鉛釉、ラスターが作られたという。スーザ編年は、前後関係を示す遺跡の検討にやや不明瞭な感じがある。

スーザのイスラーム陶器は次のように分類されている。1、7世紀第2・3四半期。ササン朝の継続。2期、7世紀末・8世紀初め。サマラ・タイプの前段階のイスラーム陶器。3期、8世紀中頃のイスラーム侵攻頃。銅彩、鉛釉緑釉（9世紀第3四半期に消える）、コバルト彩白釉（9世紀第2四半期？に消える）。4期、9世紀初めから末。サマラ・タイプが発見される。メソポタミアと類似する。白釉と灰色釉（ともに無文、彩文）、刻線文なしの流しかけ釉。5期（とは分けていないが）、9世紀末から10世紀末。質が少し悪くなる。白釉と鉛釉（ともに無文、彩文）、単彩、多彩の刻線文。10世紀末から北東イランのニーシャープールやサマルカンドの影響が現れる。

金沢大学所蔵スーサ出土のイスラーム陶器

シラーフ遺跡の初期イスラーム陶器

サマラ以後の重要な遺跡はシラーフである。この資料によって飛躍的に研究が発展した。各遺構の変遷が明らか（層位的に、あるいは遺構の重なりがある）な資料が豊富であった。その遺構の下に詰めた土から出土した大量の陶磁器の分類ができている。種類ごとの数量が数えられている。すなわち、考古学の方法で編年を考えることのできる資料が多い。詰められた土に混じる陶磁片は、建物が建てられる前に捨てられたものが明らかである。

発掘は1966-72年に行われた。海岸と山に挟まれた長さ5km、そして幅は500m以内と狭い、海岸に沿って築かれた港市都市である。Great Mosq. 3 時期、800年前後。977年に地震で崩壊した。50-60ほどの Kiln も発見された。

南中国（広東省か）で生産されたと推定される DUSUN と呼ばれる壺と、長沙窯の釉下彩絵陶器の碗がグレート・モスクの基壇から、1971年の段階で数百点も出土した（"South Asian Archaeology" 1973, 241-255）。このモスクは主要な建て替えだけでも五回あり、多くの遺物とともに数百点のストーンウェアも含まれていた最初の基壇の築かれた年代を、803～825年の間頃、すなわち9世紀初頭とホワイトハウスは推定している。理由は、土砂の中から出土した年代の推定

できる最も新しいコインの鋳造年が 803/4 年であり、その後に付け加えられた可能性も残る階段の下から 814/5 年鋳造のコインが出土しているからである。

この堆積土の中からは三種類の中国製品、および一種類の東南アジア製品と推定されている陶磁器が出土している。最初の基壇の中からは越窯青磁、白釉陶器（白磁）、貼付文水注、三彩は発見されない。越窯青磁や白磁はこれより時期の遅れる層からは大量に出土する製品であり、貼付文水注も多くはないが後の層から出土している。さらに、8 世紀末から中国陶磁器が現れ、最も多いのが長沙窯の碗である (Iran, XI, 1973, 29-49)。シラーフ遺跡では、長沙窯が 8 世紀末に突然に現れ、9 世紀初頭の段階では越窯はまだ登場していない。こうした中国陶磁器とともに、イスラーム陶器が大量に出土しているという。

その成果

Whitehouse の編年。9-10 世紀のイスラーム陶器の編年として、最も広く知られるようになったのがホワイトハウス編年である。しかし、彼の説は Tampoe によって 1989 年に否定された。使用した資料は、ホワイトハウスが発掘したシラーフ出土品であり、アッシュモレアン博物館と英国博物館に所蔵されていたものである。発掘時の調査ノートまで使って、発掘に参加していないタンポーは、8 世紀中頃からすべての種類の中国陶磁器とイスラーム施釉陶器が出土しているという結論を出している。また、数量が増えるのは 9 世紀からであるという。

1991 年、Mason と Keall によって、タンポー説に対する意見が述べられた (Iran, 29; 51-66 の 57 頁)。タンポーは、出土したコインをあまりに高く評価し過ぎており、後に鋳造されたかも知れないコインに早い年代を与え、また、二次的に堆積したかも知れないものを一括品として扱い、白釉陶器に早い年代を与え、それを基に資料の解釈をしたというのである。

アーリ遺跡の初期イスラーム陶器

遺跡の紹介

アーリ遺跡はバハレン島の中央部に位置するアーリ村の東側にある。小丘は東西 160m、南北 85 m、高さ 1 m ほど、そこに家の跡が残るように見えた。第 1 次調査で、西側の一部を発掘し、家の跡を発見した。出土品は 9 世紀と 11 世紀の二グループに分けられるようである。第 2 次調査は東側の一部を発掘し、9 世紀の家跡を数軒発見した。

第 2 次調査の発掘を紹介する。表土と一つの文化層を発掘した。一つの文化層は 1 から 7 層に細分できる。各層上に家壁が載る。いくつかの家跡、炉跡、デーツのジュースを取る場所が発見された。家 1, 2, 3 は 7 層の下面に建つ。家 4 は 6 層の下面、すなわち 7 層の上面に建つ。主要な発掘は 7 層下面で止めた。これはレベル 1 とレベル 2 の境面である。レベル 2 は幾つかの家の周りで部分的に掘られた。レベル 2 は細かく割れた石を含む黄色砂の層である。

家の基本的な平面プランは長方形であり、壁によって部屋が分けられている。出入口はいくつかの部屋で発見された。追加された壁や、他の壁とつながらない壁も発見された。残りの悪い部分も多く、家全体の平面をとらえることは難しい。家壁の方向はほぼ南北、東西であり、わずかに西に傾く。平均的な部屋は 4-5m×5-6m である。壁は下部しか残らないが、それは粗く割った石灰岩と黄色粘土で作られる。主要な壁は塗りが無いが、後に付け加えられた壁は石灰が塗布されることが多い。壁内部に石灰は見られない。家壁の平均的な厚さは 50-60cm である。床面は部分的に残るだけである。非常に薄い灰層に覆われた柔らかい粘土面と、固い粘土面があった。小さな部屋の床だけが石灰で塗られていた。床面の下は、どの場所も細かな黄色砂の層であり、部分的に小さな割れた石を含む場合もあった。

家と部屋の出入口は明瞭である。多くの入口は壁石が切れた部分であり、床と同じ高さである。入口の方角は一定していない。一部で出入口の残りの良いが発見された。There were some stones set in the ground in a doorway between two walls. On the easterside the stones were covered with gypsum next to the wall; there was a gypsum lihole which bottom is the same level of the floor of the room. These appeared to be doorways with a post hole of a door.

A date press (a madbasa in Arabic) was found outside a house. Date juice was madby pressing dates piled up on the floor of a date press. The date press faced to the south to take advantage of the sun. The north, or bawall was broken but a thick stone wall foundation still remained. The floor of the date press was a sloping channelled platform coated with hard gypsum. The rectangular platform measured 170cm long by 150cm wide. Six narrow parallel channels were exposed on it. Each channel mesured 140cm long by 10cm wide with adepth of 7cm. The channels were separated by low dividers or barriers, each 12cmwide. The channels sloped slightly towards the south where they flowed into one larger channel, and then to a bore-hole or a sunken receptacle outside the channel. The borehole, with which had a mouth was also coated with hard gypsum. A complete earthenware jar was found in the center of the bore-hole. The rim of thjar was set in the hole with gypsum. We found soft clay below the hard gypsum.

We saw no objects on the floors of the rooms, except for a pair of large stone mills in the small room of house 3.

Five ovens were found but it is certain that more had been used, because four ofthem were noted in the southern part. Ovens 1-4 were made with large rough-hewn and small chipped stones. Oven 1 was found at the west side of house 6 on the salevel as layer 3. Some rough-hewn stones had reddened because of the fire. The outside diameter of the circularly arranged stones was 65cm and the inside was 35cm, the height of the stones was 11cm. Two black layers of ash 13cm deep remaiinside the oven.

発掘終了の数日前、保存状態のよい厨房施設が発見された。オープン 2 と 3 の間に、大きな壺が埋められていた。壺の上面は、オープンの作られた面と同じである。直径 65cm の穴が掘られ、その中へ壺が埋められている。穴の深さは 60cm で、壺の底は穴下面に着いている。この場所は状況から、あきらかに厨房であり、壺は物を貯える容器として使われたろう。この厨房の床面から、二つの青緑釉瓶も発見された。多くの陶片がオープン 2, 3 の周りや上に散らばっている。ここは家 3 と 5 の間である。家 5 が崩壊して上を覆うように見える。

出土品は土器片が最も多く、次いで施釉陶器片である。粘土製品、ガラスの容器と器 物、石製品、青銅製品（スプーン、棒状品）、鉄釘、骨、貝なども出土した。とくにイラクの白釉陶器、青緑釉陶器から、家の年代は 9 世紀と推定された。中国の長沙窯の彩文碗も二片発見されたが、9 世紀前半頃と推定できる。

第 1 次調査で、鉛釉多彩釉陶器（多くは刻線文があった）が 10% 出土し、11 世紀の中国の白磁も一片発見された。第 2 次調査では多彩釉陶器、多彩釉刻線文陶器、緑釉流しかけ陶器は一片も出土していない。すなわち、白釉と青釉が広く使用され、コバルト彩白釉陶器、初期ラスターもわずかながら同時に使用される。次の時代に多彩釉（刻線文）陶器が使用されたことを示している。9 世紀の主要な陶器と、10 世紀以降に広まる陶器とが分類できそうである。

バンボール

バンボール遺跡はカラチの東南東 60km ほどに位置している。遺跡は平原の中に小高い丘となっていて残るが、今は海岸が後退し海を見ることはできない。試掘調査は 1951 年に行われ、本格的な発掘調査はパキスタン考古局によって 1958 年から始められた。1965 年までの 8 回にわたる調査成果の全体的な概略は『バンボール』"BANBHORE"というパンフレットに記されている。

石灰岩積みの壁で囲まれた 600 × 400 m ほどの五角形の居住区の一部と、その外側に広がる手工業区を含む居住地や墓地などの一部が発掘されていることが知られる。また、インダス河から水を引いた船着き場の可能性のある遺構も見られている。下層からは紀元前一世紀に遡ると推定されている紅色磨研土器などが出土し、また、アレクサンドロスが船出した港がここにあったという説もあり、遺跡が以前から重要な地域であったことは明らかである。ヒンドゥ・ササン時代の遺跡の上には、モスクや住居跡などのイスラーム時代の遺跡が残されている。ここは以前、デバルとよばれていた都市であると推定されることが多いが、そうであれば、711/2 年にモハメッド・ビン・カシム Muhammad bin al-Kasim の率いるアラブの軍隊に征服され、インド・パキスタンで初めてのイスラーム都市に変貌した地ということになる。

9 世紀から 11 世紀初頭にかけての時期は、越窯青磁碗、長沙窯陶器碗や水注、定窯その他の白磁碗が中国から海外に輸出された時代である。バンボール遺跡から出土した中国陶磁器は、9 世紀から 13 世紀にわたる期間に生産された製品であった。とくに唐時代晩期から五代、北宋初期にかけての製品が多いようであり、北宋時代後半はやや不明瞭であるが、南宋時代には急激に数量が減少したように思われる。遺跡出土品をみると、9 世紀前半は長沙窯製品が主となり、10 世紀には越窯青磁が主流になったらしいと考えられる。白磁碗も越窯青磁とともに運ばれ始めるが、数量が増加するのは 10 世紀後半から 11 世紀前半頃のようなのである。これに浙江省近隣の越窯系の窯で生産されたと思われる灰緑釉大壺が 9 世紀から 11 世紀にかけて加わるようである。こうしてみると、インド洋における初期の中国陶磁器貿易は、9 世紀前半の長沙窯彩絵陶器を主とする時期と、10 世紀の越窯青磁と白磁を主とする時期、11 世紀前半の白磁を主とする時期の三期に分けることができるようである。9 世紀後半頃と 10 世紀後半頃は、前後の時期の特徴が混じった時期のようなのである。

イスラーム期の施釉陶器は、9 世紀のメソポタミアの青緑釉貼付文の大壺の他に、9-10 世紀のメソポタミアのラスター彩陶器鉢、トランスオクシアナや東イランの白地黒彩鳥文 鉢、黄地緑彩陶器鉢、11 世紀から 12 世紀の大量の多彩釉（緑黄紫色彩）刻線文陶器鉢、緑釉刻線文陶器鉢、黄釉刻線文陶器鉢、緑褐彩絵陶器鉢などがある。多彩釉刻線文陶器にはニーシャープールやサマルカンドの製品に類似するものも目につくが、シンド地方の製品もあるかも知れない。この他に、無釉の土器もかなり使用されていたようである。

ブラミナバード

インダス河を遡った地にあるブラミナバードは 11 世紀初頭に地震によって滅亡した都市として知られている。1854 年に採集された中国陶磁器を R・L・ホブソンは 1931 年に紹介しているが (Transactions of the Oriental Ceramic Society, 8, 1931, 21-23)、10 世紀の越窯青磁碗や白磁碗などの写真が見られる。

中国陶磁器との類似性

器形と釉薬の類似性。文様の類似性。

イスラーム地域の中国陶磁器の出土。

中国のイスラーム陶器の出土。

シニという言葉は、9 世紀の人が著した「けちんぼども」(『アラビア・ペルシア文学全集』前嶋

信次訳、筑摩書房、1964 では 1/3 ほどが翻訳されている）に載っているのが古いようである。

8. 佐々木達夫の分類

特定の名前で呼ばれた陶器がある。産地と年代が不明瞭な場合、不適切な名称を与えたことがあったので、釉や素地、施文法など技術面から名称を付けることにする。この方法の欠点は、同じ技術が各地に見られる場合、区別することが難しいことである。研究の進展に伴い、再び、特定の名称を与えることが望ましい。

例えば、農民陶器 Peasant pottery と呼ばれる陶器がある。灰色がかかる下地の上に黄色がかかる緑色と白色スリップで厚く彩画され、黒褐色と赤色顔料で薄く塗られた陶器である。Lane が東ヨーロッパ中世の農民が使う陶器に似ているとして名付けた。しかし、サマラから出土しないから時代は 10・11 世紀頃と推定され、しかもイランの宮殿からも出土している。できれば Polychrome painted wares of Syria シリア多彩画陶器 A 類とでも呼ぶのがよい。しかし、シリアやメソポタミアだけが産地かどうか、問題が残り、地名を付けるのは難しい。そこで、時代や地域的なまとまりを考慮しながら、技術面を中心として分類することにしよう。

イスラーム陶器が完成した 9-10 世紀のメソポタミアを中心とするアッバース朝陶器の分類を次に示す。

大分類：釉と彩画の色彩 Blue, Brown, Yellow, White, Green, Grey, Purple.

釉の状態; Opaque, Transparent, Dark, Light, Pale.

施文技法; Moulded, Incised, Curved, Painted, Dotted, Splashed,

文様の種類・器形・口縁胴部底部の分類名。不明は 0・素地 CY

Glazed Pottery of the Abbasid Period

(A) Monochrome glazed wares, (B) Painted (on-glaze) on monochrome (white opaque) glazed wares, (C) Polychrome glazed wares, and (D) (imported) Chinese ceramics.

(A) Monochrome glazed wares. These wares are divided as follows.

A-1-a: Iron yellow (brown) glazed moulded wares;

A-1-b: Copper green glazed moulded wares;

A-2-a: (Tin, Lead, ?) Opaque white glazed wares; Creamy yellow fabric.

A-2-b: (Tin, Lead, ?) Opaque grey glazed wares; Coarse fabric.

A-3: Cobalt blue glazed wares;

A-4: Copper light blue glazed wares;

A-5-a: Copper blue-green (including blue, blue-green, green) glazed wares; Creamy yellow fabric.

A-6-b: Copper blue-green (including Blue, Blue-green, Green) glazed wares; GY fabric

A-7: Manganese purple-black glazed wares; Creamy yellow fabric.

A-8: Iron yellow (brown) glazed wares (including dark iron yellow glaze painted on light iron yellow glazed wares); Creamy yellow fabric.

(B) Painted, dotted, or splashed on opaque-white glazed wares; These wares are the variation of A-2: Plain opaque white glazed wares and are divided as follows.

B-1-a: Cobalt blue painted on opaque white glazed wares;

B-2-a: Cobalt blue and copper green painted on opaque white glazed wares;

B-3-a: Copper green painted on opaque white glazed wares;

- B-3-b: Copper green streaks(lines) painted on opaque white glazed wares; Creamy yellow fabric.
- B-3-c: Copper green splashed on opaque white glazed wares; inside and outside,
- B-3-d: Copper green dotted on opaque white glazed wares; inside,
- B-3-e: Copper blue painted on opaque white glazed wares; Creamy yellow fabric.
- B-4-a: Copper green and blue, manganese black-purple, cobalt blue, and iron yellow painted on opaque white glazed wares; Creamy yellow fabric.
- B-4-b: Copper green and blue, manganese black-purple, cobalt blue, and iron yellow painted on opaque white glazed wares; Pinkish yellow fabric.
- B-5-a: Copper green and blue, and iron brown painted on opaque white glazed wares; Creamy yellow fabric.
- B-6-a: Copper green and manganese purple black dotted on opaque white glazed wares; Light pinkish yellow fabric.
- (C) Painted on white slipped wares.
- C-1-a: Green glazed painted on white slipped wares;
- (D) Painted on green glazed wares.
- D-1-a: Manganese-purple or black glaze painted on green glazed wares;
- (E) Painted on iron yellow glazed wares.
- E-1-a: Copper green glaze painted or dotted on iron yellow glazed wares;
- E-2-a: Manganese-purple or black glaze painted on iron yellow glazed wares;
- E-3-a: Copper green and manganese-purple or black glaze painted on iron yellow glazed wares;
- (F) Polychrome glaze painted on white slipped wares. These are divided as follows.
- F-1-a: Polychrome glaze (copper green, manganese black purple, iron yellow) painted on white slipped wares without incised decoration. Red fabric.
- F-2-a: Polychrome glaze (copper green, manganese black purple, iron yellow) painted on white slipped wares with rough incised decoration. Pink fabric.
- F-2-b: Polychrome glaze (copper green, manganese black purple, iron yellow) painted on white slipped wares with hatched incised decoration. Red fabric.
- F-3-a: Polychrome glaze (copper green, manganese black purple, iron yellow) dotted on white slipped wares with rough incised decoration. Creamy yellow fabric.
- F-3-b: Polychrome glaze (copper green, manganese black purple, iron yellow) dotted on white slipped wares with rough incised decoration. Pink fabric.
- (G) Painted on white slipped and copper green glazed wares.
- I-1-a: ;
- (H) Painted on white slipped and iron yellow glazed wares.
- I-1-a: ;
- (I) Chinese ceramics. These are divided as follows.
- I-1-a: Changsha wares;
- I-2-a: Green splashed or painted wares;
- I-2-b: Green dotted wares;
- I-2-c: Greenish white wares;

I-3-a: White-porcelain; thin, fine, white colour glaze 薄手、上質、白色釉

I-3-b: White-porcelain; thick, coarse, yellowish white colour glaze 厚手、粗質、黄白色釉

I-3-c: Whitish grey-pottery; 広東省粗質

I-4-a: Green wares; Yue

I-4-b: Green wares; 広東省粗質

(Copper)Blue-green(including Blue,Blue-green,Green) glazed ware;Creamy Yellow fabric(soft yellow fabric),often called Sasano-Islamic ware by misunderstanding. Basins, Jars, Bowls. Large basins with ledge rims are common. Jars are often decorated in a barbotine style. Bowls are rare.

Soft Yellow, buff, or light brown fabric. Bowls with slightly out-turned rims, sometimes with ridge on the inside walls. Bowls with plain rounded rims, with slightly in-turned rims, with ring bases 輪高台, with bi bases 玉壁高台, with flat bases 無高台,

9. 初期・前期イスラーム陶器のいくつかの問題点

知りたいことを直接に伝える資料が少ないため、推定が多くなる。そのため、視点を変えると、違う結果が見えてくる。また、前提が変われば、推測の方向も違ってくる。例えば、中国陶磁器の影響をどの程度に考えるかという問題がある。750年のタラスの戦いで多数の中国人が捕虜となり、メソポタミアに連れ去られた。多くの職人がいたことは分かるが、その中に陶工の名は出てこない。このことから、二つの考えができる。一つは、多くの職人がいたのだから、陶工も混じっていたに違いない。彼らがイスラーム陶器に中国の技術を伝えたという考えである。日本では三上次男がよく述べていた。他は、あれだけ職人の種類が挙げられているのだから、陶工がいれば、名が出てくるはずである。これは陶工がいらない証拠となるという考えである。イギリスのヘーバーリが述べている。どちらの考えもありうることである。唐三彩の影響があったと見るかどうか、前提が変わると結論が違ってくる問題である。唐三彩が8世紀中頃に途絶えたか、その後も続いたか、副葬品であったか、生活用品であったか等、研究の進展によってしだいに事実が分かってきた。それに伴い、推定のしかたも変わるべきである。異なる視点から見ると、当然と思えたことが問題になる。

初期イスラーム陶器の産地・概観

初期イスラーム陶器の生産地は、はっきりしない。各地の中心的な場所で生産されたのか、それとも多くの場所で生産されたのかも明確でない。かなり多くの場所に窯跡の存在が推定できる。それが、どういう意味を持つかは未だ不明である。いくつかの推定産地をあげよう。

バグダッドは最大の都市であったから、陶器の生産も最も栄えたと推定される。初期の円形都市は9世紀初めに戦火に会い、破壊された。その後、都市は再建され、膨張したためか、窯跡は未発見である。

バスラはアッバース朝第二の都市、商業の中心地である。ここはメソポタミア最大の陶器生産地と推定される。以前、イラク人考古学者が窯跡の廃品を採集したというが、長い間、論文や報告はなく、実態は不明瞭であった。バスラ採集の窯跡の失敗品、窯道具と言われるものは Metropolitan Museum of Art に所蔵されている。1991年、キールとメイソンはそれらの実測図と岩石学的分析の結果を報告した(Iran,1991)。これは、イスラーム陶器研究史上の重要な論文となる。

クーファはアッバース朝初期の首都である。サマラに首都を移す頃、クーファから陶工を連れて

いったか。ここでも陶器が生産されたと推定される。窯跡は未発見である。

サマラは9世紀、一時的に政治の中心地になった都市で、貨幣鑄造では有名である。Yaq'ubi は、Mu'tasim が新しい建設地にバスラやクフアから陶工を連れてきたことを述べている。しかし、現在のところ、窯跡は未発見に近い状況である。Hobson は1932年に、スグラヒアットの窯跡がサマラ近郊にあり、サマラ出土品と同じスグラヒアットが出土していると述べた。古手の多彩釉で淡紅色素地は、サマラでも作ったと推定できる。Creamy Yellow soft fabric が Pale pink fabric に代わり、同じ地方の産であると推定できそうだ。後に現れる東イランを中心とする釉面がテラとした、紅色の硬く薄い素地のスグラヒアットと産地と年代が違うといえそうだ。

この可能性を求めて、BM所蔵のドイツ隊発掘資料を探した。その中に、三叉トチ（三足の窯詰道具）があった。OA13708 は付着した青釉が Blue-Green Glaze でなく、これより後の時代(13-14世紀か)のトルコワーズ青釉である。素地は Creamy Yellow であるが、少し緑がかかる。OA13709 は付着する釉が Blue-Green Glaze であり、素地は Creamy Yellow である。トチ上に製品の素地が着き、それは Creamy Yellow 素地である。僅かに砂混じりであることが問題点として残る。初期イスラーム陶器の窯道具であろう。すなわち、9世紀と13世紀らしい二種類の三叉トチが存在する。他に、素焼きされた土型がある。内面に押型文があり、北シリアの13世紀の製品に類似品がある。サマラの窯跡で使用した可能性を否定できない。

シューシュ（スーザ・スーサ）。窯跡が発掘されている。メソポタミアの技術と類似しているかどうか。遺跡の表面に落ちていた陶器は類似しているが、シューシュで作った黄釉陶器を確認した。白濁釉陶器も現地産がある。

シラーフ。窯跡が発掘されている。バスラの技術を取り入れて、白釉陶器や青釉陶器が作られた可能性がある。また、イランが主となる淡紅色素地の鉛釉陶器も作られたかもしれない。しかし、施釉陶器よりも無釉の土器が作られた可能性のほうが非常に高い。

フスタート。窯跡が発掘されている。

ニーシャープール。窯跡が発掘されている。メソポタミアと違う種類が独自に作られた可能性が大きい。遺跡には棒状窯道具がある。

グルガン。窯跡が発掘されている。

その他の地域。シリア。イラン南部。

ホワイトハウスの考え。佐々木の考え。メイソンの考え。

素地と釉の化学 Chemical 分析、岩石分類 Petrographic 分析

素地と釉の分析は、物の性質を知るための、また産地を推定するための手掛かりを与える。白釉は鉛釉で発色は錫か、すなわち錫釉かどうか。ホワイトハウスは錫釉とそうでないものがあるという(Whitehouse,D.,1978)。山崎一雄の分析では錫釉らしい。現在、アーリ出土品などを分析中である。Fabric and glazes of some sherds were analyzed and reported by Frederick Matson(Matson,F.1943), Robert B.Mason(Mason,R.B.and Keall,E. J.1988), and Jessica Rawson(Rawson,J.,Tite,M.and Hughes,M.J.,1987-88).

白釉

前8世紀頃、アッシリアで鉛釉の錫白釉が使用され始めた。前6世紀末のスーザ、ペルセポリスの宮殿建築の煉瓦には、同じ技術の錫白釉が使用されていた。それ以後の系譜は不明瞭であるが、存在した可能性はある。

白釉陶器はイスラーム陶器の代表的な製品として再登場する。この釉上に、コバルトや銅で呈色

する文様が描かれ、ラスターも描かれる。イスラーム陶器の基本釉になる白釉は、前時代の伝統を引き継いでいたのか、中国の白磁の影響で生まれたのか。白釉は酸化錫による発色に限られるのか、他の材料もあったのか。地域的な違いがあったか。生まれた年代はいつか。青彩、緑彩は地域の伝統や中国に系譜がたどれるか、否か。あるいは中国に影響を与えたか。こうしたことが問題になる。

佐々木説。地域の伝統の中から不透明白釉は発展した。中国の白磁の影響で、9世紀前半に白釉陶器は器形を変えた。初めは厚く不透明釉をかけたものが多い。一部の碗にコバルト彩が施されるが、同時に太い線で粗くコバルト彩と類似した文様を描いたラスターもわずかにある。10世紀に白釉はしだいに透明感のある釉に変化し、美術書によく載るラスターが登場する。主要な産地はメソポタミア南部である。

種類 クリーム黄色素地が多いが、砂混じり素地、さらに粗雑な素地も少しある。産地がいくつかあることを示している。

器形 碗が多い。壺、瓶。

サマラ出土品の実測図は金沢大学考古学紀要に掲載した。

産地

ホワイトハウスの考え。佐々木の考え。メソポタミアである。メイソンの考え、いいものはバスラで、簡単なものはその他の地域でも作られる。

素地と釉の化学 Chemical 分析、岩石分類 Petrographic 分析

白釉は鉛釉で発色は錫か、すなわち錫釉か。ホワイトハウスは錫釉とそうでないものがあるという(Whitehouse,D.,1978)。山崎一雄の分析では錫釉と錫のない釉がある。Fabricand glazes of some sherds were analyzed and reported by Frederick Matson(Matson,F.1943), Robert B.Mason(Mason,R.B.and Keall,E.J.1988), and Jessica Rawson(Rawson,J.,Tite,M.and Hughes,M.J.,1987-88)。

イラクの白釉は錫釉が主体となるが、イランの白釉は錫釉が少ないのではない。イラクは9-10世紀が主となり、イランは13-14世紀か。ただし、9-10世紀にも、イランなどでイラクの模倣品が作られたろう。錫はメソポタミアにないから、シリアから運んだといわれる。また、中近東には錫鉱床がないから、ビルマやマレーシアから運んだとJ.W.Allanは1991年刊の概説に書いている。また、鉛の含まれるものと、含まれない釉がある。

鉛釉は、鉛だけなら透明になるが、錫が入ると白濁する。白濁していて錫が発見されない白釉とは何か。この点に関して、キールとメイソンは、岩石分類分析から、石英と長石の粒、および釉中の泡によって釉が白濁したものがあるという(Iran,1991の52頁)。また、この効果はパルティアやササンの白釉陶器にも見られるという。

低温度焼成であることが大きな理由になるのであろう。そのため、釉内に溶けきらない石英と長石の粒が比較的多く残り、泡も釉内に閉じこもる状態になり、白濁するのだろう。佐々木が10世紀と推定する新しくなる白釉陶器は、透明性が増しているが、これは焼成温度が高くなり、石英や長石が溶けてガラス質になるからであろう。

技術

地域の伝統、変化の段階

中国陶磁器の影響(形、文様、細部の特徴)。口縁部を円弧状にコバルトで塗った文様は、同じ時期に輸入された中国長沙窯の碗の文様に類似している。中国では碗底部を手にとって釉掛けしたが、

メソポタミアでは筆で塗って模倣している。

白釉上に彩絵する陶器。コバルト青、銅緑の一つ、あるいは組み合わせで絵が書かれる。文様の構成。

鉛釉型押文陶器 Lead glazed mould relief ware.

産地はシリア、イラク、エジプトのどこか。イランは違う。ヘヘルバリのケンマン南部の発掘で一片しか出土しない。この地方が少ない、ないことを反映。British Museum の 皿、Pinder-Willson が BM Quarterly に発表。文法的な間違いがあるが、Simple Kufic で書かれる。書体から Late 7th to early 8th と推定できる。

British Museum 展示品。シリアの港町 Al-Mina 出土品、BM 発掘。Lane が 1938 年、出土品の報告を書いた。型作り、四角形で中央と周辺に 9 個の窪みあり、縁に文字がある。

Camala, Abu Nasr bi-Masri (the work of Abu Nasr of Basra, in Egypt) (Made by Nasr of Basra in Egypt). 甘い物入れか。緑釉と黄釉。9 世紀エジプト製か。

系統について。いくつかの模様を比較する。セミ・パルメット、ローマ金属工芸品に類似、Beeds 模様。これからローマの Lead glazed relief ware の影響あり。ササンの影響あり（ビーズ模様はササンのもの）。唐のブロンズの影響はない。

鉛釉の下に鉄分が多いと、緑でなく、黄色に発色する。そのため、ラスターと間違われることもある。

種類、器形、産地

メソポタミア各地、シリア、エジプトなどの各地。

素地と釉の化学 Chemical 分析、岩石分類 Petrographic 分析

技術、地域の伝統、多彩釉陶器

誕生したのは、唐三彩の影響か、遼三彩の影響か、長沙窯の影響か、それとも中国の影響はないか。地域の伝統の中から生まれたか。それとも中国の三彩などに影響を与えたか。一般には、唐三彩の影響で生まれたと言われている。

Day は 1941 年に流しかけ釉陶器はアッバース朝ではなく、その前のウマイヤ朝のものという。唐三彩はアッバース朝の誕生の頃、生産が止まっていたからという理由である。

W. Watson (1970, PDF) は・唐三彩は 755 年で生産止まる、・Funerary pottery で not exported、・Body はイスラームだけと述べた。同じ説は、Fleming (1973), Crowe (1978) などが繰り返している。この頃、唐三彩といえば、盛唐の三彩だけを考えていた。しかし、8 世紀中頃以降も、唐では三彩が作られたし、西アジアの遺跡から、硬質素地の緑釉流しかけ陶器（晩唐三彩）が出土している。ただ、ヨーロッパでは最近まで不明瞭な問題であったらしく、1988 年、TOCS にヤシカ・ローソンがサマラ出土品の素地の化学分析の結果を発表し、中国（唐）とイスラームの両方の製品があるという、当然の結論を出している。中国とイスラームの関係が深いことは確かに認められるだろう。

イラクの多彩釉陶器が作られたのが 9 世紀とすれば、それは遼でなく、晩唐である。ただし、10 世紀に作られ始めた可能性もある。東南部イランの多彩釉刻線文陶器は 10 世紀には始まり、11、12 世紀に典型的な製品ができ、各地に広がる。これはイラクから広がった技術か、北東イランに 9 世紀からあった技術の影響かが問題になる。イランの多彩釉刻線文陶器が 9 世紀から始まるかどうかは問題である。佐々木は早くても 11 世紀後半から 12 世紀にかけてが生産の始まりと推定している。

1979 年、矢部良明は「晩唐五代の三彩」『考古学雑誌』65-3 で、晩唐三彩がイスラーム三彩を生

んだという。唐三彩という時、無意識のうちに盛唐の三彩を指していたことが多い。矢部によって、晩唐三彩がいかにイスラーム三彩に影響を与えたかが明らかにされた。しかし、この説を考慮しないで書かれた概説書がまだ多い。

唐三彩の模様の起源が西アジアのものとするれば、中国とイスラームの陶器は間接的に関係し、両方の元になるのがイスラームの工芸品といえる。現在は、盛唐三彩から晩唐三彩に変化していくこと、晩唐三彩とイスラーム多彩釉陶器は技術的に関連していることが、推定されている。

長沙窯の彩絵陶器とイスラーム陶器の関係も深いようにみえる。佐々木は三彩よりも、長沙窯の線条に流し掛けた鉢がイスラーム三彩誕生のきっかけになったと推定している。周世榮は、長沙窯の彩釉絵の装飾として 35 種類の文様を挙げているが（『考古』

1990-6,554-558,494）、その 35 番目の文様がイスラーム三彩の起源になった可能性がある

種類

白釉緑彩は斑状、流しかけ、筆描きの三種類がある。白釉緑彩（流しかけ）の類似品は、中国の琿ライ窯などにある。湖南省などの窯跡では、三彩の系列に入る製品を生産する。これらは高火度釉であり、北方の低火度釉と異なる。北方では、盛唐の三彩を作った多くの窯跡で、引き続き、晩唐時代にも三彩が焼かれた。質や模様は変化しており、需要層は貴族から市民層になったようである。窯跡は河北省内丘県、河南省鞏県小黄冶など、最近は耀州窯でも三彩が盛んに焼かれたことが判明している。華北の一帯で作られていたのである。南の湖南省長沙窯跡、四川省琿ライ窯跡でも高火度焼成の三彩が出土している。

多彩釉、器形、産地

メソポタミア各地、シリア、エジプトなどの各地。

サマラ出土品を見ると、Creamy yellow 素地と Pale pink 素地があり、ともにメソポタミア産らしい。素地の違いは、産地の違いだけでなく、時代的な変化も示しているようである。Red 素地は南イランに多くなるようである。

素地と釉の化学 Chemical 分析、岩石分類 Petrographic 分析

技術

イスラームと中国は、各時代に影響しあっている。11 世紀は磁州との類似。

ラスター

佐々木説。9 世紀前半に金色ラスターが少し作られ、10 世紀から様々な種類が多く作られる。産地はメソポタミア南部である。ラスター・タイルは 10 世紀の製品だろう。

ラスター起源の生産地説は、イラク(Lane), エジプト(??), イラン(Pope)の三つ。発生の理由説は、・偶然に。・ハジャジ・イブン・ユーセフ(Umayyad,Iraq)が銀、金の器を禁止した替わりに。これはダメ。・エジプトでガラスに描かれたラスターが、陶器にも使われるようになった。Feh・の説。Scanlon の 1965 年フスタート発掘でピットからラスター・ガラス・ゴブレット出土。ラスターの文字で、773 年の一ヵ月だけエジプト総督の職にあったアブド・アル・サマド・ビン・アリ Abd al-Samad と書かれる。773 年と分かる。Ruby Colour のラスターで、パルメットが描かれる。ラスターの段階。・Ruby lustre(850-920),・Polychrome lustre(870-950), Monochrome lustre(950-?). Benaki Museum の本では反対意見あり??。Feh・は 8 世紀に推定できる Kufic 文字のラスターガラスを示す。Ettinghausen の論文で、ナスリ、バスラ、ミスリのいずれかに読める kufic のガラス、場所がバスラならイラク、ミスリならエジプト。いずれにしても、古い書体で 8 世紀。

イラクで 9 世紀にラスター陶器が作られる。10 世紀に栄える。11、12 世紀は Fatimid

Dynasty(969-1171) のエジプトで栄える。窯跡は未発見だが、フスタートが産地といわれる。違うという意見もある。11、12 世紀にはイラクで廃れていたようである。これは、陶工がイラクからエジプトに移動したからという考えがある(Watson,1985,24)。ファティミッドの終わりに生産が止まる。シリアでラスターが作られ(Porter,1981,5)、イランで生産が始まる(Watson,1985,26)。こうした変化は陶工の移動のためである。

種類、器形、産地、

素地と釉の化学 Chemical 分析、岩石分類 Petrographic 分析

技術、青釉

青緑釉陶器の年代は幅がある。ササン・イスラム陶器と呼ばれることも多い。最近は 8 世紀という説明が多い。ヘヘルバリはグラク蔵品を 6-8 世紀としている。しかし、他の初期イスラム陶器と同じ時代の可能性がある。佐々木論文。揚州や広西省の出土品、九州、福岡市と太宰府市の出土品。

種類、器形

サマラ出土品の実測図が示す。

産地

ホワイトハウスの考え。佐々木の考え。メソポタミア南部である。メイソンの考え。

素地と釉の化学 Chemical 分析、岩石分類 Petrographic 分析

アーリ遺跡の化学分析。

技術

前期イスラム陶器の編年

サマラ編年が基本であった。これと比べて、早い編年、遅い編年、分離する編年がある。

早い編年

Day は 1941 年、多彩釉陶器はアッバース朝でなく、ウマイヤ朝の製品であるという。

1970 年、Robert Adams はイラク中央部にある Tell Abu Sarifa 遺跡の発掘をもとに、次のように報告している。白釉陶器はササン朝の伝統をひいたもので、中国陶磁器の影響で生まれたものではない。白釉陶器片とラスター片合わせて 50 点、緑と黄褐色の流しかけ陶器片 34 点が出土したレベル・は、7、8 世紀である。

初期イスラム陶器の年代は、人によって、200 年ほどの幅がある。アフリカ沿岸から出土する青釉陶器は、9 世紀よりも古く編年する人が多い。ホートンは東アフリカのラム出土品を次のように分ける(1986.1989.)。750-850 年に編年されるのは、ササン・イスラム陶器、長沙、ドウソン、黒釉陶器、Eggshell 陶器、無釉大壺である。800 年頃に白釉陶器が加わり、ラスターは 900 年頃に加わる。しかし、多彩釉刻線文陶器はまだ無い。

Excavations at Aksum の報告書 315 頁。Blue-green glazed ware(Iraqi Samarra body of the ninth to tenth century) は、これより古い年代が与えられるという。最新の研究のタンポーも、シラーフ遺跡でイスラム施釉陶器が登場するのは 8 世紀中頃からという。

遅い編年

しかし、イスラム施釉陶器の出現を新しくする考えもある。1960 年代、John Hansman は Khuzistan の発掘から、白釉や鉛釉多彩釉は post-9th 世紀と考えた。Whitehouse もシラーフの Great Mosque の発掘結果から、1979 年に、遅い編年を発表している。

分離する編年

佐々木は、早いものと遅いものに、分離できると考える。

年代の推定できる遺跡からの出土品

限られた年代の遺跡から出土したものは、年代を決められる。しかし、遺跡が破壊されたと言われる後にも、人が住んだ可能性あり。

Al-Rabadhah ラバダー、Darb Zuhayda マディナ・メッカと(クーファから来た)イラク国境を結ぶ巡礼の道。20 駅あり。805 年に建設、932 年にマディナ、メッカと同時に破壊された宿場町。サウディアラビア発掘。出土品は写真集あり。青釉陶器壺、ラスターなど出土。

Mamzadeh. Siraf(Taheri),977 に地震で壊れる、その後は栄えないと言う人あり。しかし、シラーフは再建されている。

こうした遺跡が、他にもある。

組み合わせの分かる資料でグループの年代差を知る

アール出土品の組み合わせから見る、サマラ出土のグループ分けの点検。この場合、少量出土品の位置づけは二通りの可能性を見る。・割合が少ないことを示す。・古いものが混じっている。また、出土しないことの意味を探る。・偶然なかった。・少量しかないことを示す。・生産されてないことを示す。

サマラ以後の重要な遺跡と研究はシラーフ。これによって飛躍的に研究が発展した。遺構の変遷が明らか(層位的、重なり)な資料が豊富。その遺構の下に詰めた土から出土した大量の陶磁器の分類ができています。編年ができる。Whitehouse の編年。Tampoe の編年。Recently, the most popular chronology of ceramics of the 9th and 10th centuries has been that of David Whitehouse. Nevertheless his theory has been also denied by Moira Tampoe in 1989, using the same finds of Siraf. A number of papers and excavation reports have been published recently on the ceramics of the Abbasid dynasty. But the date of their ceramics is still not perfectly clear. We need to re-classify the finds of Samarra and the other sites of the same period by archaeological methodology.

どの種類がいつ生まれ、多く使われたのはいつか。段階的に新種が登場したか。それともほぼ同時に多くの種類がうまれたか。8 世紀後半か、9 世紀か、10 世紀か。

イスラーム陶器を紹介する多くの本が出版され、陶器の年代と産地が解説された。それは大きな幅を持つこともあった。どちらが正しいかの学問的な論争は少なかった。年代と産地を推定した証拠を示すものも少なかった。これまでに、誰かが言ったからというのが理由であろうと想像できる。

年代と産地を知ることは、たいへんに難しい。イスラーム陶器の窯跡の発掘はほとんど無い。日本や中国のように、窯跡が発掘されれば、陶器の産地を知ることができる。また、窯跡の出土品から同時に焼かれた製品の組み合わせが分かる。しかし、イスラーム陶器では、窯跡の存在さえ不明なことが多いのである。

そこで、推定が多くなる。どこまでが推定か、どこまでは資料で検証できるのか、どういう研究がなされているのか等を知ることが必要である。

(可能性 1) Fehervari. ビザンチンの技術を引き継いで、ペルシアの文様などを取り入れ、イスラーム陶器が生まれ、中国陶磁器の影響はない。

(可能性 2) Whitehouse. 第一段階、白釉陶器、すぐにコバルト彩白釉陶器が続く。白釉陶器は 9 世紀中頃から中国白磁を模倣。第二段階、白釉陶器の流行、鉛釉多彩釉陶器(刻線文なし)および

緑彩、褐彩白釉陶器。第三段階、ラスター彩白釉陶器および鉛釉多彩釉刻線文陶器。10世紀に入ってからラスターは登場。終わりの時期、白釉も多彩釉も11世紀まで作られ、使用されている。

（可能性3）Moirā Tampoe. ホワイトハウスと同じシラーフ出土品を使う。コインで年代をだしたホワイトハウスの資料を使い、全体に出現を古くする。発掘時点の遺物台帳を検討すると、様々な施釉陶器、中国白磁などの種類が9世紀初めにはそろっていた。8世紀後半に中国から粗質灰色白磁、長沙、流しかけ、越、良質の白磁（明らかに白釉陶器が模倣したもの）が輸入された。同時期にイスラーム施釉陶器が誕生する。白釉陶器が現れ、流し掛け釉陶器もほぼ同時に現れる。イラクの多彩釉刻線文はわずかに遅れるが9世紀に生まれ、スタイル1は10世紀中頃から末まで続く。スタイル2は10世紀初めころに登場。南イランの多彩釉刻線文（スタイル3）は11世紀初めより前に登場する。白釉も多彩釉も11世紀まで作られ、使用されている。

佐々木説。エジプトやパレスタインでは、地域の伝統の中から、8世紀末から9世紀初めには緑釉や褐釉の陶器が生まれていた。一方、メソポタミアでも、白釉は再び主要な釉に発展し始めた。時代は8世紀末から9世紀初め頃であろう。中国の白磁の影響で、9世紀中頃には白釉陶器の碗はすっかり器形を変えている。初めは不透明の釉を厚くかけたものが多い。一部の碗にコバルト彩が施されるが、太い線で粗く描いた金色（黄色）ラスターもわずかにある。10世紀に白釉はしだいに透明感のある釉に変化し、美術書によく載るラスターが登場する。主要な産地はメソポタミア南部である。多彩釉陶器は9世紀には一般的でない。長沙窯の模倣という考えが最近も出されている。しかし、サマラから主に出土するのは華北の白釉緑彩陶器である。長沙は非常に少ない。中国三彩は8世紀中頃に途絶えるという考えが、誤った説を生み出す原因になっている。多彩釉刻線文陶器は9世紀には未だ生まれていない。ニーシャープールとよく言われる種類は、9世紀のメソポタミアやペルシア湾地帯では発見されない。アーリ遺跡の第2次調査は、その証拠の一つになる。サマラの最近のイギリス隊の分布調査でも、アッバース朝の遺物がまとまっている場所には、多彩釉刻線文陶器はない。したがって、こうした種類は10世紀から使用され、イランの多彩釉刻線文陶器が流行するのは11世紀からである。メソポタミアは陶磁器の大産地に発展するが、次いでエジプトやイランに中心地が移る。

10. イスラーム陶器を出土した遺跡概略

ハレイラ遺跡 アラブ首長国連邦ラッセルハイマ首長国北部の砂地の島で、ペルシア湾岸の古代交易港遺跡が点在する。一九九三年から日本隊が調査し、五・六世紀から一七世紀頃の陶磁器を発掘している。ササン・ウマイア朝の住居跡からは、青緑釉陶器、刻線文土器、アッバース朝の遺跡からは青緑釉陶器、白釉陶器、白釉藍彩陶器、ラスター彩陶器、多彩釉陶器、多彩釉刻線文陶器、各地の土器が出土し、初期イスラーム陶器研究の貴重な資料となった。一四世紀から一六世紀の貝塚からは、イスラーム各地の陶器と共に中国染付、青磁、タイ青磁、ミャンマー白釉陶器などが出土し、ペルシア湾の陶磁貿易研究資料として用いられている。

アーリ遺跡 ペルシア湾のバハレン島北部中央にあるイスラーム時代の遺跡と窯。一九八八年と九〇年に日本隊が九世紀から十世紀の村落跡を発掘した。大量の土器と共に中国の長沙窯陶器、メソポタミアの青緑釉陶器、白釉陶器、白釉藍彩陶器、ラスター彩陶器、鉛釉型押文陶器などが出土した。サマラタイプと言われる九世紀アッバース朝イスラーム陶器の編年を再考する資料となった。現在の町アーリは遺跡の西側に位置し、彩色無釉土器の産地として知られ、円形窯が数基稼働している。天井のあるものと無いものがある。古墳を利用して窯を築いた例もある。土器以外に石灰を

焼く窯もある。

ジュメイラ遺跡 アラブ首長国連邦ドバイ首長国に所在する交易都市遺跡。中国の白磁、イスラーム陶器が出土し、年代幅が少ないことから、遺跡の年代も短期間に限定できた。

ルリーヤ遺跡 アラブ首長国連邦シャルジャ首長国に所在する砦遺跡。二〇〇〇年から日本隊が調査し、一三世紀末から一四世紀初めの陶磁器を発掘している。中国の青磁、白磁、褐釉陶器が出土し、年代幅が少ないことから、遺跡の年代も短期間に限定できた。同時に出土するイスラーム陶器も同様の年代であることが推定でき、当該期のイスラーム陶器研究の貴重な資料となった。

ジュルファール遺跡 アラブ首長国連邦ラッセルハイマ首長国に所在する港市遺跡。砂地上に陶磁器片が散乱しており、一九八八年から一九九五年まで、英、仏、独、日本による発掘調査が行われた。城壁に囲われた都市内の一部が明らかになり、一四世紀から一六世紀まで再建を続けたモスクやポルトガルが建設した城塞の跡もあった。日本隊は一四世紀から一六世紀の住居跡群を七層に分けて調査し、イスラーム陶器の編年研究史で画期的な成果を納めた。大量に出土したアジア各地の陶磁器は、当時の世界的な陶磁交流を伝える。もっとも多い出土品は地元産の土器で、ジュルファール土器と呼ばれている。調理用の鍋や貯蔵用の壺、瓶、水飲み用の水注等である。ラッセルハイマ首長国内のジュルファール遺跡に近いワジ・ハキールで近年まで生産された無文や彩文の土器であり、アラビア半島の他地域でも出土する。

出土したメソポタミア、イラン、イラクなどの西アジア陶器には、黄色・赤褐色・灰色等の粘土素地の、緑釉陶器、褐釉陶器、不透明白釉陶器、不透明白釉下藍彩陶器、不透明白釉下緑彩陶器、不透明白釉下黒褐彩陶器、不透明白釉下黒彩陶器、不透明白釉下黒・緑彩陶器、および、白色ストーンペイス素地の青釉陶器、青釉下黒彩陶器、透明釉下藍彩陶器、透明釉下藍黒彩陶器、透明釉下緑彩陶器、透明釉下緑黒彩陶器、透明釉下緑白彩陶器、透明釉下白彩陶器などがある。中国青磁、白磁、染付、タイ黒褐釉陶器、ベトナム灰釉陶器、ミャンマー白濁釉陶器も見られ、インド、パキスタン、中央アジアなどのアジア各地の陶磁器が出土する。出土陶磁器は時代の推移による貿易品の産地や量の変化、広範囲な商圈の存在を示す。

コールファッカン遺跡 アラブ首長国連邦シャルジャ首長国に所在する港市遺跡。砦上と砦下平坦面から陶磁器片が出土した。2001年暮れから2008年1月まで6次にわたる日本による発掘調査が行われた。15世紀を中心とするイスラーム陶器や中国、東南アジアの陶磁器が出土した。

ルリーヤ砦出土 13 世紀末のイスラーム陶器

佐々木 達夫

研究の目的と経過

イスラーム陶器は産地と年代の研究に課題が多く、遺跡出土品と美術館蔵品の乖離が大きい[佐々木 2002a]。実態を示す遺跡出土品を用いて 13 世紀末～14 世紀初めのイスラーム陶器研究が本稿の目的である。ルリーヤ砦はアラビア半島東北端のオマーン湾岸に沿う小さな丘上の砦（北緯 25° 22' 46"、東経 56° 20' 46"）であり、位置はすでに図示した[佐々木&佐々木 2002b]。アラブ首長国連邦シャルジャ首長国コールファッカン市ルリーヤにあり、1995 年夏の踏査で遺跡を発見した。同年暮に表面採集を行い、1997 年 12 月に砦及び周辺住居の確認調査を行った。2000 年 4 月から 5 月にかけて砦内部の第 1 次発掘調査、2000 年 12 月から 2001 年 1 月にかけて第 2 次発掘調査を実施し、2001 年 9 月及び 2001 年 12 月から 2002 年 1 月にかけて現地で出土品研究を行った。発掘調査から砦及び砦内部の構造と機能、出土品の組み合わせと特徴、出土品からみる生活を描き出すことができた。見張り塔を中心とする砦内の生活空間の平面的配置と実態、土器とイスラーム陶器、中国陶磁器を組み合わせた生活用品の実態、新たなイスラーム陶器の編年、装飾品の組み合わせ、骨貝殻等の食料残滓から復元できる動物種類や食生活、等がルリーヤ砦の研究成果である[佐々木&佐々木 2002a, b, Sasaki 2001, 佐々木&佐々木 2001, 2000]。そのうち具体的資料を未提示であったイスラーム陶器を本稿で取り上げ、その特徴を論じる。

遺跡位置と遺構の性格

コールファッカン湾北部のルリーヤ岬に突き出す標高 152m の独立した山の西側、海岸から 1km ほどで標高 34m 峠を見下ろす標高 66.7m の三角錐状の丘があり、その上部を砦として利用している。砦頂上の塔からは、北側にルリーヤの居住区、棗椰子畑、海岸が、南側にコールファッカンの街並みが見える。地域の要となる見張り用砦として恵まれた位置にある。丘の両側にはさらに高い山がそびえる。砦平面形は長方形で、石積み壁と自然石、及び斜面によって区画される。石積み壁は岩山斜面に自然割石を積み上げて造られる。石積み壁の外側は 10cm から 30cm ほどの石をきれいに積み上げている。区画石壁の幅は 1.2～1.3m で、壁の両側面に石を 1 列積み上げ、その間の壁内部に小石と泥を詰める。砦平面測量図は図 1 に示した。

砦区画石壁内は上方の塔、下方のテラス、その間をつなぐ階段の 3 区に分かれる。上方の塔は方形石積み壁の基礎部分が残る。内部は現在平坦となる。下方のテラス（水タンクテラス）は炉や灰混じり砂が多く発見され、土器片なども多く出土し、居住空間として用いた場所である。ほぼ平坦な面は長方形となり、長さ 36m、中程で幅 13m ほどである。これらの施設を結ぶ石積み列の階段は、上部の傾斜がきつく下部の傾斜は緩い。家は砦区画北側石壁を北側壁として利用し、部屋は 3 室ある。室内には壁際に炉灰が堆積し、パン焼き竈も壁際にある。水タンクの平面形は外枠が長方形で、南北方向が長軸となり、4.6×3.1m である。内側壁は四隅が半円形となり、長軸 3.9m、短軸 2.2m である。内側壁はほぼ垂直に立ち上がり、底はほぼ平坦に白色プラスターが塗られ、深さは 2.8m である。壁材としてビーチストーンを主に用いるが、珊瑚も少し用いる。礼拝所は斜面際

に半円形に石を並べ、内部に三角形に小石を置く。半円形はミヒラブの代わり、三角形はマッカ方角目印のキブラと思われ、砦内の礼拝所と推定される。礼拝所に接する斜面下方に多くの穴が岩盤に穿たれる。数個が並んで組になるものがあり、柱穴跡である。砦内の狭い範囲が異なる目的の施設に使用された状態がわかる。

出土品の種類とイスラーム陶器出土比率

1994 年、1997 年採集品は今回の検討から省く。2000 年の第 1 次発掘調査時に砦が築かれた小丘急斜面の岩面上で徹底した遺物採集を行い、陶磁器片、石製品、ガラス片、その他の少量であるがさまざまな物が発見された。無釉の土器片が細かに割れて地表面に落ちており、破片の総量は 338.7kg であった。土器に次いで数が多い表面採集品は施釉陶磁器で、多くはイランから運ばれたがイエメン陶器も見られた。重量のある石製品は擂石と回転擂石の 2 種類があり、点数は十数点ほどである。中国陶磁器も発見された。ガラス容器片やガラス・バングル、及び小さな装飾品等も採集できた。魚骨、鳥骨、動物骨、貝殻もかなりの量を採集し、種類鑑定もした。これらの採集品の年代と砦の使用年代は、採集された中国陶磁器から推定できる。青磁と白磁は 13 世紀後半ないし末から 14 世紀初頭という限られた時期に属し、大部分が 13 世紀第 4 四半期に生産されたものである。採集品は居住した人々の食生活や日常生活等を復元する資料となる。第 1・2 次発掘調査の発掘区画内から出土した遺物は、砦斜面表面採集品の約半分ほどの量で少ない。出土品の種類や組み合わせ傾向は表面採集品とほぼ同じである。堆積土の上層から下層まで、どの地点でも魚骨、動物骨、鳥骨、貝殻が出土する。土器片もどの層からも出土する。施釉陶器は土器よりも少ない。ガラス・バングルも各地点から発見される。しかし、ビーズなどは発見される点数は少ない。出土状況は階段上部の石段面を例に挙げると、面上に 10cm から 15cm ほど堆積土があり、石段面に緑釉陶器碗や中国青磁蓮弁文碗、コバルト青色ガラス・バングル、蛤、帆立などの貝殻、魚や動物の骨が発見された。どの地点でも同様に遺物が堆積土中から出土している。

施釉陶磁器は釉の種類、素地、装飾によって分類した。出土量はイスラーム青釉陶器及び緑釉陶器が最多である。青釉陶器のいくつかは釉下に黒色の装飾が描かれる。黄釉陶器及び黄釉下黒彩文陶器は青・緑釉陶器に次いで多い。中国陶磁器の数量はイスラーム陶器よりかなり少ないが、希なものでもない。土器あるいは無釉土器は廃棄量がもっとも多い。陶磁器は種類と素地ごとに分類し、器種ごとに口縁部、胴部、底部に分け、それらの項目ごとの破片数と重さを計測し、表 1 に示した。

中国陶磁器

本稿の研究目的はイスラーム陶器であるが、その年代決定は中国陶磁器に依拠しているので概略を述べる。本稿で図写真を掲載するスペースはないが、第 1 次発掘で出土した中国陶磁器の一部は発表している[Sasaki 2001, 佐々木&佐々木 2000]。中国陶磁器は出土した陶磁器のなかで重量が 0.41% を占める。土器を除いた施釉陶磁器のなかでは中国陶磁器が占める重量割合は 5.44% である。染付や色絵はなく、青磁、白磁、褐釉の 3 種類である。青磁は碗鉢、白磁は合子が主で碗瓶もあり、褐釉は壺のみである。青磁は 13 世紀後半から 14 世紀前半、とくに 13 世紀末 14 世紀初めの生産年代が推定できる碗と鉢が大半を占める。外面に鎬蓮弁文が施される破片が多い。多くが貿易品として世界各地で出土する種類の竜泉窯製品である。他に年代不明であった他産地の灰色青磁（灰釉陶器）があり、遺跡から共に出土した竜泉窯青磁から年代推定が可能となった。青磁は碗が 1194 g、盤が 254 g であり、碗が盤の数十倍の個数であったことがわかる。青磁は白磁の約 7 倍の量が出土してい

る。白磁は型物合子、口禿碗が主であり、多くが福建省産と推定できる。数量は少ないが景德鎮の青白磁皿もあり、これも 13 世紀から 14 世紀初めの製品である。型物合子は高台と口縁部が無釉で、外側面に蓮弁の型文が施されるものが多い。碗の内面に刻線文が施されるものがある。白磁は合子が 145 g、碗が 63 g、瓶 6 g で、合子の個体数が多い。褐釉陶器はいずれも小片で全形の復元は難しいが、壺 6 個体の破片、重さは 671 g で、青磁の半分以下の出土量である。褐釉陶器は 1 個体のわずかな部分のみが採集されているから、青磁や白磁についても採集した破片は廃棄されたものの一部であろう。

イスラーム施釉陶器

イスラーム施釉陶器は出土した陶磁器のなかで重量が 7.53% を占める。土器を除いた施釉陶磁器のなかでイスラーム施釉陶器が占める重量割合は 94.82% である。中国陶磁器を除いたイスラーム施釉陶器のなかでもっとも多いのは青・緑釉陶器で重量は 78.29% を占め、碗鉢が主である。青釉陶器には釉下黒彩文が描かれるもの、釉下刻線文様があるものが含まれる。次は黄釉陶器で、重量はイスラーム施釉陶器のなかで 17.77% を占め、碗鉢が主である。黄釉陶器には釉上に褐色と緑色で彩文されるものがある。青・緑釉陶器も黄釉陶器もわずかだが瓶盤等もある。その他の種類は重量全部を合わせても 4% ほどに過ぎないが、多彩釉白化粧土上刻線文陶器、藍、緑、黒色を別々に用いた透明釉下彩画陶器、白濁釉陶器、色絵陶器等のさまざまな種類がある。

青・緑釉陶器（図 2～4）は青緑釉陶器、青釉陶器、緑釉陶器、淡緑釉陶器、灰緑釉陶器等に分けられる。素地は淡紅色素地が 79.98 重量%、黄色素地が 8.05 重量%、淡紅黄色素地が 4.44 重量%、黄色/淡紅色素地が 0.51 重量%、紅色素地が 0.07 重量% である。素地の色は紅色が 8 割を占め、1 割ほどが黄色、残りが中間的な色である。これらの青・緑釉陶器のなかで重量は碗鉢が 92.72%、瓶が 4.80%、壺が 4.75%、盆が 1.47%、盤が 0.95% である。青・緑釉陶器の碗鉢がイスラーム陶器の大部分を占める器種であり、その素地は多くが紅色である。装飾される割合は少ないが、釉下刻線文、釉下黒彩文、素地上盛り上げ等が見られる。

黄釉陶器（図 5～6）は黄釉下に褐彩で弧状線が描かれるものが多い。素地は紅色が 92.17 重量%、黄色が 7.22 重量%、淡紅色が 0.62 重量% で、紅色が大部分を占める。器種は碗鉢と皿が主で、大形は折縁となり、数量は少ないが瓶もある。褐彩と緑彩の 2 色で装飾したものもあるが、2 彩装飾品は少ない。やや淡い紅色の素地に、金色に光る小さな雲母がわずかに混じるのが 9 割を占める素地の特徴である。

釉下刻線文陶器（図 7）は多彩釉がなく、黄釉と緑釉の 2 種類である。素地上に白スリップを掛けるので、黄釉下白スリップ上刻線文陶器と緑釉下白スリップ上刻線文陶器に分けられる。

褐釉陶器（図 8）は緑色がかかる褐釉で、黄色素地、黄色粗質素地、赤/灰色素地、淡紅色素地、灰色素地などがある。釉に緑色が混じらず、褐釉よりも黒褐釉陶器と分類できる釉発色もある。いずれも瓶壺の類で、碗鉢はない。

白釉、白濁釉、透明釉の陶器（図 8, 9）。白釉陶器釉上緑彩は黄色素地である。白釉陶器釉上黒彩は紅/黄色素地である。透明釉下に装飾した陶器は 3 種類があり、透明釉下コバルト青色彩陶器、透明釉下褐彩陶器、透明釉下青・緑彩陶器である。

以上の陶器は素地が粘土であるが、stone paste と呼ばれる石英を主とする素地の陶器（図 9）も 3 種類ある。青釉下黒彩陶器は淡いピンク色素地で、重さ 0.5 g である。透明釉下黒彩陶器は白色素地で、重さ 1 g である。色絵陶器は 12 g である。3 種類を合わせた重量はイスラーム施釉陶器

のなかで 0.03%ときわめて珍しいものである。数少ない珍奇な品、美しい色彩の品である。色絵陶器は白色素地であり、コバルト青色、褐色、黒色の上絵装飾がある。

補修孔のある施釉陶器片（図 9）もある。黄釉陶器、黄釉刻線文陶器、緑釉陶器の 3 片のみを示したが、いずれも孔に鉄を通して割れた破片を固定している。当時の補修技術を示している。

イスラーム施釉陶器で轆轤成形の際の痕跡が見えるものは、いずれも成形が轆轤左回転である。底部の高台削り痕が見えるものは、いずれも轆轤左回転で高台を作りだしている。

イスラーム無釉土器

土器の出土量はもっとも多いが、本稿に図写真を掲載するスペースはない。施釉しない土器は多くが壺や瓶であり、砦外の斜面上で採集された。表面採集土器の重さは 324.9kg である。そのうち、胴部片は 229.65kg であり、これには彩文のある胴部片 1.35kg を含む。底部片は 48.0kg である。把手部分の破片は 31.20kg で、彩文のある破片 0.15kg を含む。口縁部片は 16.05kg であり、これには彩文のある破片 0.05kg を含む。陶磁器全体のなかで 92.05%の重量を占める。型製土器は黄色素地で瓶がある。刻線文土器は黄色素地、細質紅色素地、細質紅赤色素地がある。表面白色で細質紅赤色素地の刻線文土器もある。赤色彩文土器には表面白色スリップで粗質赤/黒色素地、表面黒色で粗質赤色素地がある。土器の多くは淡紅色素地、淡紅赤色素地、紅色素地、粗質赤色素地、粗質赤/灰色素地、粗質赤/黒色素地、黄色素地、粗質黄色素地、粗質緑黄色素地、黄白色素地などである。黄白色素地の土器はフィルター付瓶のみであり、他の土器と異なる産地と推定できる。

出土したイスラーム陶器の特徴

イスラーム陶器の年代研究は遺跡との関係及び同じ層位出土品の組み合わせが重要であり[佐々木 2002a]、遺跡出土品は貿易を考える資料でもある[佐々木 2002b]。ルリーヤ砦は短期間に 1 軒の家に居住した家族の使用品と推定できるため、年代研究の資料として価値がある。出土した中国陶磁器の年代が 13 世紀末から 14 世紀初にほぼ収まることから、同時に出土したイスラーム陶器の年代も同じ頃と推定できる。この時期のイスラーム陶器年代研究に寄与すると同時に、砦内で生活用品として使用した産地の異なるイスラーム陶器の組合せ、及び遠隔地貿易品の占める割合等が研究成果と評価できる。筆者はアラビア半島の当該地域で海上貿易研究を目的としてハレイラ遺跡やジュルファール遺跡等を発掘調査し、周辺の遺跡調査も加えると 5 世紀から 19 世紀にかけての研究資料を得ていたが、11 世紀から 14 世紀初にかけての適切な遺跡と資料は少なかった。そこで研究資料を追加するためにルリーヤ砦発掘を行い、当該期のイスラーム陶器の地域の実態の一端を明らかにした。

中国陶磁器の出土割合と青磁、白磁、褐釉の組合せ、及び器種構成はこの時代の貿易品に一般的なものであり、遠距離貿易が広範囲な地域に同質の文化をもたらした例の一つと解釈できる。東南アジアの陶磁器は出土せず、14 世紀後半のジュルファール遺跡出土品と比較しても、この地域はまだ中国陶磁器の独壇場であった時代とわかる。中国陶磁器のなかでは 14 世紀中頃から増加する染付が見られず、13 世紀末から 14 世紀初の特徴をよく示す組合せの出土品である。

イスラーム施釉陶器は中国陶磁器の 18 倍の重量が出土し、生活用飲食陶磁器の 95%を占めている。施釉陶器で最多は 8 割を占める青・緑釉陶器である。黄釉陶器は青釉陶器の 1/4 ほどである。いずれも碗鉢が多く、盤瓶を含めれば大多数となる。一部に装飾付き製品もあるが、実質的な無装飾の実用品が大部分であり、装飾豊かな陶磁器が砦内に保管されたのは同時期に 1 個体程度であったと想像できる。黄釉及び緑釉の白化粧土上刻線文陶器、透明釉下に藍彩、緑彩、青・緑彩で装飾した透

明釉下彩画陶器、色絵陶器があり、輸入した中国陶磁器と比較的近距离のイラン陶器、及びイエメン陶器を組み合わせた生活用品としての陶磁器、及び少量の装飾施釉陶器を組み合わせた生活様式が見える。イラン高原の装飾施釉陶器 stonepaste 素地は遠距離貿易で運ばれた中国陶磁器よりも珍奇で高価であったと推定できる。

青・緑釉陶器は前後の時代にも一般的な種類である。さまざまな発色の釉が見られ、素地は淡ピンク、ピンク、ピンク黄色、黄色、及びその中間的な色に分けられる。いくつかの産地に分かれるが、多くはイランの同じ産地から搬入されたようであるが、イランの窯跡と出土品が不明なため産地同定ができない。器種は碗が 87.6%でもっとも多い。壺は 6.4%、瓶は 3.5%、盆は 1.5%、盤は 1.0%である。

黄釉陶器は 14 世紀中頃から居住が始まるジュルファール遺跡では数片のみしか出土せず、15 世紀が中心のコールフアッカ町跡[佐々木 2005]からは同じ種類の黄釉下褐彩陶器碗片が 1 点のみ出土している。ルリーヤ砦以後の時代にこの地域の黄釉陶器流通すなわちイエメンとの貿易はほぼ途絶えたことを示している。ジュルファール遺跡に近いクッシュ遺跡では 20 片出土している [Kennet 2004]。アフリカ東海岸では 13~14 世紀に広く流通した陶器として知られている [Horton 1996]。黄釉陶器、黄釉褐彩陶器はイエメン産と推定されているが、産地や窯跡については不明瞭である。ルリーヤ砦出土品は 13 世紀末を中心とするイエメン陶器の型式設定ができると同時に、この時期のイエメンを含む海上貿易のありかたを特徴付ける資料である。

釉下刻線文陶器（スグラヒアト）は 9~10 世紀のメソポタミア製品と異なるものであり、それ以降に現れる硬質ピンク素地陶器は 11~13 世紀の年代と推定されている。しかし、多彩釉を用いない黄釉及び緑釉の 2 種類は 13 世紀後半まで作り続けられた、あるいはこの時期であるという年代を出土品は示している。

色絵陶器（ミナイ）は 3 片のみの出土であり、小片のため全体の文様を知ることはできない。いずれも草花文あるいは抽象的な文様のようである。ミナイは 12 世紀に限られるとも言われるが、人物画は 12 世紀後半に多く、草花文は 13 世紀に多くなると筆者は推定しており、出土した色絵片は文様から 13 世紀代と推定できる。中国青磁の年代は 13 世紀末から 14 世紀初が大部分であり、同時に使用した他の陶磁器もほぼこの年代のものと推定できる。イラン高原産のミナイは半世紀ほどの短期間の生産ではなく、年代の下限を広げて考える資料となろう。多量に出土している陶器は時期が限定できるが、破片数が少ない特殊な陶器は古いものが伝世して混じった可能性を否定できない。研究資料の増加が待たれる。

土器は主な用途が貯蔵等の瓶壺、煮炊き用の鍋壺、それに碗鉢である。彩文土器も見られる。採集した土器片の重量は陶磁器全体の 92%を占めるが、この割合は筆者がフスタートやジュルファールなどで計量した数字とほぼ同じであり、西アジアの都市や港町では一般的な例である [佐々木 1995, 1993]。土器碗の形はエジプト出土品などと異なり、イランと当該地域アラビア半島の製品が大部分である。フィルター付瓶は土器瓶が 2 片のみ出土している。14 世紀中頃から 15 世紀中頃にかけてのジュルファール遺跡出土品でも数トンにのぼる発掘陶磁器のなかでフィルター付瓶は数点しか発見されなかったが、その前の 13 世紀末から 14 世紀初でもきわめて少ない。黄白色素地瓶 E037 は頸部が狭くなり径 4.0cm で、上方からスパード形の文様を切り取り周囲に円を描く。黄白色素地 E031 も瓶で素地は他の土器よりも薄い。いずれも文様は単純である。この 2 点は他の土器の素地と異なるから搬入品である。エジプトで多く発見されるフィルター付瓶はペルシア湾岸及びオマーン湾岸では例外的なものである。

13 世紀末を中心とするイスラーム陶器の研究にたいし、ルリーヤ砦出土品は一つの基準となる成果を提供している。

結論

ルリーヤ砦から出土した 13 世紀末から 14 世紀初の新たな研究資料によって、不明な点が多かった当該時期のイスラーム陶器の実態、年代や組合せ研究において見るべき成果をあげた。オマーン湾沿岸地域及びペルシア湾沿岸地域におけるイスラーム陶器研究の基準資料の一つとして、ルリーヤ様式を提唱する。

文献

- Kennet,D., 2004, *Sasanian and Islamic Pottery from Ras al-Khaimah*, BAR IS,1248.
- Horton,M., 1996, *Shanga*, Memoirs of the British Institute in Eastern Africa:14.
- 佐々木達夫,2005「災害が作る遺跡」『金大考古』47:8-9.
- 佐々木達夫、佐々木花江,2002a「ルリーヤ砦の構造と出土品」『平成 13 年度第9回西アジア発掘調査報告会報告集』55-57.
- 佐々木達夫、佐々木花江,2002b「オマーン湾岸のルリーヤ砦」『平成 12 年度第8回西アジア発掘調査報告会報告集』92-96.
- 佐々木達夫,2002a「西アジアの陶磁」『東洋陶磁史』東洋陶磁学会, 301-309.
- 佐々木達夫,2002b「遺跡出土の破片が語るイスラーム陶器の変遷と流通」『東洋陶磁史』東洋陶磁学会, 310.
- Sasaki,T. & Sasaki,H., 2001, Excavations at Luluyyah Fort, Sharjah, U.A.E., “Tribulus”11-1:10-16.
- 佐々木達夫、佐々木花江,2001「イスラーム時代の交易を語る:シャルジャ首長国、ルリーヤ遺跡の第1・2次発掘調査」『西アジア考古学通信』10:5-6.
- 佐々木花江、佐々木達夫,2000「アラビア半島シャルジャ首長国のルリーヤ砦」『第7回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』70-78.
- 佐々木達夫,1995「物が語るインド洋の交流」『文明と環境 10 巻 海と文明』朝倉書店,109-130.
- 佐々木達夫,1993「インド洋の中世陶磁貿易が語る生活」『上智アジア学』11: 87-117.

イスラームの染付

佐々木達夫

1 はじめに

東洋陶磁学会第 25 回大会テーマ「青花磁器について」で発表の「イスラームの染付」は次のようであった。一、問題の設定。二、イスラーム染付の認識と研究資料。三、中国唐代並行の白濁釉上藍彩陶器。四、中国宋代並行の透明釉下コバルト青彩陶器。五、中国元明代並行の透明釉下コバルト青彩陶器とその類品。六、イスラーム染付の同時性と変遷の検討。七、ジュルファル遺跡出土のイスラーム施釉陶器、及びイスラーム染付とその類品。八、イスラーム染付と共に使用された中国染付。九、イスラーム染付と中国染付の比較。十、中国元明染付の模倣度の高いイスラーム染付。十一、中国染付の模倣度の低いイスラーム染付。十二、中国染付と類似しないイスラーム染付とその類品。十三、イスラーム染付の歴史的特徴。本稿は、このうち二、五、六、七と十三で取り上げた部分を中心に論じる。

2 イスラーム染付とは

イスラーム陶器には青色で彩文した陶器がある。顔料を釉の上下で分けると、中国や日本の染付と同様に透明釉下にコバルト彩の文様を描くもの、東洋と違って白濁釉上（中に溶け込む）にコバルト彩の文様を描くものに分かれる。白濁釉上にコバルト彩の文様を描くものは、九世紀にメソポタミアで作られた白釉藍彩文陶器が代表的種類である。彩文にはコバルト青色の他に緑色加わることも多い。描く文様が釉の上下の違いがあるが、東洋の染付に見た目が似ている。白釉藍彩文陶器が作られた時代は唐代と併行するアッバース朝であり、中国でもっとも古い唐染付との関係が論じられている。

中国や日本の染付と同様に透明釉下にコバルト彩の文様を描く陶器は、元染付よりも古い十三世紀初めからイラン等の地域で作られた。十五世紀以降は中国染付の影響を受け、文様や形態も中国風のものが増え、コバルト青色の役割も高くなる。ただし、イスラーム各地で同様の製品が作られたのではなく、地域的な特色がみられる。中国染付の影響を受けた陶器でも、中国染付を連想しにくい種類もある。

ライトリングは一九三八年、当時すでに蒐集家の間で話題となっていた元明染付の影響を受けたイスラーム釉下彩陶器を具体的作品で指摘し、十二～十三世紀のセルジューク朝と十六～十七世紀のサファヴィ朝の中間期の特徴を論じている[Reitlinger 1938]。一九二〇年代に九世紀の中国白磁のイスラーム陶器への影響はサマラ出土品によってサーレ等が論じたが、一九三〇年代にも十五～十六世紀頃を中心とした中国染付のイスラーム陶器への影響という現在に通じる魅力的な課題が論じられ、この課題は現在も研究者の注目を引いている。

レインは一九四八年に、スルタナバードやシリア、エジプトの十四世紀陶器はイスラーム陶器がやや方向感覚を失った時期と捉えたが、十五世紀に輸入された中国染付はペルシア工芸を農民レベルへ逆戻りさせない刺激を与えたという[Lane 1948]。さらに、レインは一九五七年、十七世紀にイズニクの陶器生産が衰退し始めると、ペルシアで中国の染付を模倣した陶器が作られたと述べた[Lane 1957]。九世紀に中国白磁の影響をうけてイスラーム陶器が成立・発展したとするサーレの

考え[Sarre 1925]をレインも受け入れ、イスラーム陶器が中国染付の影響を受けたと述べた。その後、中国染付の模倣については、イスラーム陶器としての独自性の魅力を損なうと感じた研究者が多かったのではないだろうか。中国の文様や雰囲気ときわめて類似したイスラーム染付に地域的独自性を感じにくいのは、世界的共通性を求めた作品であったから当然であろう。その後のイスラーム陶器概説書で、中国染付と交流のあるイスラーム陶器の時代を後期あるいは衰退期と考える原因となったのであろう。しかし、世界的同時代性をもつ地域社会に取り入れられたイスラーム染付を衰退期と呼ぶのは適切でない。

多くの論文を著し、具体的な研究成果を挙げた一人にグルーベがいる。彼は十五世紀中国染付を模倣したペルシア陶器を、シリアの陶器や十六世紀以降のペルシア陶器と文様や器形で区分した。Crowe は一九八〇年、十七世紀の中国とイラン染付の深いかかわりを述べた[Crowe 1980]。イラン陶工が彼らの好みで模倣する中国染付文様を選択し、文様を変更し、組み合わせを変化させたこと、その結果、中国にはないイスラーム好みの文様組み合わせ、中国では一緒にならない年代の異なる文様の組み合わせも見られること、時代的な技法や装飾の特徴等を指摘する。各時代の文様を融合し発展させたイラン陶工を積極的に評価して、研究史上の位置づけを修正している。

イスラーム染付の分類や名称は、学問的に与えられたものよりも、骨董市場に大量に出回った品の由来を示すクバチ、バラミン、ミレトス、スルタナード、アラク（スルタナバード後期）、サリーなどのように都市名や遺跡名によることが多い。参考にはなるが、年代や産地推定は不正確で、美術商のいう蒐集地名の不確かさもあり、それらの名称に対する研究の裏付けは少ない。

なお、紀年銘のあるイスラーム染付は、ホブソンが一九三二年に紹介した英国博物館蔵の 1616AD 年銘(1025AH) Teapot[Hobson 1932, Fig.81]の他、十七世紀代にはかなりの作品数が知られ、年代を知る手がかりとして役割を果たした。ヨーロッパの十七世紀静物画のなかに中国陶磁器は頻繁に見られ、オランダの Nicolaes Gillis が一六〇一年に描いた静物画に中国染付碗が描かれるのがもともと古い絵画資料のようである。ヨーロッパ絵画にイスラーム染付が描かれることは少ないが、イランのミニアチュアには描かれることが早くから指摘された[Gray 1949]。沈没年代の明らかな船舶の引き揚げは世界中で多いが、中国や東南アジアの陶磁器が主で、イスラーム染付の引き揚げは少ない。イスラーム染付は主に、考古学の研究に伴う遺跡出土品、盗掘品で美術商経由の美術館蔵品によって研究される。歴史的情報を持つ遺跡出土品は小破片が多く 1 点を扱うには不向きで、美術館蔵品は 1 点の説明はしやすいが背景が断ち切られているので歴史を語るのに向かない。

3 イスラーム染付の同時性と変遷の資料

イスラーム染付のかなりの部分が中国染付に描かれた文様を写したことは疑いない。それでは、中国染付の文様と時代的に対応するのだろうか。当時流行の輸入直後の製品を見本としたか、すでに購入した古い中国染付を写したのか。中国染付から直接にではなく、イスラーム染付を手本にしたか。そうすることが入り混じっていたのだろうか。模倣の同時性の問題である。また、模倣品を作る割合はどの程度であったか。文様はどの程度時代的に変化したか。染付以外の工芸品からも文様を取り入れられたのか。こうした点を検討する基本資料に何を用いるかが問題である。

いくつかの文様の組み合わせで、器面の装飾がなされたのだろうか。一部の文様要素を取り上げ、中国染付と年代的並行関係を考えることは魅力的な方法だが、恣意的な方法かもしれない。多くの文様は永く続き、文様要素の変化の方向も一列でなく、イスラーム染付の文様と特定して比較できる中国染付の様式変化も典型例に限られる。イスラームにおける中国染付の使用は永く、イスラーム

ム圏で描かれた文様をどの年代の中国染付文様に関連付けるかは複雑である。地域文化に基づく人々の好み等の文化受容の相違があり、人々に好んで受け入れられた文様でも雰囲気や細部の地域化が進むのは当然である。受容する地域の人々が選択し、刺激を受けた文様を変化発展させるのも当然である。すべてをそのまま取り入れるのではなく、時代の違う文様要素を受容者の好みに合わせて組み合わせ、新たに創造するのも当然である。中国のオリジナルな文様と比較し、文様の変化等を退化とするか発展とするか、評価が分かれるところである。

産地研究も、描かれた文様を中心にとすると、イランか中央アジアか、シリアかトルコか等を区別することさえ困難なことがある。器の製作技術及び素地の分類研究が、産地研究にとっては文様研究よりも重要である。基本的な研究態度として、イスラーム染付それ自身を分類した様式設定と編年を考えるべきである。資料を入手する際に出土層位や位置を記録しない発掘方法をとった場合、その出土品を研究資料として用いるのは問題がある。美術館所蔵品の多くは、歴史的情報を切り捨てたそれ自身の骨董的価値を優先して持ち、それを研究資料に用いた研究は歴史的背景が薄れやすく、用いる資料そのものにもコレクターの好みが入るため偏りがある。

同時性と文様、産地等の変化を考える方法の一つとして、歴史的情報を多く含む遺跡の同じ層位から出土する組み合わせ品を検討する。層位的変化は年代の不明なイスラーム染付の編年を考えるうえでも重要な情報となる。本稿ではジュルファル遺跡の出土品を例にとる。

4 ジュルファル遺跡出土品の分析と検討(表1、図1～5)

(1) 彩画陶器の分類

遺跡はアラビア半島アラブ首長国連邦ラッセルカイマ首長国にあり、七層に分類した発掘層は十四世紀中頃から十五世紀後半と推定できる[佐々木 1997,94,93,92,91,90]。出土したイスラーム施釉陶器を素地によって白色 Stonepaste、Clay+Stonepaste、黄色 or 赤褐色粘土に三分類し、そのうち白色 Stonepaste と Clay+Stonepaste を種類ごとに重量と比率を記載したのが、表1「ジュルファル遺跡出土のイスラーム陶器(Stonepaste 素地と Clay+Stonepaste 素地)の層位別出土重量(g)と比率(%)」である。代表的な種類は図1「ジュルファル遺跡出土の施釉陶器(Stonepaste 素地と Clay+Stonepaste 素地)」に示した。

透明釉下青彩陶器が中国染付に色彩の点で類似度が高い。素地も白く、文様も類似している。青色に緑色や黒色等を加えた彩画陶器や青色なしの彩画陶器も、同じ釉下彩陶器として扱う種類である。それらは透明釉下緑彩陶器、透明釉下青・緑彩陶器、透明釉下青・黒彩陶器、透明釉下青・紫彩陶器、透明釉下緑・白彩陶器、透明釉下白彩陶器、さらに青緑釉下黒彩陶器である。青緑釉下黒彩陶器は文様の類似度の点で染付と関係が深いが、文様を覆う釉は透明釉でなく、釉下の深い黒色を浮き上がらせる透明青緑釉であり、顔料も青色でない。しかし、イスラーム染付の同類として同時に考慮すべきものである。

(2) 白色 Stonepaste 素地陶器

白色 Stonepaste 素地陶器は質がよい。素地の色は白色から灰白色まであり、White Dense、White、Pinkish White、Yellowish White、Pale Greenish White、Grayish White の六種類に分けた。一般に Stonepaste 陶器は、石英 10 に対し、アルカリフリット 1 と白色粘土 1 を混ぜた素地を用いる。素地に含まれるわずかな量の粘土成分の程度によって、色調や感触の違いがみえるようである。White は二種類に分け、締まった硬い感じの素地に Dense を付け White Dense とした。

白色 Stonepaste 素地陶器の中で、中国染付にもっとも類似する透明釉下青彩陶器は、第7層に

なく、第6層で少し出土し、第4層でやや増加し、第3層でさらに増え、第2層でピークとなり、第1層では第4層程度に減少する。盤外面に紫色の圈線を引く透明釉下青・紫彩陶器も、第4層から出土し始め、第2層でピークとなり、第1層で第3層程度に減少する。同じ種類は、同じ変遷の傾向をたどる。青と黒の2彩を用いた染付に近い透明釉下青・黒彩陶器は、第4層から急に増加し、第1層で最多となる。文様のない透明白釉陶器は、第5層で増加するが、第2層、1層では青彩陶器と青・黒彩陶器のために出土例がない。第4層で一般化した青色で文様を描くイスラーム染付は、第2層で最盛期を迎え、第1層になると青と黒の2彩陶器が多くなる。十五世紀前半が中国染付模倣のイスラーム染付の最盛期で、十五世紀後半は黒色を交えたイスラーム化の復活がみられる。

緑色のやや太い線で文様が描かれる透明釉下緑彩陶器は第7層から第1層まで全体的に出土する。黒と緑の二彩を用いた透明釉下緑・黒彩陶器は、緑色を線画でなく塗りつぶしに使うことが多く、第7層が最多で、第6層より上層では出土例が少ない。同じ傾向を示し、第7層に多く、第5層より上層では出土しない陶器は、透明釉下緑・白彩陶器である。緑彩・白彩陶器は、緑色の太い線で文様が描かれ、白泥で緑彩の上に点文や、素地の上に圈線が描かれる。緑彩は染付に近い陶器であり、透明釉下青彩陶器よりも前からあり、同時に存在する。黒色や白色と組み合わせの緑彩陶器は、十四世紀後半で消える。中国染付の影響を受けた緑彩陶器は、線が細くなり、文様も中国風になる等の変化がおこる。

透明釉下黒彩陶器はすでに無いに等しい程度と減少し、白色 Stonepaste 素地陶器に黒彩は向かないことが分かる。ただし、黒彩は透明釉ではなく青緑釉の下に描かれ、青緑釉下黒彩陶器は第7層から第1層まで出土し、とくに第3層と第2層がピークになる。青緑釉下黒彩陶器が第1層で減少するのは、透明釉下青・黒彩陶器の増加と関係するのと同時に、十五世紀後半を代表する Clay+Stonepaste 素地の青緑釉下黒彩陶器の急激な増加のためである。白色 Stonepaste 素地の青緑釉下黒彩陶器は、青彩の流行による影響を受けると同時に、他産地の同類の陶器に市場を奪われた可能性が高い。無文の青緑釉陶器が黒彩のある青緑釉陶器よりも多いのは、第7、5、1層である。逆に黒彩のある陶器が多いのは、第4、3、2層である。ほぼ同じ量となるのは第6層である。

(3) Clay+Stonepaste 素地陶器

黄色粘土がやや多めの Stonepaste 素地で、白色に近いものから淡いピンク白色までである。フリット成分を含むが、粉状で軟質である。粘土の含まれる量が少ないものから多くなる順に Whitish Yellow、pale Pinkish Yellow、Light Yellow の三種類に分けた。中国染付模倣品の一種だが、素地は純白でなく、黄色粘土をかなり含み、彩画顔料は黒色がもっとも多く、コバルト青色と緑色がほぼ同じ程度である。

透明釉下青彩陶器は、第7層から第1層まで出土するが、黄色 Clay+Stonepaste 素地と白色 Stonepaste 素地とが補完的になる。白色 Stonepaste 素地が増加する第2層では減少し、白色 Stonepaste 素地が少ない下層では、黄色 Clay+Stonepaste 素地の透明釉下青彩陶器が多い。

透明釉下緑彩陶器は、白色 Stonepaste 素地の同類陶器と同様に、第7層から第1層まで全体的に出土する。透明釉下緑・白彩陶器はきわめて少ない。白泥の線で白い文様が描かれる透明釉下白彩陶器は下層にはないが、第4層から上の層で緑彩陶器と同程度に流行した。碗の内面に白泥で放射状線を施したものもある。

透明釉下黒彩陶器は、白色 Stonepaste 素地の同種類と同様にきわめて少ない。ただし、第7、6層には青緑(?)釉下黒彩陶器としたものが多く、これが透明釉下黒彩陶器になる可能性がある。透明釉下緑・黒彩陶器は、第7、6層で多く、次第に減少するが、第1層まで出土する。白色 Stonepaste

素地の透明釉下緑・黒彩陶器は第7層に多いが、第6層より上で黄色 Clay+Stonepaste 素地の同類よりも早く減少し、同じ種類でも産地ごとの盛衰時期の差が見える。黒彩は透明釉下でなく青緑釉下に描かれ、青緑釉下黒彩陶器は主要な種類であり、彩画陶器の中でもっとも出土量が多く、第7層から第1層までである。とくに第1層での増加は他産地に影響を与え、白色 Stonepaste 素地の青緑釉下黒彩陶器の第1層での減少と対応する。

無文の透明白釉陶器は彩文陶器の流行のために全体的に少ない。青緑釉陶器は第7層から第4層まで多いが、第3層から減少し、第1層で少し増加するが、下層ほどの量は出土しない。

(4)黄色・赤褐色・灰色等の粘土素地陶器

粘土素地はイスラーム施釉陶器のなかでもっとも量が多い。黄色・赤褐色・灰色等の粘土素地は Creamy Yellow Powderd、Creamy Yellow Coarse、pale Greenish Yellow、Greenish Yellow、Pinkish Yellow、Yellowish Pink、Pink、Red の八種類に分けた。釉は不透明白色、緑白色、黄褐色、青緑色、褐色である。彩画される陶器は、不透明白色釉陶器（白釉陶器）と黄褐色釉陶器である。

不透明白釉陶器はもっとも量が多く、素地は黄色で粉状が多いが、ピンクや赤色等もある。不透明白釉下黒彩文陶器もかなり多く、素地は黄色で粉状と少し粗いものがある。不透明白釉下黒・緑彩文陶器は、素地は黄色で粉状で、量は少ない。不透明白釉下青彩文陶器は、素地は黄色で少ない。不透明白釉下緑彩文陶器は、素地は黄色で少ない。

青緑釉陶器は、素地は黄色である。緑釉陶器は、素地は黄色とピンクである。褐釉陶器は、素地はピンクが多く灰色もある。

(5)ジュルファル遺跡出土彩画陶器の層位的変化(図2～図5)

Stonepaste 素地は下層から上層になるに従い、しだいに比率が増加し、第2層でもっとも多くなるが、第1層は第4層と同じ程度に減少する。Clay+Stonepaste 素地は第7層と第6層が多く、第5層から2層まではしだいに減少するが、第1層で第7層と同じ程度に再び増加する。第1層で変化をもたらした理由は、第1層で Clay+Stonepaste 素地の青緑釉下黒彩陶器が多くなることである。

各層でもっとも多い種類は、第7層が透明釉下黒・緑彩陶器(Clay+Stonepaste)。第6層が透明釉下緑彩陶器(Clay+Stonepaste)。第5・4層が透明釉下緑彩陶器。第3・2層が青緑釉下黒彩陶器(Stonepaste)で、透明釉下青彩陶器（太線が主となる）が次である。第1層が青緑釉下黒彩陶器(Clay+Stonepaste)で、透明釉下青・黒彩陶器が次である。

中国染付の模倣はコバルト青色だけでなく、黒色や紫色、緑色を加わえた類似の手法の陶器もある。イスラームで伝統的に多く用いられた緑色が多かったが、黒色も用いられ、しだいに緑色が減少し、青緑釉下に黒色で染付を模倣することが流行するようになる。黒色に次いで青色（太線青彩）も目立つようになり、黒色と併せて青色が用いられるようになる。青色線の多くは太線によるもので、細線による青彩は図示した資料の他に数点しか出土していない。十五世紀前半が中国染付をよく模倣する時代であり、十五世紀後半以降は黒色を交えたイスラーム化も同時に見られる。イスラーム染付、とくに Stonepaste 素地の彩画陶器は、中央アジアやイラン東北部の製品で、ティムール帝国の工芸技術の隆盛と中国風の好みを反映している。個々の文様は中国染付と類似するものが多いけれども、全体的な雰囲気はイスラーム的であるのが、この時代の特徴でもある。

なお、青緑釉陶器には、第7、6、5、4層及び第1層から出土した内面に幅の広い縦線を薄く削った刻線蓮弁文をもつ碗がある。白色 Stonepaste 素地と Clay+Stonepaste 素地の両方にみられ、下層に多い。中国青磁蓮弁文と似た種類であるが、文様が内面にあることは大きな違いである。

5 遺跡出土品から見るイスラーム染付の特徴

東アフリカ沿岸のタンザニア国キルワ遺跡[Chittick 1974]から出土する透明釉下青彩陶器、透明釉下青・黒彩陶器、青釉下黒彩陶器は、ジュルファル遺跡出土の同種類の陶器と文様が類似する。海上貿易の発達と活発な地域単位の帆船貿易活動、都市を結ぶ商業活動と陸上の網目状の交易路の利用、都市民の物資の大量消費、国家間の商取引等が、広範囲に同じ産地の陶器を流通させた要因であろう。これは、イスラーム染付と中国染付の類似性の歴史的背景でもあり、中央アジア地域の政治的統合による移動の安全性等の影響も活発な交流を促した原因であった。

文様や図柄は同時代性の強い社会性をもつ流行であろう。イスラーム彩画陶器は、伝統的図柄や文様に加え、他地域で流行した同時代文様を柔軟に取り入れ、地域文化として消化した。イスラーム以前に遡る文様や図柄の要素の継承として、酒宴図、狩猟図、戦闘図、叙事詩図などの帝王や英雄を主題とした古代から地域社会が受容した文様等もある。物語性をもつ図柄はその解釈が人々に受け入れられる時代性と社会性があつたのだろうが、古代から継承された伝統的文様はイスラーム社会の中で、文化的変容により次第に姿を消す。新たな連続する植物文や幾何文の流行が進み、染付輸入による中国風文様の大流行によって、植物文を主体とする図柄構成の傾向はより促進された。他地域起源の写された文様は、主題が明確であつたり意味が解釈できる描写ではなく、文様としての独立性が高くなる。地域的伝統から切り離された文様は、それ自体として描写する文様の意味するものを語らない単なる装飾となる。ただし、中国でもすでに意味が薄れた描写となった主題もあり、装飾文様の世界的規模での伝播と地域的受容の歴史的展開を語る。

イスラーム圏に輸入された中国染付文様等の質は精緻なものと粗質なものがある。ジュルファル遺跡下層出土の中国染付文様は他で示した[佐々木 1998]。どちらを模倣するかで、同じ時代でも文様の質が変わる。イスラーム陶工が常に中国染付を直接の手本として文様を描いたとも思えない。イスラーム社会の中にすでに取り入れた文様として、共通してもつイメージを描いたのであろう。そのイメージは、イスラーム染付や他の工芸品の文様から来たかもしれない。文様の崩れを問題にする場合の難しさがここにある。文様は受容した社会の文化によって地域的変容を起こすことが多い。中国文化が好む文様雰囲気からイスラーム地域の人々が好む文様へ変化して当然であろう。一定の変化方向を描き出すのは容易であるが、実際の歴史的変化が個々のレベルでそのようであつたとは思えない。イランや中央アジアの染付とその類品は他地域よりも模倣度が高いようにみえる。模倣の程度には地域的な差が大きい。イエメンでは明染付を模倣しても染付に似てない。明代染付はイランにもイエメンにも大量に運ばれたことが遺跡出土品から明らかである。エジプトでも明代染付の模倣は流行した。中国からの距離や使用された中国陶磁器の量よりも、模倣する地域の技術程度によって類似度は変化したのだろう。イスラーム地域の陶器生産技術が基本にあり、その中で好みの文様を取り入れたのだろう。どの程度の技術を用いたかは、製品の社会的受け入れ度等にも関連するだろう。模倣の程度による分類を時代的・地域的な変化、模倣原型と様式的変化という視点から検討することも課題となる。

メイソンは岩石学的分析で、フスタート、サマルカンド、ニシャプール、スサ、ブハラ、タブリーズ、その他の地域に産地分類した[Mason 1996]。素地は以前から一般的だった黄色素地に加え、石英粒を多く含む Stonepaste (stonepaste bodies) がイラン高原部、中央アジア、シリア、エジプトで主に使用され、他地域では以前から使われた黄色素地と赤色素地が主にイスラーム染付にみられる。消費地のジュルファル遺跡出土品は産地が明確でない。窯跡出土品やある遺跡から大量に出

土する資料と比較し産地を類推している。白色 Stonepaste 素地のイスラーム染付は中央アジアやイラン東北部の製品と思われ、ティムール帝国の工芸技術の隆盛と中国風の好みを示すのであろう。同じ文様を描いた陶器でも素地が異なるものがあり、いくつかの産地で同文様を模倣したと推定でき、模倣の地域的広がりや製品の同時代性を示している。イスラーム施釉陶器素地は中国染付よりも一般に粗質で、大きめの鉱物粒がかなり見える。同時代のイスラーム無釉土器が粉状素地ときわめて粗い素地に分かれるのに比べれば、施釉陶器素地はほぼ均質化している。中国染付を模倣したイスラーム染付素地は白色で、同じような文様を描く他の黄色、赤色、灰色の粗い素地と比べると質がよい。ただし、文様の線の細かさや丁寧な筆致などの細部を見ると、描かれた文様からも質の違いがうかがえる。素地の質の違いにかかわらず、同じような文様が描かれるのは、高品質から低品質まで幅広い中国染付模倣陶器をイスラーム社会が受容した状況を示している。

元代は中国とイランの政治的結びつきが強くなり、美術工芸品の世界でも、中国風文様を取り入れる動きが目立った。絨毯にはこうした面が少ないといわれるが、絵画には中国の影響が強くみられる。技術的にも流行を受け入れやすい陶器の文様には、イスラームと中国の双方で互いの地域の雰囲気を取り入れるようになった。イル汗国(1256-1336)時代の陶器は前時代技術を継承したが、龍、鳳凰、獅子、蓮、牡丹、雲文等の文様も描かれ、中国からの影響も大きい。ラスター彩陶器もコバルト青彩部分が多くなり、建築用タイルの大量生産も彩画陶器発達に関連している。この頃のイスラーム染付素地には白いものがある。九世紀ころの白濁釉上青(藍)彩陶器は当時の一般的な陶器と同じ黄白色粉状素地であったが、十二～十三世紀以降の透明釉下青彩、黒彩陶器は白色素地(Stonepaste, Frit, Kashi)を用いた。中国陶磁器の白さを意識して素地に改良が加えられたといわれる。生産地は地域的偏りがみられ、比較的狭い地域で同じ種類を生産したことがわかる。

ジュルファル遺跡出土品からは、イル汗国滅亡頃からティムール朝(1370-1505)成立頃にかけて、釉下彩陶器、とくに透明釉下コバルト青彩(黒彩)陶器の発展または変革があったように見える。十四世紀後半以降十五世紀は中国風美術工芸品が流行し、元明代青花と似た文様を描く陶器も登場する。時代の風潮の中で作られた透明釉下コバルト青彩陶器は中国染付模倣陶器である。明代初期染付写し碗には、花文や葉文の中国特有の滲みまで筆で点を施して写す丁寧なものがある。碗の文様は明代染付の蔓草花文の写しが主流となり、風景画、人物、動物も描かれる。盤の中央部の主文、主文周辺の充填文、盤の周辺部や碗の口縁部の波文や格子文等の連続帯文は明代染付と類似するものもある。帯状に描かれる連続する波文や蔓草、植物文が器面全面を埋め、中国風の植物文が流行する。絵画、織物、漆器等の影響も工芸品にみられるが、中国染付の文様が中央アジア陶器の文様に直接的影響を与えたことが明瞭である。

しかし、ジュルファル遺跡上層出土品の盤周辺部、碗口縁部の波文や格子文等の連続帯文、碗や瓶等の腰部の蓮弁文等の連続文をみると、簡略化あるいはイスラーム化したものもある。塗り潰した部分、または幅広彩文部分にイスラーム伝統の細刻線で文様を描いたものを組み合わせたものがある。イスラーム風の区画文や幾何文もある。中国染付文様そのものの写しが少なくなり、地域化が進んだ文様の形式化に伴うのが蔓草刻線文であろう。中国染付の正確な写しと、文様の土着化の綱引きのなかで、大量のイスラーム染付とその類品が生産されたと推定できる。

ティムール朝は征服した都市から工芸技術者を強制的に移住させたことが既に知られるが、陶工もダマスカスから首都サマルカンドに移住させ、質の高い陶器を生産した。新たな陶器生産中心地の誕生である。サマルカンドやニシャプール、メシェド、シラーズ、タブリーズ、その他のパトロンのいる都市が中心になり、そこに技術者が呼び集められ陶器が生産されたと推定できる。一方で

廃れた産地も多かった。首都サマルカンドで生まれた陶器スタイルは広範囲の他産地に影響を及ぼしたようである。遠く離れた地域の陶器スタイルが類似する場合に、影響を与えた中心的な産地の存在を考慮することが必要である。エジプトでも中国染付と類似する透明釉下コバルト青彩陶器が生産され、フスタート遺跡から大量に出土した。この場合は中央アジアやイランの影響でなく、運ばれた中国染付を直接に模倣したと考えるべきである。

イスラーム陶器の分類で八・九世紀のアッバス朝を前期とし、十三世紀から十五世紀を後期とする考えがある。イスラーム染付の登場はイスラーム陶器の終焉であり、その後はイスラーム陶器独自の見るべきものがないという。この背景には人々の生活と文化の実体を捉える歴史的視点が欠けている。陶器は日常生活用品であり、美術品や高価な装飾品でないが、人々の生活レベルでの他地域との交流を知ることができる資料である。他地域の文様の模倣は染付を例にとっても、日本、中国、あるいはヨーロッパなど、世界各地でおこった流行であるが、染付模倣はその規模において前代を超え、文化史の興味深いテーマである。

文献

- Chittick, N., 1974, *Kilwa: an Islamic Trading City on the East African Coast*, vol. II, British Institute in Eastern Africa.
- Crowe, Y., 1978, A preliminary enquiry into underglaze decoration of Safavid wares, *Colloquies on Art and Archaeology in Asia*, no. 8, P.D.F. pp. 104-125.
- Crowe, Y., 1979, Persian variations on a Chinese motif, *Faenza*, Annata LXV, no. VI, pp. 390-394.
- Crowe, Y., 1979-80, Aspects of Persian Blue and White and China in the Seventeenth Century, *Transactions of the Oriental Ceramic Society*, Vol. 44, pp. 15-29.
- Crowe, Y., 1980, Some late Ming elements in Safavid ceramics, *Faenza*, Annata LXVI, no. 1-6, pp. 379-384.
- Golombek, L., Mason, R. B., Bailey, G. A., 1996, *Tamerlane's Tableware: A new approach to the Chinoiserie ceramics of fifteenth and sixteenth-century Iran*. Mazda Publishers and Royal Ontario Museum.
- Gray, B., 1948-1949, Blue and White Vessels in Persian Miniatures, *Transactions of the Oriental Ceramic Society*, no. 24, pp. 1-48.
- Grube, E. J., et. al., 1994, *Cobalt and Lustre: The first centuries of Islamic pottery*, The Nour Foundation, London.
- Hobson, R. L., 1932, *A Guide to the Islamic Pottery of the Near East*, British Museum.
- Lane, A., 1948, Sung wares and the Saljuq pottery of Persia, *Transactions of Oriental Ceramic Society*, 22: 19-30.
- Lane, A., 1957, *Later Islamic Pottery*, Faber and Faber, London.
- Necipoglu, G., 1990, From International timurid to Ottoman: A change of taste in sixteenth-century ceramic tiles, *Muqarnas*, VII, pp. 136-170.
- Reitlinger, G., 1938, The Interim Period in Persian Pottery, *Ars Islamica*, 5: 155-178.
- Sare, F., 1925, *Die Keramik von Samarra*, Die Ausgrabungen von Samarra II. 佐々木、大滝、波頭、訳「サマラの陶器」『金沢大学考古学紀要』21-24: 1994-1998.
- 佐々木達夫, 1990 「海のシルクロード遺跡ジュルファル」『文明発祥の地からのメッセージ』クバブ

ロ、88-91.

Sasaki,T.,1991, Vietnamese, Thai, Chinese, Iraqi and Iranian Ceramics from the 1988 Sounding at Julfar, *Al-Rafidan*, XII:205-220.

Sasaki,T.& H.,1992, Japanese Excavations at Julfar: 1988,1989,1990 and 1991 Seasons, *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies*, 22:105-120.

佐々木達夫,1993「アラビア湾の港湾都市遺跡」『金沢大学考古学紀要』20:1-44.

Sasaki,T.& H.,1994, 1993 Excavations at Julfar: *Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa*, 21:1-106.

佐々木達夫,1997「交易都市の発掘」『季刊考古学』61:60-63.

佐々木達夫,1998「14世紀の染付と釉裏紅はどのように出土するか」『榑崎彰一先生古希記念論文集』真陽社、467-477.

Scanlon,G.T.,1970, Egypt and China:Trade and Imitation, in *Islam and the Trade of Asia*, Richards,D.S.,ed., pp.81-96,Oxford.

Islamic Blue and White

SASAKI, Tatsuo

There is a blue decorated ceramics in Islamic wares which were made earlier than Yuan blue-and-white. These Islamic wares will be influenced by Chinese blue-and-white, and its decoration and shape which is inspired by Chinese ceramics begins to increase after 15th century. To consider the change of its dating, decoration and provenance, it is necessary to use the combination of artifacts excavated from a single layer which belong to historically informed remains. In this article the writer will use the artifacts excavated from Julfar. This remains can be classified in 7 layers and we have also classified Islamic glazed wares in three types by the difference of its fabrics; stonepaste, clay+stonepaste and clay. We have showed the weight and percentage of stonepaste and clay+Stonepaste in Table 1. The main type is shown in figure 1 (Islamic glazed ware with sotnepaste fabric and clay+stonepaste fabric from Julfar).

Stonepaste fabric ware seems to be rather well qualified. The colour of material is varied from white to greyish white which can be divided into white dense, white, pinkish white, yellowish white, pale green-white and greyish white. Clay+stonepaste fabrics varied from whitish colour to pale pink-white which contained quartz and little clay which makes the fabric powdery and soft. We have also divided this fabric by the containt of the clay; whitish yellow, pale pink-yellow, light yellow. Whitish yellow fabric contains the smallest amounts of clay while light yellow fabric contains the largest. Most amounted clay fabric in Islamic glazed ware can be classified into 8 types; creamy yellow powdery, creamy yellow coarse, pale green -yellow, greenish yellow, pinkish yellow, yellowish pink, pink, red. The glaze colour is opaque white, greenish white, yellow-brown, bluish green, brown.

The percentage of stonepaste fabric contained in each layer will increase as it reaches the upper layers, and the second layer contains the largest percentage while the layer 1 and the

layer 4 decrease into same level. The percentage of clay+stonepaste fabric is rather large in layers 7 and 6, and from layers 5 to 2 decrease while in layers 1 and 7 increase in the same level again. The reason for the change of the percentage in layer 1 is the increase of blue-green glazed ware with underglaze black decoration contained in clay+stonepaste fabric. The most amounted type in each layer is transparent whitish glazed ware with underglaze black and green decoration (clay+stonepaste fabric) in layer 7; Transparent whitish glazed ware with underglaze green decoration (clay+stonepaste fabric) in layer 6; transparent whitish glazed ware with underglaze green decoration in layer 5 and 4. In layers 3 and 2, blue-green glazed ware with underglaze black decoration (stonepaste fabric) is the largest in amount and transparent whitish glazed ware with underglaze blue decoration comes next. In layer 1, blue-green glazed ware with underglaze black decoration (clay+stonepaste fabric) is the largest in amount and transparent whitish glazed ware with underglaze blue and black decoration comes next.

By using the analysis of the data from artifacts from this archaeological site, the writer proposed the relationship between the fabric, paint and decoration of the 14th to 16th Islamic blue-and-white, and also the change of the quantity of each type.

表 ジュルファル遺跡出土のイスラーム施釉彩画陶器，層位別出土重量(g)

施釉陶器の種類 素地	L.1	L.2	L.2- L.2-3	L.3	L.4	L.5	L.6	L.7	その他
Stonepaste									
透明釉下青彩 White Dense	9.5	21.4	.	19.4	28.0	.	1.4	.	.
透明釉下青彩 White	25.3	47.3	35.3	32.2	2.2
透明釉下青彩 Grayish White	.	59.4	33.8	23.0	.	.	13.3	.	.
透明釉下青・紫彩 White	8.3	21.1	4.7	7.0	4.2	.	.	.	8.5
透明釉下青・黒彩 White Dense	126.3	49.4	4.5	.	67.6	.	.	.	65.2
透明釉下青・黒彩 White	.	.	38.7
透明釉下緑彩 White Dense	4.4	11.0	11.6	15.4	5.6	5.5	17.1	13.4	4.0
透明釉下緑彩 White	33.4
透明釉下緑彩 Creamy White 1	.	5.4	.	16.0	6.9	36.4	15.2	12.4	18.0
透明釉下緑彩 Creamy White 2	.	3.9	.	.	.	57.2	3.5	7.3	4.1
透明釉下緑彩 Pinkish White	8.3	.	.	27.3	.
透明釉下緑彩 pale Greenish White	2.3	3.1	.
透明釉下緑彩 Grayish White	.	.	2.0	4.4
透明釉下黒・緑彩 White Dense	.	5.0	.	.	13.1	10.5	1.4	5.3	.
透明釉下黒・緑彩 Creamy White 1	6.7	.	8.0	2.2	14.6
透明釉下黒・緑彩 Creamy White 2	62.5	.
透明釉下黒・緑彩 Pinkish White	.	5.8
透明釉下緑・白彩 pale Greenish White	3.2	49.2	.
透明釉下黒彩 Yellowish White	6.1
透明白釉 White Dense	2.1
透明白釉 White	3.0
透明白釉 Creamy White 2	.	.	.	3.6	2.8	60.6	.	5.9	.
透明白釉 pale Greenish White	.	.	.	1.6	.	.	4.9	.	.
青緑釉下黒彩 White Dense	4.8
青緑釉下黒彩 White	.	.	33.7
青緑釉下黒彩 Ceramy White 1	.	4.5	111.6	54.2	18.6	4.1	3.0	.	.
青緑釉下黒彩 Creamy White 2	13.5	.	116.0	6.6	29.8	.	18.3	.	.
青緑釉下黒彩 Pinkish White	35.1	94.4	161.4
青緑釉下黒彩 pale Greenish White	.	63.9	29.5	22.0	18.5	.	.	41.8	4.0
青緑? 釉下黒彩 White Dense	3.0	.
青緑? 釉下黒彩 White	10.3
青緑? 釉下黒彩 Creamy White 2	5.5	.	.	3.2	.
青緑? 釉下黒彩 Pinkish White	.	.	.	22.5	.	.	6.5	.	.
青緑? 釉下黒彩 pale Greenish White	8.6	.	7.5	0.8	.
青緑釉陶器 White	.	.	2.3	.	.	.	5.0	.	.
青緑釉陶器 Creamy White 1	36.9	.	.	9.9	.	1.4	.	.	.
青緑釉陶器 Creamy White 2	5.8	.	3.1	.	.	.	5.2	5.3	23.7
青緑釉陶器 Yellowish White	23.3	.	.	.	32.4	.	3.1	13.8	.
青緑釉陶器 Pinkish White	56.8	.	.	.
青緑釉陶器 pale Greenish White	10.7	.	11.1	57.5	.
Clay+Stonepaste									
透明釉下青彩 Whitish Yellow	52.2	.	6.0	.	36.8	.	12.5	.	.
透明釉下青彩 pale Pinkish Yellow	10.7	.	25.3	.	7.1	.	2.0	2.1	.
透明釉下青彩 light Yellow	25.9	12.4	10.1	.	37.6	.	154.3	60.1	.
透明釉下緑彩 Whitish Yellow	22.1	10.9	4.2	6.9	58.7	3.1	135.8	62.1	26.5
透明釉下緑彩 pale Pinkish Yellow	.	.	7.3	.	3.8	.	4.8	.	.
透明釉下緑彩 light Yellow	11.5	4.5	57.2	35.1	.
透明釉下黒・緑彩 Whitish Yellow	.	4.3	5.4	41.3	37.3	.	105.7	248.2	104.5
透明釉下黒・緑彩 pale Pinkish Yellow	1.6
透明釉下黒・緑彩 light Yellow	12.2	5.5	40.4	.	33.1	.	34.9	41.6	52.7
透明釉下緑・白彩 Whitish Yellow	.	1.3	.	3.2	.	.	1.2	1.4	.
透明釉下白彩 Whitish Yellow	43.4	.	8.2	17.0	28.8
透明釉下黒彩 Whitish Yellow	.	.	2.2	.	0.9
透明釉下黒彩 light Yellow	.	.	.	3.0	.	.	5.7	.	4.7
透明白釉 Whitish Yellow	12.6	38.7	.	5.0	6.9	.	.	4.1	3.8
透明白釉 light Yellow	.	8.1	7.4	.	6.1	6.1	6.3	12.5	0.9
青緑釉下黒彩 Whitish Yellow	26.8	6.2	.	3.1	68.2	.	53.0	.	22.2
青緑釉下黒彩 light Yellow	301.1	46.1	105.7	82.5	78.4	.	.	7.4	42.1
青緑? 釉下黒彩 Whitish Yellow	2.8	0.6	11.2	15.7	18.2	6.5	38.6	34.8	1.6
青緑? 釉下黒彩 pale Pinkish Yellow	.	.	0.9	.	.	.	3.2	49.0	.
青緑? 釉下黒彩 light Yellow	8.8	.	1.5	.	76.0	26.0	92.6	30.1	.
青緑釉陶器 Whitish Yellow	2.7	.	.	2.6	59.5	0.0	32.2	51.6	8.6
青緑釉陶器 pale Pinkish Yellow	3.9	.	3.3	1.4	31.5	7.8	.	.	.
青緑釉陶器 light Yellow	29.7	6.7	.	.	1.7	.	112.7	16.1	2.6

Table 1 Weight and percentage of Islamic glazed ware from Julfar

fabric, type	L. 1	L. 2	L. 2- L. 2-3	L. 3	L. 4	L. 5	L. 6	L. 7	その他
Stonepaste fabric									
Transparent whitish glazed ware with underglaze decoration									
blue decoration	34.8	128.1	69.1	74.6	30.2	0.0	14.7	0.0	0.0(g)
blue+purple decoration	8.3	21.1	4.7	7.0	4.2	0.0	0.0	0.0	8.5
blue+black decoration	126.3	49.4	43.2	0.0	67.6	0.0	0.0	0.0	65.2
green decoration	37.8	20.3	13.6	31.4	20.8	99.1	38.1	63.5	30.5
black+green decoration	0.0	10.8	0.0	0.0	19.8	10.5	9.4	70.0	14.6
green+white decoration	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.2	49.2	0.0
black decoration	0.0	0.0	0.0	0.0	6.1	0.0	0.0	0.0	0.0
plain	0.0	0.0	0.0	5.2	7.9	60.6	4.9	5.9	0.0
Blue-green glazed ware with underglaze decoration									
black decoration	48.6	162.8	452.2	82.8	71.7	4.1	21.3	41.8	4.0
Blue-green? glazed ware with underglaze decoration									
black decoration	0.0	0.0	0.0	22.5	24.4	0.0	14.0	7.0	0.0
Blue-green glazed ware									
plain	42.7	0.0	5.4	9.9	10.7	58.2	21.3	76.6	23.7
interior carved lotus	23.3	0.	0.	0.	32.4	0.	3.1	0.	0.
Clay+Stonepaste fabric									
Transparent whitish glazed ware with underglaze decoration									
blue decoration	88.8	12.4	41.4	0.0	81.5	0.0	168.8	62.2	0.0
green decoration	22.1	10.9	11.5	6.9	74.0	7.6	197.8	97.2	26.5
green+white decoration	0.0	1.3	0.0	3.2	0.0	0.0	1.2	1.4	0.0
white decoration	43.4	0.0	8.2	17.0	28.8	0.0	0.0	0.0	0.0
black+green decoration	12.2	9.8	45.8	41.3	70.4	0.0	140.6	289.8	158.8
black decoration	0.0	0.0	2.2	3.0	0.9	0.0	5.7	0.0	4.7
plain	12.6	46.8	7.4	5.0	13.0	6.1	6.3	16.6	4.7
Blue-green glazed ware with underglaze decoration									
black decoration	327.9	52.3	105.7	85.6	146.6	0.0	53.0	7.4	64.3
Blue-green? glazed ware with underglaze decoration									
black decoration	11.6	0.6	13.6	15.7	94.2	32.5	134.4	113.9	1.6
Blue-green glazed ware									
plain	36.3	6.7	3.3	4.0	75.0	0.0	144.9	53.9	10.4
interior carved lotus	0.	0.	0.	0.	17.7	7.8	0.	13.8	0.8
Stonepaste fabric, total									
Clay+Stonepaste fab., total	554.9	140.8	239.1	181.7	602.1	54.0	852.7	656.2	271.8(g)
total	876.7	533.3	827.3	415.1	897.9	286.5	982.7	970.2	418.3(g)
Stonepaste fabric									
Clay+Stonepaste fabric	36.7	73.6	71.1	56.2	32.9	81.2	13.2	32.4	35.0(%)
	63.3	26.4	28.9	43.8	67.1	18.8	86.8	67.6	65.0(%)
Weigt of painted ware(g)									
Stonepaste fabric ware									
total	255.8	392.5	582.8	218.3	244.8	113.7	100.7	231.5	122.8(g)
Clay+Stonepaste fabric, with decoration,									
total	506.0	87.3	228.4	172.7	496.4	40.1	701.5	571.9	255.9(g)
total	761.8	479.8	811.2	391.0	741.2	153.8	802.2	803.4	378.7(g)
Percentage of painted ware(%)									
Stonepaste fabric ware									
	33.6	81.8	71.8	55.8	33.0	73.9	12.6	28.8	32.4(%)
Clay+Stonepaste fabric ware, with decoration									
	66.4	18.2	28.2	44.2	67.0	26.1	87.4	71.2	67.6(%)
Stonepaste fabric									
Transparent whitish glazed ware with underglaze decoration									
blue decoration	4.5	26.7	8.5	19.1	4.1	0.0	1.8	0.0	(%)
blue+purple decoration	1.1	4.4	0.6	1.8	0.6	0.0	0.0	0.0	
blue+black decoration	16.6	10.3	5.3	0.0	9.1	0.0	0.0	0.0	
green decoration	5.0	4.2	1.7	8.0	2.8	64.4	4.7	7.9	
green+black decoration	0.0	2.3	0.0	0.0	2.7	6.8	1.2	8.7	
green+white decoration	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	6.1	
black decoration	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0	
Blue-green glazed ware with underglaze decoration									
black decoration	6.4	34.0	55.7	21.0	9.6	2.7	2.7	5.2	
Blue-green? glazed ware with underglaze decoration									
black decoration	0.0	0.0	0.0	5.7	3.3	0.0	1.7	0.9	
Clay+stonepaste fabric									
Transparent whitish glazed ware with underglaze decoration									

blue decoration	11.7	2.6	5.1	0.0	11.0	0.0	21.0	7.7
green decoration	2.9	2.3	1.4	1.8	10.0	4.9	24.7	12.1
green+white decoration	0.0	0.2	0.0	0.8	0.0	0.0	0.1	0.2
white decoration	5.7	0.0	1.0	4.3	3.9	0.0	0.0	0.0
black+green decoration	1.6	2.0	5.6	10.6	9.5	0.0	17.5	36.1
black decoration	0.0	0.0	0.2	0.8	0.1	0.0	0.7	0.0
Blue-green glazed ware with underglaze decoration								
black decoration	43.0	10.9	13.0	21.9	19.7	0.0	6.6	0.9
Blue-green? glazed ware with underglaze decoration								
black decoration	1.5	0.01	1.7	4.0	12.7	21.1	16.8	14.2

表1 ジュルファル遺跡出土のイスラーム陶器 (Stonepaste 素地と Clay+Stonepaste 素地)
層位別出土重量 (g) と比率 (%)

素地	施釉陶器の種類	L.1	L.2	L.2- L.2-3	L.3	L.4	L.5	L.6	L.7	その他
白色 Stonepaste 素地										
	透明釉下青彩陶器	34.8	128.1	69.1	74.6	30.2	0.0	14.7	0.0	0.0 (g)
	透明釉下青・紫彩陶器	8.3	21.1	4.7	7.0	4.2	0.0	0.0	0.0	8.5
	透明釉下青・黒彩陶器	126.3	49.4	43.2	0.0	67.6	0.0	0.0	0.0	65.2
	透明釉下緑彩陶器	37.8	20.3	13.6	31.4	20.8	99.1	38.1	63.5	30.5
	透明釉下黒・緑彩陶器	0.0	10.8	0.0	0.0	19.8	10.5	9.4	70.0	14.6
	透明釉下緑・白彩陶器	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.2	49.2	0.0
	透明釉下黒彩陶器	0.0	0.0	0.0	0.0	6.1	0.0	0.0	0.0	0.0
	透明白釉陶器	0.0	0.0	0.0	5.2	7.9	60.6	4.9	5.9	0.0
	青緑釉下黒彩陶器	48.6	162.8	452.2	82.8	71.7	4.1	21.3	41.8	4.0
	青緑? 釉下黒彩陶器	0.0	0.0	0.0	22.5	24.4	0.0	14.0	7.0	0.0
	青緑釉陶器	66.0	0.0	5.4	9.9	43.1	58.2	24.4	76.6	23.7
	(内数) 内面刻線文碗	23.3	0.	0.	0.	32.4	0.	3.1	0.	0.
Clay+Stonepaste 素地										
	透明釉下青彩陶器	88.8	12.4	41.4	0.0	81.5	0.0	168.8	62.2	0.0 (g)
	透明釉下緑彩陶器	22.1	10.9	11.5	6.9	74.0	7.6	197.8	97.2	26.5
	透明釉下緑・白彩陶器	0.0	1.3	0.0	3.2	0.0	0.0	1.2	1.4	0.0
	透明釉下白彩陶器	43.4	0.0	8.2	17.0	28.8	0.0	0.0	0.0	0.0
	透明釉下黒・緑彩陶器	12.2	9.8	45.8	41.3	70.4	0.0	140.6	289.8	158.8
	透明釉下黒彩陶器	0.0	0.0	2.2	3.0	0.9	0.0	5.7	0.0	4.7
	透明白釉陶器	12.6	46.8	7.4	5.0	13.0	6.1	6.3	16.6	4.7
	青緑釉下黒彩陶器	327.9	52.3	105.7	85.6	146.6	0.0	53.0	7.4	64.3
	青緑? 釉下黒彩陶器	11.6	0.6	13.6	15.7	94.2	32.5	134.4	113.9	1.6
	青緑釉陶器	36.3	6.7	3.3	4.0	92.7	7.8	144.9	67.7	11.2
	(内数) 内面刻線文碗	0.	0.	0.	0.	17.7	7.8	0.	13.8	0.8
白色 Stonepaste 素地・計										
Clay+Stonepaste 素地・計		554.9	140.8	239.1	181.7	602.1	54.0	852.7	656.2	271.8 (g)
Stonepaste・計		876.7	533.3	827.3	415.1	897.9	286.5	982.7	970.2	418.3 (g)
白色 Stonepaste										
Clay+Stonepaste		63.3	26.4	28.9	43.8	67.1	18.8	86.8	67.6	65.0 (%)
彩画陶器の重量 (g) (透明白釉陶器、青緑釉陶器は彩画がないので除く)										
白色 Stonepaste 素地彩画陶器										
	計	255.8	392.5	582.8	218.3	244.8	113.7	100.7	231.5	122.8 (g)
Clay+Stonepaste 素地彩画陶器										
	計	506.0	87.3	228.4	172.7	496.4	40.1	701.5	571.9	255.9 (g)
彩画陶器		761.8	479.8	811.2	391.0	741.2	153.8	802.2	803.4	378.7 (g)
Stonepaste 彩画陶器										
Clay+Stonepaste 彩画陶器		66.4	18.2	28.2	44.2	67.0	26.1	87.4	71.2	67.6 (%)
彩画陶器の比率 (%) (透明白釉陶器、青緑釉陶器は彩画がないので除く)										
Stonepaste										
	透明釉下青彩陶器	4.5	26.7	8.5	19.1	4.1	0.0	1.8	0.0	(%)
	透明釉下青・紫彩陶器	1.1	4.4	0.6	1.8	0.6	0.0	0.0	0.0	
	透明釉下青・黒彩陶器	16.6	10.3	5.3	0.0	9.1	0.0	0.0	0.0	
	透明釉下緑彩陶器	5.0	4.2	1.7	8.0	2.8	64.4	4.7	7.9	
	透明釉下黒・緑彩陶器	0.0	2.3	0.0	0.0	2.7	6.8	1.2	8.7	
	透明釉下緑・白彩陶器	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	6.1	
	透明釉下黒彩陶器	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0	
	青緑釉下黒彩陶器	6.4	34.0	55.7	21.0	9.6	2.7	2.7	5.2	
	青緑? 釉下黒彩陶器	0.0	0.0	0.0	5.7	3.3	0.0	1.7	0.9	
Clay+Stonepaste										
	透明釉下青彩陶器	11.7	2.6	5.1	0.0	11.0	0.0	21.0	7.7	

透明釉下緑彩陶器	2.9	2.3	1.4	1.8	10.0	4.9	24.7	12.1
透明釉下緑・白彩陶器	0.0	0.2	0.0	0.8	0.0	0.0	0.1	0.2
透明釉下白彩陶器	5.7	0.0	1.0	4.3	3.9	0.0	0.0	0.0
透明釉下黒・緑彩陶器	1.6	2.0	5.6	10.6	9.5	0.0	17.5	36.1
透明釉下黒彩陶器	0.0	0.0	0.2	0.8	0.1	0.0	0.7	0.0
青緑釉下黒彩陶器	43.0	10.9	13.0	21.9	19.7	0.0	6.6	0.9
青緑? 釉下黒彩陶器	1.5	0.01	1.7	4.0	12.7	21.1	16.8	14.2

黄色 or 赤褐色粘土素地
 不透明白釉下青彩陶器
 不透明白釉下緑彩陶器
 不透明白釉下緑・黒彩陶器
 不透明白釉下黒彩陶器
 不透明白釉陶器
 青緑釉陶器
 緑釉陶器
 褐釉陶器

イスラーム染付は、透明釉下青彩陶器（フリット）、透明釉下青彩陶器（粘土＋フリット）、及び不透明白釉下青彩陶器（粘土素地）を指すが、釉下彩画陶器という分類では緑彩陶器や黒彩陶器、及び多彩陶器等もいわゆるイスラーム染付の類品である。単色釉陶器は彩画陶器との比較のため表に掲げた。

遺構からの出土量は各レベルに含まれる。BL.1 は L.1, BBL.1 は L.2, L.3C, BL.3, BL.3B は L.3, L.4? は L.4, L.6A, L.6B, L.6C は L.6 に含まれる。その他には、Surface, Cleaning, および L.2.3, L.2. 以外の複合レベルが含まれる。

表 ジュルファル遺跡出土イスラーム施釉彩画陶器素地、層位別出土重量(g)

素地の種類	L.1	L.2	L.2- L.2-3	L.3	L.4	L.5	L.6	L.7	その他
Stonepaste									
White Dense	140.2	86.8	16.1	34.8	119.1	16.0	19.9	21.7	69.2
White	67.0	68.4	112.4	39.2	16.7	0.0	0.0	0.0	8.5
Ceramy Whitel,2	13.5	13.8	227.6	76.8	67.5	97.7	48.0	87.6	36.7
Yellowish White	0.0	0.0	0.0	0.0	6.1	0.0	0.0	0.0	0.0
Pinkish White	35.1	100.2	161.4	22.5	8.3	0.0	6.5	27.3	0.0
pale Greenish White	0.0	63.9	29.5	22.0	27.1	0.0	13.0	94.9	4.0
Stonepaste									
Grayish White	0.0	59.4	35.8	23.0	0.0	0.0	13.3	0.0	4.4
Whitish Yellow	147.3	23.3	37.2	87.2	248.9	9.6	346.8	346.5	154.8
palePinkishYellow	10.7	0.0	33.5	0.0	10.9	0.0	10.0	51.1	1.6
light Yellow	348.0	64.0	157.7	85.5	236.6	30.5	344.7	174.3	99.5

表 ジュルファル遺跡出土のイスラーム施釉陶器一覧、及び層位別出土重量(g)

素地	施釉陶器の種類	L.1	L.2	L.2- L.2-3	L.3	L.4	L.5	L.6	L.7	その他
Stonepaste										
	透明釉下青彩陶器	△	◎	○	○	△	.	△	.	.
	透明釉下青・紫彩陶器	+	△	+	+	+	.	.	.	+
	透明釉下青・黒彩陶器	◎	△	△	.	○	.	.	.	○
	透明釉下緑彩陶器	△	△	△	△	△	○	△	○	△
	透明釉下黒・緑彩陶器	.	△	.	.	△	△	+	○	△
	透明釉下緑・白彩陶器	+	△	.
	透明釉下黒彩陶器	+
	透明白釉陶器	.	.	.	+	+	○	+	+	.
	青緑釉下黒彩陶器	○	◎	◎	○	○	+	△	△	+
	青緑? 釉下黒彩陶器	.	.	.	△	△	.	△	+	.
	青釉陶器									
	青緑釉陶器	○	.	+	+	△	○	△	○	△
Clay+Stonepaste										
	透明釉下青彩陶器	○	△	△	.	○	.	◎	○	.
	透明釉下緑彩陶器	△	△	△	+	○	+	◎	◎	△
	透明釉下黒・緑彩陶器	△	+	△	△	○	.	◎	◎	◎
	透明釉下白彩陶器	△	.	+	△	△
	透明釉下緑・白彩陶器	.	+	.	+	.	.	+	+	.
	透明釉下黒彩陶器	.	.	+	+	+	.	+	.	+
	透明白釉陶器	△	△	+	+	△	+	+	△	+
	青緑釉下黒彩陶器	◎	○	◎	○	◎	.	○	+	○
	青緑? 釉下黒彩陶器	△	+	△	△	○	△	◎	◎	+
	青緑釉陶器	△	+	+	+	○	+	◎	○	△

Clay

不透明白釉下青彩陶器
 不透明白釉下緑彩陶器
 不透明白釉下緑・黒彩陶器
 不透明白釉下黒彩陶器
 不透明白釉陶器
 青緑釉陶器
 緑釉陶器
 褐釉陶器

◎ : 100.0 g 以上, ○ : 100.0 ~ 50.0 g, △ : 50.0 ~ 10.0 g, + : 10.0 g 以下 . : 0.0 g

表 ジュルファル遺跡出土のイスラーム施釉彩画 stonepaste 素地陶器層位別出土比率(%)

素地	施釉陶器の種類	L. 1	L. 2	L. 2- L. 2-3	L. 3	L. 4+L. 5	L. 6	L. 7	その他
Stonepaste									
	透明釉下青彩陶器	13.6	32.6	11.9	34.2	8.4	14.6	0.0	
	透明釉下青・紫彩陶器	3.2	5.4	0.8	3.2	1.2	0.0	0.0	
	透明釉下青・黒彩陶器	49.4	12.6	7.4	0.0	18.9	0.0	0.0	
	透明釉下緑彩陶器	14.8	5.2	2.3	14.4	33.4	37.8	27.4	
	透明釉下黒・緑彩陶器	0.0	2.8	0.0	0.0	8.5	9.3	30.2	
	透明釉下緑・白彩陶器	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.2	21.3	
	透明釉下黒彩陶器	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7	0.0	0.0	
	青緑釉下黒彩陶器	19.0	41.5	77.6	37.9	21.1	21.2	18.1	
	青緑? 釉下黒彩陶器	0.0	0.0	0.0	10.3	6.8	13.9	3.0	

表 ジュルファル遺跡出土のイスラーム施釉彩画 Clay+Stonepaste 素地陶器層位別出土比率(%)

素地	施釉陶器の種類	L. 1	L. 2	L. 2- L. 2-3	L. 3	L. 4+L. 5	L. 6	L. 7	その他
Clay+Stonepaste									
	透明釉下青彩陶器	17.5	14.2	18.1	0.0	15.2	24.1	10.8	
	透明釉下緑彩陶器	4.4	12.3	5.0	4.0	15.2	28.2	17.0	
	透明釉下緑・白彩陶器	0.0	1.5	0.0	1.8	0.0	0.2	0.2	
	透明釉下白彩陶器	8.6	0.0	3.6	9.8	5.4	0.0	0.0	
	透明釉下黒・緑彩陶器	2.4	11.2	20.1	23.9	13.1	20.0	50.7	
	透明釉下黒彩陶器	0.0	0.0	0.9	1.7	0.2	0.8	0.0	
	青緑釉下黒彩陶器	64.8	59.9	46.2	49.6	27.3	7.6	1.3	
	青緑? 釉下黒彩陶器	2.3	0.7	6.0	9.1	23.6	19.2	20.0	